

廃棄車椅子のリサイクルを中心とした環境教育と新たな教育の可能性の考察

うえ　た　まなぶ
上　田　学

I. はじめに

近年地球環境の問題が、人類の未来にとって避けられない解決すべき大きな課題となり、我々の前に立ちはだかろうとしている。そして、学校教育における環境教育の必要性が年々大きくなっている。

中学校技術・家庭科では、家庭廃水やゴミ問題を中心とした家庭科教育での実践は多いが、技術科教育の視点に立った環境教育の実践は非常に少ない。しかしながら、時代の急速な変化をもたらしてきた現代の技術と環境に及ぼしてきた影響力を考えると、技術科教育の視点から環境教育にアプローチする指導法を確立する必要があろう。これまでの生産効率を中心とした（生産技術を主体とした）技術科教育だけでなく、今後は人間工学的立場から技術教育を捉え⁽¹⁾、テクノロジーアセスメントや環境アセスメント⁽²⁾の視点を充分考慮した技術科教育が当然必要になってくるものと考える。次代の技術教育では、生徒に技術を生産効率的立場だけでなく、環境保全的立場から総合的に理解させることが重要である。すなわち、技術を正しく理解し運用する（或は運用を取り止める）ことができる能力【テクノロジーアセスメント】を育成すること、さらにその技術の運用（或は取り止め）によって、環境（自然並びに社会環境）に如何なる影響が現れるかを判断できる評価能力【環境アセスメント】を育成することが必要になろう。

本校では、平成4年度より「廃棄車椅子のリサイクルを中心とした環境教育」⁽³⁾を技術科教育の1指導法として実践してきた。廃棄車椅子とは、身体障害者福祉法で規定された車椅子の支給制度（車椅子は4～5年で更新）によって生み出される、古いがまだ使用に耐える中古車椅子のことである。この車椅子は、日本においては耐用年数が来ていると言う理由で、ほとんぞがスクラップになる運命にある。しかし、アジアなどの発展途上国では、この車椅子を再活用したいとの非常に強い要望がある⁽⁴⁾。授業において、これらの廃棄車椅子を生徒自身の手で点検整備あるいは修理させ、他の国で再活用させることができれば、それは、単にアルミ缶や牛乳パックなどを回収するだけのリサイクル活動ではなく、リサイクル活動の本来の姿である回収から再生にいたる最も苦労を要する部分を実体験させることができよう。そして、リサイクル技術とその運用並びに社会環境に与える影響を、体験的に学習できることになり、環境教育として非常に有意義な体験的教材になるであろうと考えた。そして技術科における環境教育を、生活及び社会環境に関わる教育として捉え、技術科教育における環境教育の試みとして、この「廃棄車椅子のリサイクル」を中心とした指導法を試行してきた訳である。

しかしながら、この3年間でも、実験授業を実施する中で、地域社会や多くの人々とのネットワークが広がり、新たなる教育への視点と可能性が明らかになり、指導計画や指導方法も変化してきた。本論文では、これまでの指導方法の概要及び変遷と、今後の教育への可能性について述べる。

II. 技術科教育における環境教育の考え方について

環境教育を実施する場合、その環境教育の方向性を示すものとして、ペオグラード宣言(1975)があり、次のように述べられている⁽⁵⁾。

「環境教育の目的は、世界の全住民が環境とそれにかかわる問題に気づき感心を持つと共に、当面する問題の解決や新たな問題の起きることを未然に防止するために個人及び集団として必要な知識・技能・意欲・積極的な関与を身につけることにある。」

また、次の6つの具体的目標をあげている。

- ① 関心 (Awareness)
- ② 知識 (Knowledge)
- ③ 態度 (Attitude)
- ④ 技能 (Skills)
- ⑤ 評価能力 (Evaluation Ability)
- ⑥ 参加 (Participation)

学校教育現場の環境教育においては、地球環境問題などのあまりにも実生活からかけ離れた大きい問題のみで指導するのではなく、もっと身近な生活環境に関わる体験学習を通して指導することが望ましい。実体験を伴った価値観の育成と、それに根ざした評価能力の育成を環境教育の基盤にすることが非常に重要であると考える。すなわち、環境教育でよく言われる「Think gloabally, act locally」をいかにして学校教育の中で実践すべきかが非常に重要になる。

技術科における環境教育では、先にも述べたように、テクノロジーアセスメントや環境アセスメントの視点に基づく教育を重視するべきであると考える。しかし最も難しいのは、生徒に評価基準になる価値観の多様性を理解させることになろう。既に著者は、「環境問題をテーマとしたソフトウェア製作」⁽⁶⁾⁽⁷⁾の授業を実施してきた。具体的には、情報基礎教育の授業で、ソフトウェア製作における製作課題として、地球環境の問題の中から1つの問題を生徒に取り上げさせ、各自が選択した問題に関するソフトウェアを生徒自身で製作・発表してきた。その結果、地球環境の問題に対する生徒の興味・関心が高揚し、情報活用能力の1つとして、文献調査による情報収集能力やコンピュータによる表現能力の育成に効果があった。しかしこの実験授業は、情報基礎教育という点では、「コンピュータを操作

すること」や「自作ソフトウェアを製作すること」などの直接体験を中心とした体験授業であるため効果があるものの、環境教育という視点では、環境に直接影響を与えるような技術を用いる指導がなく、あくまでも文献調査に終始するため、実体験を通した価値観や評価基準を育成できないという大きな欠点があり、不十分さを感じていた。

現代に生きる中学生には、生まれながらにして高度に発達した文明社会が存在し、ごく当然のものとして、様々な技術や技術によって生み出された機械を利用して生活している。機械がない時代を知らない中学生にとっては、機械のありがたさ自体も認識せず、それゆえ機械の本当の長所や欠点或は機械が社会に及ぼしてきた影響力なども評価できないのが現状であろう。それは、現在利用している機械の多くが、年々複雑になり、ブラックボックス化してきている現状も、少なからず影響を及ぼしていると考えられる。環境教育においては、生徒にとって理解しやすい比較的簡単な技術或は技能を用いて指導したい。

そこで、技術科における環境教育では、次のような体験的指導目標が必要になる。

- ① 具体的な技術や技能を習得し、技術の意味や影響力を実感させる。
- ② 環境保全に寄与できる技術の運用方法を、体験的に理解させる。
- ③ 実践した環境保全技術が、自然或いは社会環境に与えた影響を評価させる。
- ④ テクノロジー及び環境アセスメントの重要性を理解させる。
- ⑤ 体験授業により、環境問題に対する多様な価値観の存在を知る。

以上の目標を達成できる教材として、「廃棄車椅子のリサイクル」を中心とした環境教育を計画した。車椅子は、比較的簡単な構造をしており、分解・整備するにしても簡単な工具でできるため、中学生にとっても扱いやすい体験教材となると考えたからである。

III. 実験授業

3-1 指導目標及び指導計画

平成4年度より、中学3年生男子96名（本校44～46期生、24名×4クラス）の普通授業として実施した。なお平成4年度は、授業の指導目標は次のように設定した。

- ① 車椅子の構造の理解と走行性及び安定性の理解
- ② 車椅子の分解修理・整備方法の習得と重要性の理解
- ③ 車椅子の操作法の理解
- ④ 車椅子の視点から見た都市（生活）環境の理解
- ⑤ 車椅子のリサイクルが社会環境に及ぼす影響の理解

平成4年度は、表1に示すような指導計画で実施した。具体的には、分解修理・整備の授業は、班に1台（1班は、生徒4人）廃棄車椅子を与え、余った車椅子から、不足している部品や破損している部品を代用させた。なお、溶接の必要な箇所は、教師が電気溶接で修理した。車椅子の体験授業では、各クラスで整備の良い車椅子を4台選び使用した。1台は、6人で担当させた。1人が車椅子に乗車し、もう1人は介助役として車椅子の後

ろから安全に走行できるように補助させた。他の4人は、駅の階段などで車椅子ごと持ち上げて運ばなければならないときの補助役とした。同時にこの4人には、メジャー(2m)2個、ダイヤル式スラントルール、記録用紙を持たせ、車椅子が自力で乗り越えられる段差の限界高さ、車椅子が通れるスペース、自分で登ることのできる傾斜角度の限界などを測定させ、都市環境について調査させた。またこの6人の役割分担は、出発してから5分毎に交代させ、全員が全ての役割を経験できるように指導した。なお体験させたコースは、JR環状線寺田町駅から桃谷駅を電車で移動、桃谷駅下車後は徒歩で学校まで帰るコースとした。

表1 平成4年度指導計画

時 間	授 業 の 内 容
1・2	授業の目的、現代における車椅子、車椅子の種類と構造、廃棄車椅子の状況
3・4	車椅子のスケッチ(車椅子の観察)、車椅子の形状と目的(身障者の状況)
5・6	車椅子の分解修理①、修理に必要な工具と使い方、椅子としての安定性
7・8	車椅子の分解修理②、タイヤの構造とパンク修理の方法、車としての走行性
9・10	「車椅子を体験しよう」(兼:走行テスト)、車椅子から見た都市環境
11・12	車椅子から見た生活環境、弱者にとっての環境、リサイクルの問題点

平成5年度からは、情報基礎教育の指導の必要性を感じ、CAIコースウェア構築用に開発されたシェルシステムとビデオカメラを用いて、車椅子の体験授業をまとめた指導段階を加え、次のような指導目標に改善した。

- A. 機械としての車椅子の構造の理解
- B. 分解・修理が及ぼす影響の理解
- C. 車椅子(障害者)の視点からみた都市及び社会環境の理解
- D. コースウェア構築用シェルシステムを用いた情報処理能力の育成
- E. 環境問題における廃棄車椅子のリサイクルの意味の理解

これにともない、授業全体の指導時間を大幅に増やし、表2に示すような指導計画を大きく4つのSTEPとして計画した。各STEPの、意味はおよそ次のようになる。また、新たに加えたコースウェア構築用シェルシステムによる体験学習のまとめの指導のため、車椅子の体験学習における生徒の役割分担を平成4年度の係りに加え、カメラ、VTRカメラによる記録係を新設した。平成6年度の指導計画(車椅子の体験コースは、寺田町駅～天王寺駅に変更)も、平成5年度とほぼ同じであり、中心となる授業の様子(写真1～6)に示しておく。

- STEP 1 : 環境問題及びリサイクル全般に関する学習(ビデオ番組、プリント学習)
- STEP 2 : 車椅子の構造及び分解・修理の学習(プリント学習、分解、修理の実習)
- STEP 3 : 車椅子の体験学習とビデオでの記録(街での車椅子の操作体験学習)
- STEP 4 : 車椅子の体験学習のまとめ(シェルシステムによるまとめ学習)

表2 平成5年度授業計画

STEP	時限	授業内容
1	1・2	今年度の授業計画概要、地球環境問題の重要性の認識
	2・3	地球環境問題全般の学習（NHKビデオ『環境戦争が始まる』）
	4	環境問題とリサイクル活動の関わりについて
	5・6	森林の働きと資源（林野庁ビデオ『森林とみんなの暮らし』）
	7・8	アルミ缶のリサイクル、ゴミ問題との関わり
2	9・10	車椅子の不足（NHKビデオ『車椅子ネットワーク作り』）、スケッチ
	11・12	車椅子の構造の学習、車椅子の分解（分解手順と部品管理）
	13・14	車椅子の分解、キャスターの構造と動作、車椅子の整備（錆落し）
	15・16	車椅子の整備（錆落し、タイヤ交換）、錆のでき方、チューブの構造
	17	車椅子の組立（キャスター、駆動輪、シートなど）
	18・19	車椅子の組立完成及びグリスアップ、アンケート調査
3	20	夏休み明けの車椅子の点検と整備
	21・22	車椅子の体験学習の予告と走行テスト（操作練習とガタツキの点検）
	23・24	車椅子の操作体験（学校→＜歩く＞→寺田町駅→＜電車＞→桃谷駅→＜歩く＞→学校）、都市環境の実体調査、アンケート調査
4	25・26	コースウェア作成用シェルを用いた「体験のまとめ」のビデオ編集
	27・28	コンフィグレーション及テキストデータ作成（ワードプロセッサで）
	29・30	テキストデータの完成、VTRデータの作成とVTR画像のチェック
	31・32	ソフトの完成（VTR、テキスト、コンフィグデータ）、アンケート
	33・34	「車椅子から見た都市環境」の自作ソフトウェア発表会
	35・36	車椅子から見た生活（都市）環境のまとめ（写真と解説文による）
	37・38	タイへ贈る身障者へのメッセージカードの作成
	39・40	2学期末テストの解答と解説、授業の感想文
	41	授業のまとめ（Think Globally, Act Locally）

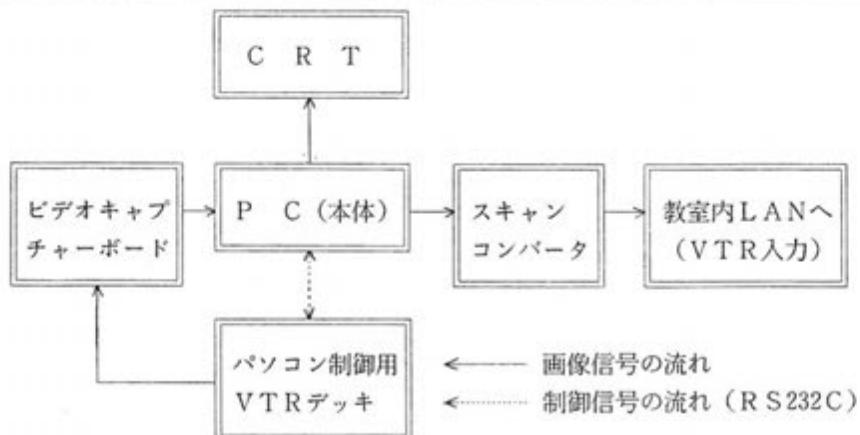


図1 コースウェア構築用シェルシステム（ハードウェア）



写真1 車椅子の分解修理・整備



写真2 車椅子の体験①（歩道橋）



写真3 体験②（通行可能幅の測定）



写真4 体験③（道路の傾斜の測定）



写真5 VTRの編集



写真6 まとめのソフト発表会

3-2 授業の評価

実験授業の評価をするために、STEP 2～4の終了時点で、アンケート調査を行い、コンピュータによる因子分析と感想文等で、各STEPにおける、授業に対する生徒の興味関心の変遷を分析した結果、およそ次のようである。

STEP 1では、最近の環境問題に対する関心の高さやビデオ番組の内容の良さから、生徒の興味関心は高かった。特にビデオ番組からは、環境問題の重要性を認識しているようであった。

STEP 2では、なぜ環境問題と車椅子の分解修理が結び付くのか、実感できないでいる生徒も多かった。実習を始める前では、こんな発言も聞かれた。「何で僕らが、車椅子の分解修理をせないかんのか全然理解できません。」、「ほんまに、こんな汚い車椅子が、ちゃんと直るんですか？」などである。しかし、いざ実習に入ると、分解することに意地になる者、錆を落として磨くことに意地になる者、不満を漏らしていた生徒たちも以外に熱心に取り組んでいた。

STEP 3では、生徒の視点が大きく変化したと考えられる。本校は、大阪の南の玄関である天王寺に位置しており、生徒にとっての生活環境とは、コンクリートに囲まれた大都会そのものである。その中で、日頃は何も感じず当たり前になっていた都会の構造物が、車椅子に乗った途端に異なって見えたのである。「車椅子を動かすのは、ほんまにむちゃくちゃ大変ですね。」、「階段で車椅子を持って上るのは、ほんとに重かった。」、「電車の中で、他の人にじろじろ見られて恥ずかしかった。」、「先生、駅でおばさんに優しくされて、ほんとに嬉しかった。」など、体験授業を終えた生徒たちは、日々にこのような感想をもらっていた。5cmも満たない小さな歩道の段差、雨水を流すための僅かな道路の傾斜、駅の階段、信号の点滅時間など、通常の都市環境そのものが、車椅子にとっては障害になることを実感していた。また、散乱する放置自転車や看板のはみ出し、じろじろ見る一般の人々の視線や反対に優しい言葉をかけられたことなど、人間の行動や対処のしかたも障害者にとっての環境の大きな要因になることも認識し始めるようになった。また、体験授業の走行中にキャスターのネジが脱落して、2～3台の車椅子が破損した。このことで、確実な修理の大切さやその影響も再認識していた。

STEP 4で、生徒の作った学習のまとめ（資料①、資料②）を見ると、STEP 3での車椅子の体験学習が、生徒の意識の変革に大きく影響を与えたことが分かった。それまで、消極的な態度の生徒も、頭だけの知識ではなく、障害者の苦労やもし自分がその立場になったときの苦労を実感として捉えることで、授業全体の意義に関して積極的に評価するようになり始めていることも分った。

さてここ2年間、最終的には、生徒が授業で整備した再生車椅子は、朝日新聞大阪厚生文化事業団を通してタイへ寄贈され（平成5年度10台、平成6年度18台）、現地の障害者の方に手渡されることになった。そして、さらに生徒たちは授業の意義を確認していた。

これらの評価から、廃棄車椅子のリサイクルを中心とした指導方法は、技術教育における環境教育として、非常に有効な指導方法であることが明らかになった。なお、因子分析の結果からは、幾つかの興味深い結果が得られたが、これに関する詳しい報告は、別報に譲る。

IV. 新たなる教育の可能性

これまで行ってきた指導法は、技術科教育に於ける環境教育として、一応の成果が期待できるように成ってきたが、まだまだ指導法を改善する余地が多くある。また、単に環境教育としての展開ではなく、新たなる教育の可能性を秘めている部分も多くあり、現在実施できているものと、これから可能なものを幾つか述べておく。

4-1 ボランティア活動として

平成2年度から、本校では生徒会活動の1つとして、「ボランティア活動」を実施している。活動内容としては、アルミ缶、牛乳パック、古切手、古着、使用済みテレホンカードなどの回収とその収益等を社会福祉団体に寄付することである。その一貫として、現在ボランティア同好会が設立され、生徒の中の有志が、廃棄車椅子の回収と再生車椅子の寄贈準備などの活動にあたっている。

廃棄車椅子の回収方法としては、車椅子製造会社に引き取られている廃棄車椅子を、トラック、リヤカー、電車などで集めるのであるが、他のものより苦労するため、リサイクルの現状を知る上では、非常に意味があると考える。寄贈準備に関しても、車椅子1台1台を、段ボールで梱包するのであるが、海外に向けて送るために、かなりしっかりと梱包が必要である。また、その車椅子用の段ボールを集めることから始める必要があり、これも苦労があるゆえ、ボランティア活動として意味があると考える。それは、集める活動がボランティア活動の主体になると、時として「何のために集めているのか」という目的意識が欠如してしまう場合も考えられる。しかし、この廃棄車椅子のリサイクルでは、活動の目的や相手先が明確であり、生徒にとって苦労が多い反面、喜びや意義も大きいようである。さらに、アルミ缶回収などの目的を、車椅子の輸送費や修理費を作り出すことすれば、回収の目的が明確になる。本校では、平成5年度にボランティア同好会がアルミ缶回収で得た収益2万円を朝日厚生文化事業団に、車椅子の輸送費の援助として寄付した。

このように、車椅子の分解修理を授業以外で行えば、充分生徒会或は児童会の活動として、他の学校でも行える可能性が大きい。



写真7 アルミ缶回収の収益の寄付（平成5年度）

4-2 地域社会からグローバルネットワークへ

平成2年度から当初生徒会活動として始まった廃棄車椅子のリサイクルは、平成4年度から技術の授業として受け継がれている。この間、地域の様々な人々や団体の理解と協力により発展し、現在ではタイ、バングラデシュ、南アフリカ共和国といった海外にまでネットワークが広がってきた。（図1参照）

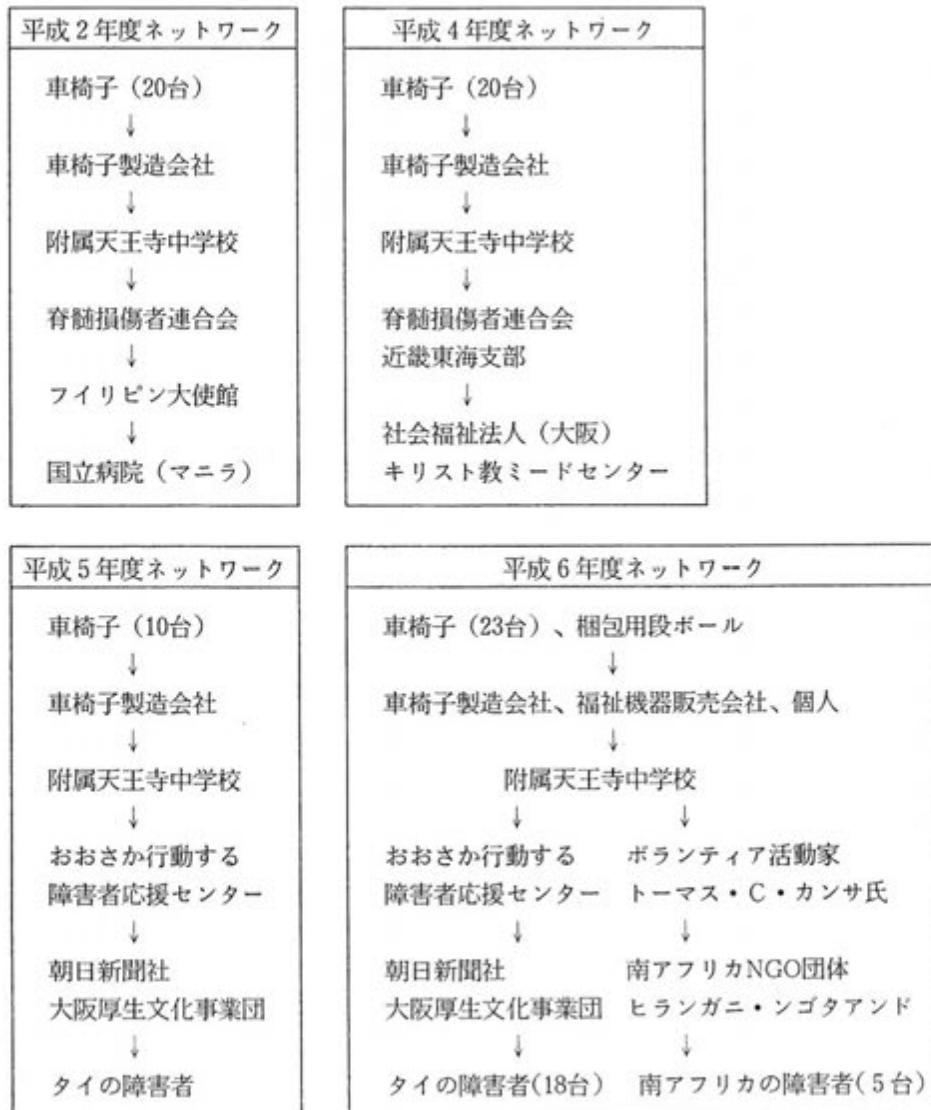


図1 廃棄車椅子のリサイクルに関わるネットワークの変化

非常に喜ばしいことには、単に廃棄車椅子を貰い受けたり、寄贈したりするだけでなく、様々な立場の人々から、これらの活動に関わって生徒に講演をして頂ける機会を持てるようになったことである。

平成5年度には、平成2年度からこれまでに、毎年廃棄車椅子を多数提供して頂いているエスケー製作所の木下堅介さんに、「車椅子を製作していて学んだこと」という題目で、中学3年生を対象に講演をして頂いた。日本における車椅子の歴史や車椅子製作の苦労と喜び、ベトナムのシャム双生児として有名な、ゲン・ドクちゃんのために特別に製作した車椅子の話などを聞いて、生徒たちは関心を示した。

平成6年度には、再生車椅子の最終点検をして頂いている、おおさか行動する障害者応援センターの米玉利祐資さんに、中学1年生を対象とした同和教育の一貫として、「私の生き方」という題で、講演（写真8）頂いた。脳性小児麻痺による重度障害者としての経験や苦労、特に、渡米して重度障害者として全米でも初めてスクーバダイビングの資格を得た体験談やチャレンジ精神に溢れる人生観は、生徒たちの心に強く響いていた。また、南アフリカ共和国出身で、現在日本在住のトマス・C・カンサさんには、中学3年生を対象に、「どの子もわたしの子」という題で、アパルトヘイト下での経験やボランティア活動（資料③）に対する考え方を講演頂いた。特にアパルトヘイト下での体験談は、生徒たちに国際理解の必要性を育成する上で、大きく影響を与えた。



写真8 米玉利さんの講演と熱心に聞き入る生徒

また授業以外でも、平成6年の春、朝日厚生文化事業団が出催する高嶺豊さん（「国連アジア太平洋経済社会委員会の障害者問題専門官、朝日厚生文化事業団が主催する「アジアに車椅子を贈る」活動における現地スタッフの1人、先述のNHKビデオ「車椅子ネットワークづくり」の主人公）の帰国記念講演会の中の座談会「高校生から見たアジアの福祉」（資料④）に、卒業生が高校生のメンバーの1人として招待を受けた。また平成6年の夏には、UNEPが主催して島根で開催された「国連地球環境子供サミット・インしまね」（資料⑤）に、大阪の代表として生徒が2名招待を受けた。このように、車椅子のネットワークから人へのネットワークとなり、授業だけでなく、生徒にとって学校以外に学習の場が広がってきたことは、非常に望ましい状況である。

4-3 高齢化社会の到来に向けた新しい教育の可能性

最近の「21世紀に向けての課題となること」に関する調査では、先進諸国の多くは、第1位として「環境問題」を挙げている。しかし、日本では第1位は「高齢化社会の到来」であり、「環境問題」は第2位である。国民の関心は、身近に迫った「高齢化社会」或いは「少子社会」に対する懸念が先行していることが伺える。

この近い将来の課題に対して、行政レベルでの対策も本格化してきている。通産省の外郭団体であるNEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）は、「福祉機器はもうからない」といった風潮の産業構造に対して、平成5年10月に福祉用具法が施行されたのに伴い、中小企業の技術開発力を促進させるため、障害者及び高齢者向けの福祉機器の開発に助成金を交付する事業（資料⑥）に乗り出している。これは、福祉機器がこれまでのような特別な機器ではなく、近い将来確実に我々の身近な機器の1つになり得ることを示唆していると考えられる。また、大阪府では全国に先駆けて「福祉のまちづくり条例」を施行してきており、この実績が、建設省や厚生省の働きかけにより、全国レベルでの「ハートビル法」（高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の建築の促進に関する法律、資料⑦）の施行へつながってきている。これもまた、近い将来福祉事業が一般化することを示唆している1つであろう。

このような状況を考えると、少なくとも「車椅子の操作を体験してみる」ことは、小学校及び中学教育の中で、普通教育の1つとして益々必要になるのではなかろうか。児童や生徒だけでなくその家族や親戚まで含めた場合、福祉機器を必要とする人が、身近な存在となることが予測できる。例えば、家族の1人に車椅子を必要とする人が存在したならば、その人が快適に過ごせる住環境の整備のためには、住居自体の構造を大幅に改善しなければならない。これは、家庭科教育における住居領域の教育と発展できる可能性が大いにある。また、車椅子操作の苦労を体験すれば、社会福祉の中で必要性が叫ばれる「マンパワー」の育成にも効果があろう。特に、街に出て車椅子の走行を体験した生徒は、一様に駅の周辺の放置自転車の弊害について再認識している。それは、車椅子用のスロープの出入口に自転車が放置されていることにより、設備自体が機能しなくなっている現実を体験するからである。階段があっても、周囲の人々が持ち上げて運べば、段差がないのと同様であることに生徒たちは気付くようになった。これは、ハード面の整備よりソフト面の普及がより重要であることを、示唆している現象の1つである。欧米の福祉先進国のようなバリヤフリーの社会環境を形成する上では、施設・設備の充実と共に、周囲の人々の行動が環境の1因となり得ることを理解するきっかけとなっていた。

V・おわりに

本研究では、技術科における環境教育の試みとして、「廃棄車椅子のリサイクル」を中心にしてこの3年間授業を行ってきた。その結果、技術や環境を捉える視点が1つではないことや技術が環境に及ぼす影響を理解させる上では非常に効果的であった。

さらに、車椅子を1つの教材として見た場合、開発教育、家庭科教育、福祉教育、同和教育、国際理解教育などへ発展できる可能性を大いに含んでいることが明らかになった。発展途上の研究ではあるが、もし、本稿を読まれ興味・関心があるようならば、単に中学校の技術教育に留まらず、小学校など様々な教育現場で新たなる試みが行われることを期待したい。

謝　　辞

授業を行うにあたり、多くの助言を頂きました大阪教育大学技術教育講座の橋本孝之先生、廃棄車椅子を多数提供して頂きました株式会社エスケー製作所の木下堅策氏並びに株式会社北島藤次郎商店、車椅子用の段ボールを提供して頂きましたヤマシタコーポレーション、日本UILチアード、車椅子の寄贈についてお骨折り頂きましたおおさか行動する障害者応援センターの米玉利祐資氏、九富氏、朝日新聞大阪厚生文化事業団の佐野信二氏、石田易司氏、益田　博氏、南アフリカ出身の英語講師トーマス・C・カンサ氏、福祉機器関係の資料を提供して頂きました新エネルギー・産業技術総合開発機構の後藤芳一氏にはたいへんお世話になりました。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

- (1) 橋本孝之 (1990) 技術科教育と人間工学に関する一考察、日本産業技術教育学会第33回全国大会講演要旨集、20頁
- (2) 沼田　真 (1982) 環境教育論、東海大学出版会、188-198頁
- (3) 上田　学 (1993) 中学校技術科における環境教育の一試行（第1報）、大阪教育大学紀要、第V部門、42巻1号、101～113頁
- (4) 桐原一義 (1990) 捨てないで廃棄車イス、SSKO脊損ニュース2月号
- (5) 佐島郡巳、堀内一男、山下宏文 (1992) 学校の中での環境教育、国土社、8-15頁
- (6) 上田　学、橋本孝之 (1991) 中学校技術科「情報基礎」教育に向けての一試行（第4報）、大阪教育大学紀要、第V部門、39巻2号、261-274頁
- (7) 上田　学 (1993) グラフィックスを中心とした情報基礎教育、大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校・附属高等学校天王寺校舎研究集録、第35集、117-129頁

資料① VTRのデータとコースウェアによる体験のまとめ（生徒作品）



写真9 シェルの初期画面

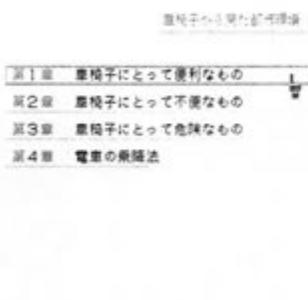


写真10 シェルの目次の画面



写真11 VTR起動前の画面



写真12 VTR起動準備中の画面



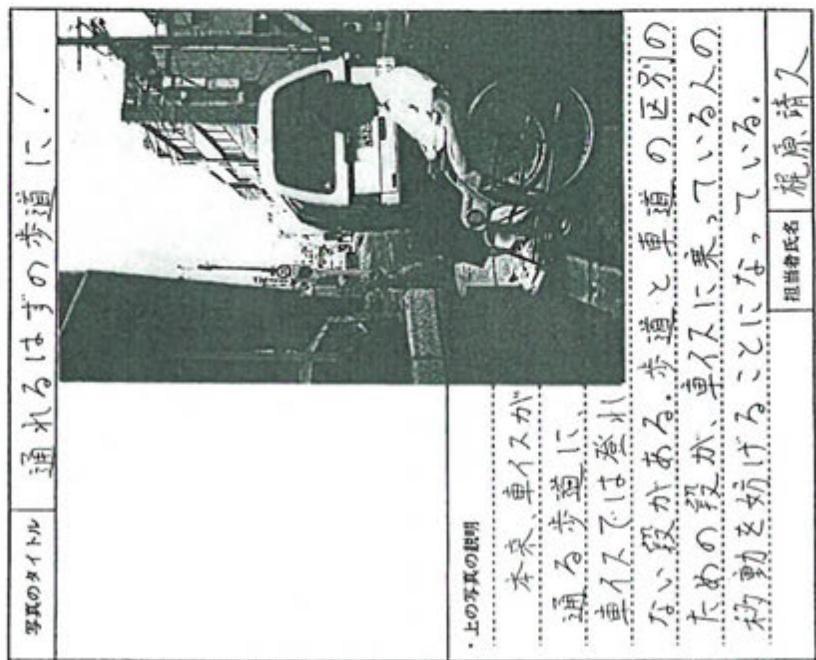
写真13 VTR起動後の画面①



写真14 VTR起動後の画面②

●車イスから見た生活（都市）環境

視点 意外と気付かないところ



資料② 写真によるまとめ（生徒作品）

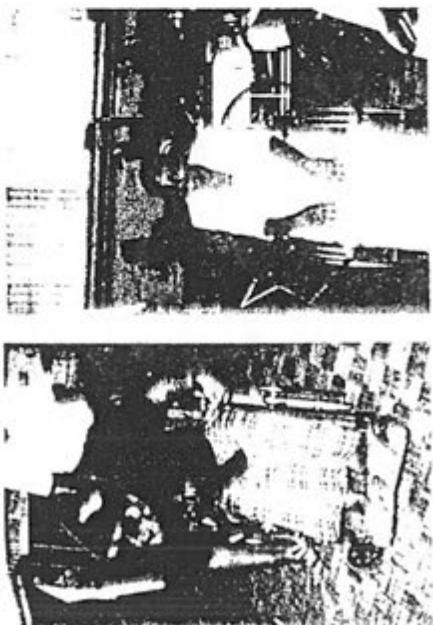
写真のタイトル	車の心しさ
視点	障害者の立場から
写真のタイトル	車椅子の歩道にて
視点	意外と気付かないところ

上の写真的説明
この写真は切符販賣機の前で撮影されたものです。バスの運賃表が表示されている。この人が車椅子で、運賃表を見るところが非常に苦しいです。車椅子の方々がうつむいており、車の心しさを感じます。

担当者名 水谷、さや

親愛なる友人たちへ

車椅子ありがとうございました。



資料③ トーマス・C. カンサさんのボランティア活動概要

昨年から始めた「障害者支援プロジェクト」にご協力いただきありがとうございました。甲斐と松葉枝を送ることによって、多くの障害者を助けることができました。最初は4台の車イスを、2回目は3台の車イスと230キロの衣類を3回目は衣類200kg、文具50kg、車イス3台台、松葉枝24setを送りました。輸送費込出にあなたは、神戸の「DEAR LADIES CLUB」、全文、女性団体、小グループや、個人の方々がご協力くださいました。今後も皆さんが、障害のある人たちとの分かち合い、を継続してくださるよう願っています。

第3回目は8月に車イス、松葉枝と350キロの衣類を送る予定です。12月には以上のものに加え、ミシンと生地の輸送を考えています。南アフリカでは成人女性の57%以上が基本的な教育すら受けていないのが現状ですが、技術の習得は遅しからの自由につながります。これまで進めてきた「子供たちの教育支援プロジェクト」の一環として成人女性の支援も始めます。新生南アフリカの開拓に女性も経済面から参加できるようになります。また年末には対象をアフリカの他の地域や、アジア諸国に広げる予定です。

援助を必要としている女性や子供たちの夢を叶えられるのは「あなた」です。ご理解とご協力をお願いいたします。

愛をこめて

トーマス・カンサ

住 所：大阪市平野区平野宮町1-6-10の503
TEL: 06-793-8023

南アフリカの子供たちのドリーム・メーカー（夢を作る人）になつてみませんか？
講義「ドリーム・メーカー」の収益金は支援活動に使われます

資料④ 講演会「アジアの障害をもつ仲間とともに」の案内

講演会「アジアの障害をもつ仲間とともに」

ESCAP障害問題専門官 高橋 豊さんを聞く

アジア太平洋地域には、世界の人口の約3割が生息し、障害者は約3億人いるほど確定されています。この地域は、危険な自然災害をしています。しかし、まだ多くの途上国があり、その中で、障害者の割合は常に増加している現状にあります。

国連アジア太平洋開発社会委員会（ESCAP）は、社会（1992年）から2002年までの10年間、「アジア太平洋開発社会委員会の10年」とする活動を実施し、アジア太平洋の各国で「障害者の完全参加と平等」を進める活動を行っています。

アジア太平洋開発社会委員会の10年と日本をテーマに、タイ（国）・パンコク在住の団体アジア太平洋経済社会委員会障害者問題部門・高橋 豊さんと連携して開催される本講演会において、日本の市民、障害者、アジア・太平洋の障害者と交換する意見の交換についてお話しします。日本では、どうすればよいかも考える場を設けます。（手話通訳と要約版記をおこないます）入場無料。

日 時 5月21日（土） 午後2時から4時30分

会 場 大阪市立社会福祉センター 「3階第1会議室」
〒542-0032 大阪市天王寺区東高麗町2-10 06-765-5641

講 演 「アジア太平洋開発社会委員会の10年」

講 師 ESCAP開発問題委員会障害部門 高橋 豊さん

座 論 「高校生から見たアジアの現状」

議 員 メンバー ブル学院高校2年生 西田 恵子さん
大阪教育大学付属高等学校1年 東 大里さん
大阪教育大学付属天王寺中学校教諭 吉木 稲也さん
ESCAP開発問題委員会障害部門 高橋 豊さん
(略)

質疑・応答 高橋さんと会場の参加者

定 員 120人（先着順）

申込み・問い合わせ

はがき（FAXも可）に氏名、住所、電話番号、郵便番号（または学年）を書いて下記へ。（手話通訳の希望もお聞かせ下さい）

530-111（住所は不要）

毎日新聞大阪府文化事業部
「アジア障害者問題会議」係
電話 06(201) 8008
FAX 06(231) 3004

毎日新聞大阪府社会委員会、大阪YMCA、おおさか・行動
主 催

後援 国連アジア太平洋開発社会委員会、朝日新聞大阪府文化事業部

講師と座談会メンバー紹介

高橋 豊さん

障害者問題研究者。ハワイ州立大学大学院を修了。廻所の障害者センターに4年間勤務。廻所の書籍「障害者問題研究」を著す。1985年に復興、日本障害者問題研究所副会長に就任。1988年から2年間、世界的な障害者問題研究者として、障害者イニシアチブ（DPI）日本会議会長。1990年4月から12月、パリ国連障害者問題会議（2年ごとに開催）に本部のある開発途上国で活動する途上国障害者団体連絡会議（ECSAP）開発問題の障害者問題研究室に招かれ、現在に至る。

ESCAPでの活動

これまで6年間、「障害者の自動車体験と強化支援」プロジェクトに従事。具体的には、障害者団体の育成、活性化マニュアル作成。海上用のワーキンググループの実施。障害者問題に取り組むための訓練会議の開催など。1993年から第2次自動車体験のプロジェクトと「アジア太平洋開発問題の自動車体験のマネジメント能力を強化するワークショップ」と「アジア太平洋開発問題の10年」研修会議（2年ごとに開催）の企画、運営。また、「障害者へのアクセス（交通機関の利用や移動・施設の出入り）を促進するプロジェクト」などに取り組んでいます。

こうした仕事で、中国、パンゲニアラシア、スリランカ、フィジーなど、13か国を訪ね、障害者団体や各政府開発機関への訪問研修をおこなっている。

アジアの障害者に寄り添う活動（アジアの障害者問題を扱う市民の会と朝日新聞厚生文化事業部会員）への協力、労働者としても支援を続けています。

西田 恵子さん（ブル学院高校2年生）

中学時代からクラブ活動としてYWCAに所属し、ハンドボール、午後バッヂの天下り、民族差別や差別的言論を考えるなど幅広い実験があります。学校全体としてこの3年HAND IN HAND ACROSS（アジアの人々と手を結ぶ）をテーマにして、年に数回の完全モーテルの人たちに掛けあきました。

東 大里さん（大阪教育大学附属天王寺高校1年生）

附属天王寺中学校時代、世論会役員として多くのガチンチャ活動（モルハック・古風・古切手等のチャイルド）の中心的役割を果しました。また、技術会の授業を通して、古い重い力を磨いて練習し、実際に重い方に掛つて筋の力を歩く体験もしています。練習された重い力はトイ四回ほどアジアの国に贈りました。

吉木 稲也さん（大阪教育大学附属天王寺高校1年生）

社会科の教師で、開発教育や環境教育に深い関心をもち、熱心に取り組んでいます。授業方法として、ディベートを取り入れ、生徒たちの自発的な研究、発表を教えています。



資料⑤ 国連地球環境子供サミット・インしまねに関する記事

生活

世界の子たちが集う祭典が始まる

島根で開催 県民が保護するふるさと愛華をしたたかに

(第三種郵便物認可)



県中学生 ウィーフリー

(7) 1994年(平成6年)8月21日

世界を回りにみだれが集まり、島根県
ははじめて開催される「国連地球環境子供サミット
」が1日から3日間、
島根県立総合体育館で開催された。中学校を中心とする
多くの参加者が「日本の問題意識」、自
然保護の目的を確め、「お互いの問題意識」、自
然保護の大切さを確認したら、「次に何
問題を立ち上げよう」と、島根県立総合体育館で開
催された。開会式では、小川洋輔(山形)、大森正志(香川)
らが発言し、また、島根県安来市の安来市民会館で
行われた1日目の開会式では、日本の問題意識をもつて
いたが、この日は、環境保護の大切さを確認した。

(高橋 伸子)

小川洋輔は国連環境署大使
(コズロウ)が医療士としている
ものとの開会式でも、「日本は世界の國に開かれて
いるが、世界を守るために、日本は世界の問題を守るために、
問題の大きさをあえて問題を立てる」と、島根県立総合
体育館で開催された。開会式では、「自然の尊厳」を誓し、「小川
洋輔(山形)、大森正志(香川)が登壇した。開会式では、
「自然の尊厳」を誓した。開会式では、小川洋輔(山形)、大森正志(香川)
らが発言し、また、島根県安来市の安来市民会館で
行われた1日目の開会式では、日本の問題意識をもつて
いたが、この日は、環境保護の大切さを確認した。

17か国387人が参加
深刻な汚染の実態を報告



環境保護を訴えた
坪田愛華をたたかう

リサイクルをテーマにしたワークショップ
で、座曲せつげんをつくらわナカタ・バンワー
バー市の中学生。

三島根県安来市

おくれだといひか」日本では、米子市中田町の三浦充実、島根県安来市から参加
の問題については、アメリカ、中国、ドイツ、フランスなど十ヶ国から中学生
は、アメリカ、中国、ドイツ、フランスなど十ヶ国から中学生
は、アメリカ、中国、ドイツ、フランスなどをもつて、世界の問題の実態を報告
した。開会式では、日本の問題意識をもつて、日本を代表するアーチー・アーヴィング、アーヴィングは、「世界の尊厳を保
持するためには、人間の問題を解決するためには、自然を守るためには、

資料⑥ NEDOの助成事業に関する新聞記事

日経産業新聞

1994年(平成6年)1月27日(木曜日)

(5面)

福祉機器 開発助成

NEDO、13件選定

新エネルギー・産業技術総合

開発機構(NEDO)は二十六日、第一回福祉機器実用化開発助成金の交付先を発表した。在宅医療用の装置や介護機器などの開発を支援するもので、十三

件を選定した。開発費の三分の一を限度に助成し、試作機の製作や実用化試験を促す。助成額は総額で一億六百万円。

九三年十月に施行した「福祉用具の研究開発及び普及の促進に関する法律」(福祉用具法)に基づく初めての助成で、通産省が開発テーマを公募、NEDOを通じて実施する。初年度は六十四件の応募があった。毎年新規テーマを募集する予定で、

九四年度予算では一億四千万円を要求している。

初年度の助成対象事業者とテー

マは次の通り。

視覚障害者用点字ブロッタの開発(リコー)▽座位保持装置の開発(ひげ工房)▽脚部機構の開発(新四輪型ソリ付き歩行器の開発(リハビリエイド)▽視覚障害者用電子白杖の開発(シースタ電子開発)▽家庭用入浴介護支援リフトの開発(ミクニ)▽高齢者・障害者用車両誘導表示板の開発(完装)▽発声発語訓練システムの普及装置の開発(松下通信工業)▽高齢者用腕時計式緊急無線送受信機の開発(アコム)

点字読み取り装置の開発(日本テレスコット)▽視覚障害者用音声ワープロの開発(協同組合けんぶんろん)▽スロープ浴槽用の座高可変入浴車の開発(日本タフグステン)▽高齢者・障害者用グラウンド・ゴルフ用具の開発(アシックス)

みんなが自由に出かけられるやさしい「まち」

そんな「まち」をみんなでつくり

あげるために、大阪府は

福祉のまちづくり条例を

制定しました

福祉のまちづくり条例では、次のことを定めています。

対象とする施設

不特定多数の人が利用する建物、道路、公園、駐車場（これらを「都市施設」といいます）が、すべてこの条例の対象となります。これは、新しくつくるもの（新設）、すでにあるものの（既設）を問いません。

整備の体制

この条例では、すべての人が安全に、そして容易に都市施設を利用できるようにするための整備（整備基準）を定めています。
たとえば、
・スロープや手すりを設けること
・滑りやすい床で歩行ができる床にすること

事業者（この条例では、都市施設の設備管理者と称します）は、都市施設を用意にかかわらず、整備基準に適合させるべく努めなければなりません。

手続きが必要な施設

この条例では、都市施設の中でも公的性の高いものを特定施設として定めています。整備基準における施設の一部を保証しています。特定施設を設置したり管理している事業者は、次の手続きを行ってください。

新設の場合

整備基準に適合せしむるよう、その計画について事前に申請してください。
事前協調
適合状況調査
改修計画の作成

福祉のまちづくりには、都市施設の整備・改善に加えて「温かく、やさしい」が大切です。

この条例では、私たちが何をすべきか、何をしてはいけないか、といったことにあれてています。

★事業者の皆様へ

福利厚生費などに配慮して整備された施設を大切にしてください

整備基準に適合させます
すべての人が容易に利用できるよう配慮してください

整備基準を踏襲するプロックの上に自転車を置いたり、歩道に自転車を置くなど通行の妨げとなることはしないでください

お互いに助け合う心をもつて、まちで団結している人のお手伝いをしましょう

既設の場合

福祉のまちづくりは、市民、事業者、行政が力を合わせて進めていくものであります。すべての人が心豊かに暮らせる「福祉都市・大阪」創造のために、構造的にご協力をお願いします。

既設の場合は、整備基準に適合せしむるよう、その計画について事前に申請してください。
事前協調
適合状況調査
改修計画の作成

「まち」の中のビルや駅、道路や公園……高齢者や障害者などがこれらのものを利用するとき、不便を感じることがあります。福祉のまちづくり条例は、大勢の人が利用する建物、道路、公園などについて、新しくつくるものにも、すでにあるものにもスロープや手すり、高齢者や障害者が利用しやすいエレベーターなどの人にやさしい配慮を求めています。そして、「すべての人が自由に移動でき社会に参加できる福祉のまちづくり」をみんなで進めることを目指しています。



理せのまちづくりには、都市施設の整備・改善に加えて「温かく、やさしい」が大切です。この条例では、私たちが何をすべきか、何をしてはいけないか、といったことにあれています。

★事業者の皆様へ

福利厚生費などに配慮して整備された施設を大切にしてください

整備基準に適合させます
すべての人が容易に利用できるよう配慮してください

整備基準を踏襲するプロックの上に自転車を置いたり、歩道に自転車を置くなど通行の妨げとなることはしないでください

お互いに助け合う心をもつて、まちで団結している人のお手伝いをしましょう

福祉のまちづくりは、市民、事業者、行政が力を合わせて進めていくものであります。すべての人が心豊かに暮らせる「福祉都市・大阪」創造のために、構造的にご協力をお願いします。

既設の場合は、整備基準に適合せしむるよう、その計画について事前に申請してください。
事前協調
適合状況調査
改修計画の作成



日本人の食生活を見なおそう！

— タイ米を使っての調理実習を通して —

うしどら
良 千恵子

I. はじめに

近年、我が国は飽食の時代などといわれ、食べものや料理に関するテレビ番組や本・雑誌等による情報があふれ、高価でかつ珍らしい食品が所狭しとならび、誰でも容易に手に入れ、食することがいとも簡単に行われている。

そんなおり、1993年の冷夏の影響で史上最悪の米不作（米作況指数「74」）にみまわれ、政府の米緊急輸入という状況になった。1994年、年明けから『平成の米騒動』とまでいわれ、米屋の店頭から米が消え、スーパーやデパートに米を買い求める長蛇の列ができ、かつてのオイルショックを思いおこすような光景が、毎日のように報道された。そして、タイ米の輸入（1993年11月18日）にはじまり、中国米（12月6日）・カリフォルニア米（12月13日）と次々に輸入米が市場に登場、「ブレンド米」という言葉も使われ、米に対する私達の認識の変化も余儀なくされた。しかし、5、6月頃になると新米が出回り始め、タイ米・ブレンド米の存在すら薄れてしまった。

『平成の米騒動』が単なる出来事として終わってしまっていいのだろうか。長年の私達の主食である『米』について、さらには『食生活』をも見なおすことが必要ではないのだろうか。実際にタイ米を扱うことによって、米・食生活を考えていくことが大切だと考え授業に取り入れてみた。

II. タイ米を使っての実習計画

1. 実施計画

3年生—4クラス 女子 63名（1クラス—4班・4人で構成）

1994年10月第2週目より 実施

時 間	授 業 内 容
1・2	輸入米・国産米について
3・4	調理実習の計画（各班で献立、準備物の検討）
5・6	調理実習・試食・評価
7・8	実習の評価・まとめ

実 施 計 画

2学期に入ってすぐに、タイ米を使って調理実習することを伝え、タイ米・ブレンド米に限らず、米を使っての献立に関して下調べをしておくように指示しておいた。

(1) 1・2 時限 —— 輸入米・国産米について

学校での調理実習前の生徒のタイ米についての認識は

- 市販の弁当やおにぎり・ファミリーレストランでタイ米もしくはブレンド米を食べたことがある —— 28名 (63名中)
- 1度でも、家で調理して食べたことがある —— 12名 (63名中)

『平成の米騒動』といわれた時期でも

- 値段は高かったが米屋から国産米を買っていた —— 17名
- いなかや実家などから、送ってもらっていた —— 10名
- 買える時に、買いだめをした —— 7名

など、何らかの方法で国産米を食べている家庭が多く、輸入米を常に買って食べていた家庭は、わずか 5 名であった。

本校の生徒にとってはこの騒動を身近な出来事としてはとらえにくく、「タイ・ブレンド米をどうすれば、おいしく食べられるのか」と考える必要もほとんどないまま、ただ単にマスコミの情報が先入観としてあり、

- おいしくない —— 29名
- パサパサしている —— 11名
- においがする —— 2名
- 不衛生である —— 2名

などと否定的な認識が多かった。ただ少数ではあったが

- 世間で言われているように、ほんとうにおいしくないのか疑問に思っている。
- どんな味がするのか、食べてみたいと思う。

といった意見もあった。

生徒達の状況をふまえて、食糧庁・財団法人全国米穀協会発行「輸入米を使ったおいしきはん料理」・毎日新聞(1994年2月17日付)切り抜き記事を資料として生徒に配布、本校近くの高松食糧品店からわけていただいたタイ米・ブレンド米・国産米(新米)を提示しながら、米の種類・特徴、調理における輸入米と国産米との扱い方の違いを説明した。

(2) 3・4 時限 —— 調理実習の計画(各班で献立・準備物の検討)

生徒のほとんどは「輸入米はピラフやチャーハンにすればいい」ということを知っているが、献立が画一的にならないように、毎日新聞(4月7日付)切り抜き記事と輸入米についての本³を提示し、参考にしながら各班で献立を決める検討にはいった。献立決定にあたっては次の条件に合うよう考えさせた。

献立決定条件 —

- タイ米を使った主食となる1品であること
- 1人当たりの費用が200円ぐらいにおさまること
(タイ米は教材として高松食糧品店から、提供いただいたので含まない。調味料も学校にあるものを使用するので計算には含まない。)
- 調理時間は60分前後であること

米

について () 題 —— 第 ——
世界で生産されるお米は 日本型の 中短粒型 (うちゅうげきがた) 型で、
長粒型の米は(コショウリカ) 稲に大別される。
長粒型の米は日本一長い稲で、日本を除く韓国、
中国、インド、中国、アーチストラリヤなどで栽培されている。
長粒型の米は、粒が細長く、粘りが少なく、パサパラに感じられ、
粒でせんべえや多穀飯、タイ・カンガナード、ミャンマー
などの料理で使われている。

米の特徴と作り方 (1)

外 国 米 の 特 徴

アメリカ合衆国	米は白米で、一袋には、日本の分量に対しては少ないので、長い間保存されても良いため、長期保存用に適しています。
オーストラリア	米は白米で、一袋には、日本の分量に対しては少ないので、長い間保存されても良いため、長期保存用に適しています。また、日本の分量に対しては多いため、日本では、アメリカのリサイクル率が高くなっています。
中国米	米は白米で、一袋には、日本の分量に対しては少ないので、長い間保存されても良いため、長期保存用に適しています。また、日本の分量に対しては多いため、日本では、アメリカのリサイクル率が高くなっています。
日本米	米は白米で、一袋には、日本の分量に対しては少ないので、長い間保存されても良いため、長期保存用に適しています。また、日本の分量に対しては多いため、日本では、アメリカのリサイクル率が高くなっています。
ヨーロッパ	米は白米で、一袋には、日本の分量に対しては少ないので、長い間保存されても良いため、長期保存用に適しています。また、日本の分量に対しては多いため、日本では、アメリカのリサイクル率が高くなっています。

米について

米の特徴と作り方 (2)

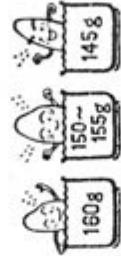
米の特徴と作り方 (1) で述べたように、米は、日本型の中短粒型 (うちゅうげきがた) 型で、世界で生産されるお米は、日本型の中短粒型 (うちゅうげきがた) 型で、長粒型の米は(コショウリカ) 稲に大別される。

外 国 米 の 特 徴

アメリカ合衆国	米は白米で、一袋には、日本の分量に対しては少ないので、長い間保存されても良いため、長期保存用に適しています。
オーストラリア	米は白米で、一袋には、日本の分量に対しては少ないので、長い間保存されても良いため、長期保存用に適しています。また、日本の分量に対しては多いため、日本では、アメリカのリサイクル率が高くなっています。
中国米	米は白米で、一袋には、日本の分量に対しては少ないので、長い間保存されても良いため、長期保存用に適しています。また、日本の分量に対しては多いため、日本では、アメリカのリサイクル率が高くなっています。
日本米	米は白米で、一袋には、日本の分量に対しては少ないので、長い間保存されても良いため、長期保存用に適しています。また、日本の分量に対しては多いため、日本では、アメリカのリサイクル率が高くなっています。
ヨーロッパ	米は白米で、一袋には、日本の分量に対しては少ないので、長い間保存されても良いため、長期保存用に適しています。また、日本の分量に対しては多いため、日本では、アメリカのリサイクル率が高くなっています。

輸入米の特徴

① キャンセル米とサリヨモギ
1カットに入れる米の量は お米の 程度で
2.5kg で 通常 1カット (10kg) で販売



国内米、外国米、輸入米

② 半年ごとに洗う
洗米は、お米の表面についている土砂や砂などを洗い落すことを目的で、
半年で半年で行うことになります。洗米とやさしくしてから 2.5kg で販売

③ 3ヶ月ごとに洗う — 水没滅 —

外國米　約 1 ヶ月 1.5 ~ 1.75 (ハイブリッド米) ~
約 2 ヶ月で 1.5 ~ 下限以下で販売

④ 貯蔵と水分を保つ！

穀物貯蔵の実験結果 (1カット販売は)
国内米で 10kg 3.0kg
水温の低い地域 1 ~ 2 年間で
湿度 15 ~ 25%
外國米で 3.0kg の場合 3 年間
貯蔵と同時に、インシデント (20kg の袋) 1kg を含む) 漏すために、
じっくりこらす。
スタッフそれでも 10 ~ 15kg はまだ 1 年 おいてみて
はじめて 1 年で

⑤ お米が水没すると、水分を吸収して重量が増えて、また、水分が吸収されると、お米の品質が悪化します。そのため、お米が水没した場合は、速やかに排水を行ってください。
また、お米が水没した場合は、速やかに排水を行ってください。
また、お米が水没した場合は、速やかに排水を行ってください。
また、お米が水没した場合は、速やかに排水を行ってください。

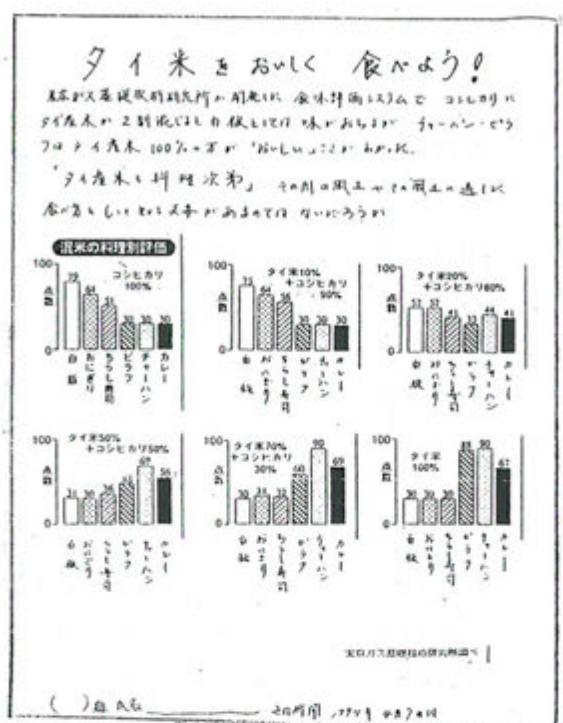
参考文献
「米文化」(1996年 2月 7日) 第刊
本邦米

各班（3、4人）の各自の意見を出して、よく話し合って献立を決めていくように助言したが、料理が好きで興味のある生徒が主導権を握り、他の生徒もただまかせっきりというような班が2、3あって指導した。

献立が決まったら、使用材料・作り方の検討に移り、実習計画プリント2枚を各班に配布し、記入させた。（うち1枚は提出）

予算については、食品の値段を調べた上で記入することとした。

生徒への配布資料(2)



タイ米を活かして A組実習計画						
献立名	オムレツチーク					
献立決定理由：費用が安上がりなうえ、旨いオムレツアリティを加えて簡単につくれたりと、たのむ。						
<u>4人分</u> - 費用						
取引品	1人分	4人分	費用			
タイ米	100g	400g	40円			
タイ米	100g	300g	30円			
ハム	25g	75g	70円			
玉ねぎ	1/6個	1/2個	20円			
ピーマン	1/2個	1個	15円			
卵	1個	3個	45円			
バゲット	適量	適量	45円			
塩、こしょう	少々	少々	-			
しょう油	大さじ1/2	大さじ1/2	-			
日本酒	大さじ1/2	大さじ1/2	-			
うす味噌調味料 (味の素)	少々	少々	-			
ケチャップ	少々	少々	-			
・サラダ油・塩			-			
ニンニク	1/6本	1/3本	-			
予定時間		40分	14時 210円			

作り方

- ① タイ米はよく洗っておき、揚げ用油を約1分ゆで、油が熱いあわせて水気を切る。
- ② ピーマン、玉ねぎともに芯し大きめのみじん切り、ハムは5mmくらいの角切りにして、卵は割り口は少し小さめ調理しておく。
- ③ 中華鍋を強火でよく熱して油をさし3杯を入れ、②の卵のみじん切りを炒め、少しく手馳せは控め、別皿にとる。
- ④ 中華鍋に油をさし2杯を熱して、玉ねぎ、ピーマン、ハムを炒め、タイ米を加えてほぐし少しあくめ、中華こしょうで味をつける。
- ⑤ ④に③の卵を入れ、焦げないように、ズオく混ぜ、しう油、日本酒を弱火から加えて省いて炒め合わせ仕上げにうす味噌調味料をふり入れる。
- ⑥ ⑤に入れて皿に盛りつける。
- ⑦ ⑥に残った卵をうなぎ一枚焼いて⑥のうえにのせる。
- ⑧ ハベリを添え、ケチャップを飾りつけ。

班の実習計画 提出プリント (1)

各班の献立は次のように決定した。

クラス	班	献 立	人数	使 用 材 料	予算	予定調理時間
A	1班	オリジナルチャーハン	3	ハム・玉ねぎ・ピーマン・卵・バセリ・にんじん 塩・こしょう・しょう油・日本酒・ケチャップ・サラダ油	70円	40分
	2班	ライスお好み焼き	4	ツナ缶・キャベツ・細ねぎ・卵・豚肉・かつおぶし かたくり粉・サラダ油・とんかつソース・しょう油	195円	50分
	3班	タイ米のドリア	4	玉ねぎ・マッシュルーム・とりむね肉・バター・塩 こしょう・小麦粉・牛乳・チーズ	164円	60分
	4班	えびドリア	4	えび・マッシュルーム・卵・バター・バセリ・ ホワイトソース・粉チーズ・塩・こしょう	200円	70分
B	1班	コンビーフとじゃがいものカレーご飯	4	コンビーフ・ジャガイモ・にんじん・バセリ・ カレー粉・酒・塩・こしょう・スープの素	200円	50分
	2班	タイ風オムライス	4	ソーセージ・むきえび・ピーナッツ・玉ねぎ・にんにく・油・ しょうが・卵・オイスター・ソース・砂糖・塩・こしょう・かたくり粉	200円	65分
	3班	ナスドリア	4	なす・玉ねぎ・マッシュルーム・ホワイトソース・塩・ こしょう・バター・スープの素・ツナ缶・とろけるチーズ	200円	60分
	4班	ささみともやしの椎炊	4	とりささみ・もやし・しょう油・塩・うまみ調味料・ ねぎ・卵・ごま油	123円	70円
C	1班	えび入りチャーハン	4	むきえび・ねぎ・卵・にんじん・塩・こしょう しょう油・油	189円	50分
	2班	野菜とチーズのリゾット	4	ペークン・玉ねぎ・セロリ・キャベツ・サラダ油・スープ の素・トマトピューレ・バター・粉チーズ・塩・こしょう	125円	40分
	3班	ピラフ風ドリア	4	えび・玉ねぎ・バター・小麦粉・牛乳・あさり 塩・こしょう	205円	60分
	4班	なすのドライカレー	4	なす・牛ひき肉・カレー粉・ターメリック・ピーマン・ バター・サラダ油・塩・こしょう・玉ねぎ・レーズン	135円	70分
D	1班	葉巻茶かゆ	4	ザーサイ・ねぎ・すりごま・酒・塩・ほうじ茶・ ささみ・ごま油・梅干し	120円	70分
	2班	スペイン風ピラフ	4	とりむね肉・イカ・あさり・たまねぎ・ピーマン(赤緑)・にん にく・スープの素・サラダ油・塩・こしょう・バセリ・チリパウダー	200円	60分
	3班	タイ風チャーハン	4	ソーセージ・玉ねぎ・卵・ねぎ・塩・こしょう・しょう油・ サラダ油・日本酒・うまみ調味料	50円	50分
	4班	チキンピラフ	4	玉ねぎ・スープの素・にんじん・バター・マッシュルーム・ とりもね肉・塩・こしょう・バター・バセリ	168円	60分

※ タイ米は各班共通のため記載省略

やはり、献立としてドリア・ピラフ・チャーハンが多いが、おかゆ・お好み焼きなどもあがってきた。ドリアの場合、時間的なことも考えてホワイト・ソースはかんづめのものを使用するように変更させた。又、浸水時間を長めにするため、米を洗うことを始業前や昼休みを利用して行なっておくことを指示しておいた。

(3) 5・6 時限 —— 調理実習・試食・評価

今回は班によって使用する材料が違うため、タイ米、調味料、卵（交通機関を利用しての通学者が大部分であるので）以外は各班で準備させた。

実習中は調理手順の把握が不充分だったのか、作業が遅くなったり、材料の扱いに戸惑ったりする班もあった。家庭で手伝う時間もほとんどなく、実習教室等の関係で本校での実習授業も今回で3回目という経験不足によるところも大きい。調理実習に限らず、手作りが安くつく時代ではなくなってきており、生徒の生活環境・生活時間の変化からすれば以前以上に、手や体を動かしての学習が必要ではないだろうか。授業の中にどのように取り入れて、実生活に生かしていくかが今後の課題でもある。

タイ米の扱いに関しては、水加減がむずかしく本の記載どおりにしたにもかかわらず、パサパサになりすぎたり、逆に水っぽくなりすぎた班もあった。調理方法でも「湯どり法」という方法で、本では12分加熱と記載されていたが、12分ではやわらかくなりすぎたため、少し時間を短縮する必要があった。

実習後、各班1人分多くもりつけをし、試食用とした。他の班の料理についても試食し、評価用紙に記入させた。

タイ米を使って		C組(4) 高橋 千香			
組立 野菜のドライカレー		2組 メンバー 黒田 佐藤 中岸 東			
材料 大根、レーズン、唐辛子、バター		材料 野菜とチーズのリゾット			
大根	レーズン	唐辛子	チーズ		
玉ねぎ		玉ねぎ	チーズ		
人参	バター	人参	トマトピューレ		
鶏ひき肉	セロリ	セロリ	バター		
玉ねぎ	セロリ	セロリ			
時間 70分	費用 135円	時間 60分	費用 125円	時間 60分	費用 125円
△	○	△	△	△	△
感想：丁寧に作ってました。丁寧に作るから出来上がりが良くなります。味のバランスもよく出来ました。					
①野菜の量は多めでした。野菜の量が多いと味が薄くなってしまうので、野菜の量を減らして、味を濃くすればいいのかなと思います。					
②味が濃いです。味が濃いと味が濃いです。					
/ 組立 メンバー 矢野 沢原 成樹 鹿島 伸		3組 メンバー 岩見 横木 堀内 光井			
組立 えびチャーハン		組立 ピラフ風ドリア			
材料 大根、塩	小麦粉	材料 大根、牛乳	小麦粉		
玉ねぎ	ごま油	玉ねぎ	牛乳		
唐辛子	セロリ	唐辛子	セロリ		
玉子	味の素	玉子	味の素		
人種	油	人種	油		
時間 40~50分	費用 189円	時間 60分	費用 220円	時間 60分	費用 220円
△	△	△	△	△	△
感想：野菜と一緒に味が濃くなるといふことを書かれていたが、味が濃くなるといふことを書かれていた。					
①野菜と一緒に味が濃くなるといふことを書かれていた。					
②味が濃いです。					

評価用紙 提出プリント(2)

チャー・ハン・ピラフについては、タイ米の特徴が生かされていた。精製がよくなされていてのか、臭いはまったく気にならなかったし、タイ米を使っているとは思えないほどうまく工夫されていた。A組2班のお好み焼き・C組2班の野菜とチーズのリゾット・D組1班の葉膳茶がゆなどは、生徒達にも好評であった。

(4) 7・8時限 —— 実習の評価・まとめ

評価用紙の感想のところを各班別にまとめて印刷し、各自に再度配布して実習をふりかえた。(生徒への配布プリント(3))

試食しての生徒の感想をあげてみると

お好み焼き——つなぎにかたくり粉を使っているのだが、小麦粉で作ったふつうのお好み焼きとかわらないくらい、おいしかった。

ナスドリア——とろけるチーズとごはんのパリパリとやわらかいナスがよく合っていた
野菜とチーズのリゾット——チーズとトマトピューレの味がきいていて、おいしかった
セロリの葉を上にのせたもりつけも新鮮でよかった。

ささみともやしの雑炊——タイ米はパサパサだから雑炊にするというのはすごい思いつきだと思う。味もうす味だけど、けっこうおいしかった。

タイ風チャーハン——食べてみて、タイ米だなあというのがよくわかった。タイ米の特徴が生きていた。でもそのパサパサさが良い。地味なメニューだけど美味かった。

費用については、計画の時に値段を調べて計算させたので、ほぼ予算どおりにでき、チャーハンについては非常に安くできることができた。

調理時間は米を洗う、浸水時間を除いて授業中の調理時間を記録したものである。ドリアでオープンを使用した班が予定時間より長くかかったが、チャーハン・ピラフの班は多くは予定より早くできあがった。

米のパサッキについては、個人の好き嫌いに関係するが、調理しだい・工夫しだいで、タイ米も安く、おいしく食べられることを実感できた。

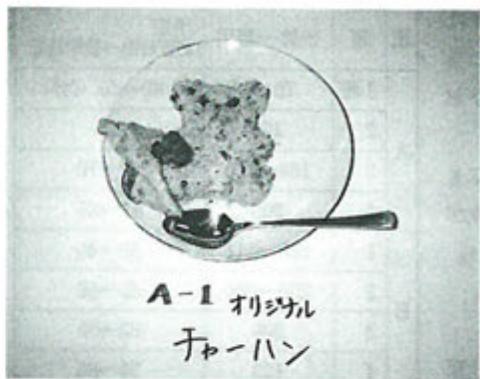
組	班	予算→費用	予定 調理時間→調理時間
A	1班	70 (円)	40→45 (分)
	2	195	50
	3	164→120	60→70
	4	200	70→65
B	1	200→111	50→45
	2	200→204	65→60
	3	200	60→70
	4	123	70→60
C	1	189	50→35
	2	125	40
	3	205→226	60→70
	4	135	70→50
D	1	120→123	70→55
	2	200→205	60→45
	3	50→75	50→40
	4	168	60→50

実際にかかった費用と時間

各自の評価・感想 生徒への配布プリント (3)

D 1班 「泰 食茶 カレ (オレンジ添え)」	90分	予算 120円	費用 120円	調理時間 70分	予定時間 65分	実際時間 65分	④
	④	○	○	○	○	○	○
90分	予算 120円	費用 120円	調理時間 70分	予定時間 65分	実際時間 65分	④	○
④	○	○	○	○	○	○	○
90分	予算 120円	費用 120円	調理時間 70分	予定時間 65分	実際時間 65分	④	○
④	○	○	○	○	○	○	○
90分	予算 120円	費用 120円	調理時間 70分	予定時間 65分	実際時間 65分	④	○
④	○	○	○	○	○	○	○
90分	予算 120円	費用 120円	調理時間 70分	予定時間 65分	実際時間 65分	④	○
④	○	○	○	○	○	○	○
90分	予算 120円	費用 120円	調理時間 70分	予定時間 65分	実際時間 65分	④	○
④	○	○	○	○	○	○	○
90分	予算 120円	費用 120円	調理時間 70分	予定時間 65分	実際時間 65分	④	○
④	○	○	○	○	○	○	○
90分	予算 120円	費用 120円	調理時間 70分	予定時間 65分	実際時間 65分	④	○
④	○	○	○	○	○	○	○
90分	予算 120円	費用 120円	調理時間 70分	予定時間 65分	実際時間 65分	④	○
④	○	○	○	○	○	○	○
90分	予算 120円	費用 120円	調理時間 70分	予定時間 65分	実際時間 65分	④	○
④	○	○	○	○	○	○	○
90分	予算 120円	費用 120円	調理時間 70分	予定時間 65分	実際時間 65分	④	○
④	○	○	○	○	○	○	○
90分	予算 120円	費用 120円	調理時間 70分	予定時間 65分	実際時間 65分	④	○
④	○	○	○	○	○	○	○

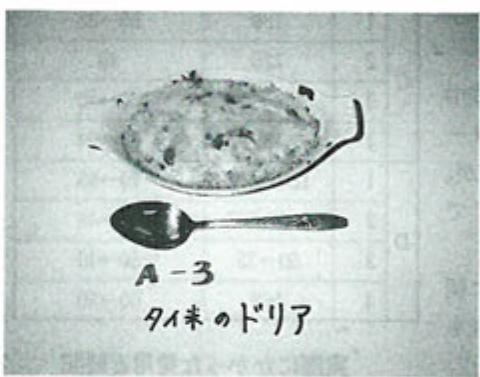
※ 時間は米の浸水時間も含めてのものである。



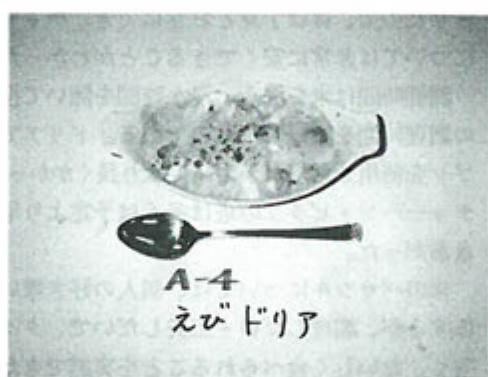
A-1 オリジナル
チャーハン



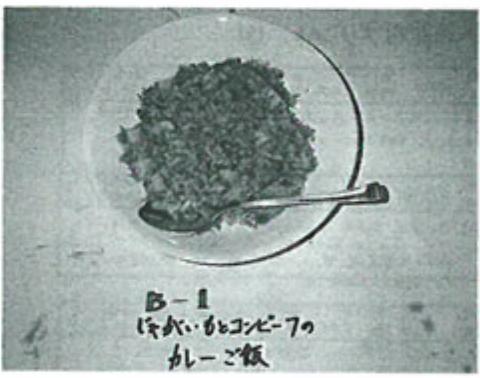
A-2
ライスお好み焼



A-3
タイ米のドリア



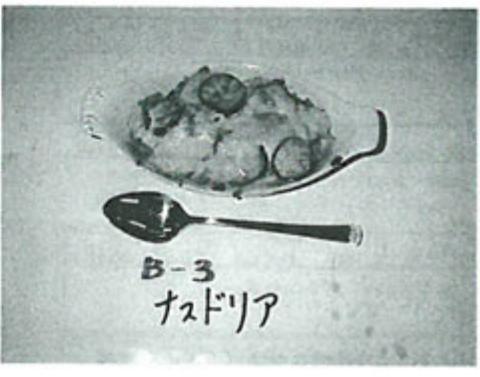
A-4
えびドリア



B-1
ビーフ・もとコンビーフ
カレーコ飯



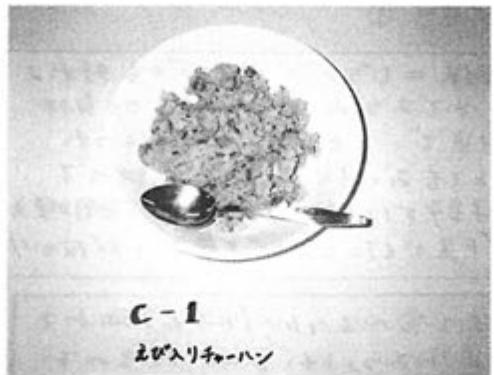
B-2
タイ風おむライス



B-3
ナスクニア



B-4
ささ身と海苔の雑炊



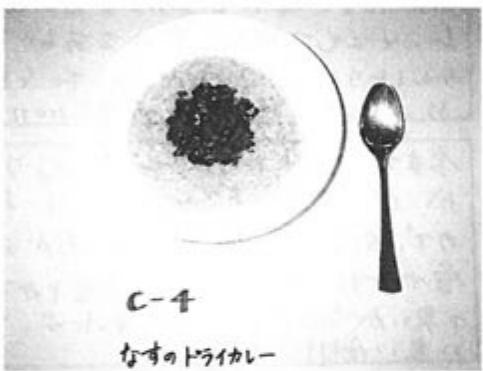
C-1
えび入りチャーハン



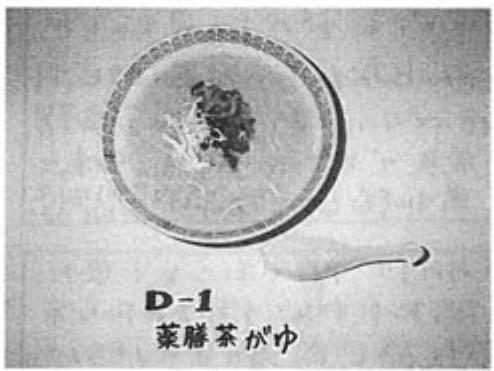
C-2
野菜とチーズの
リゾット



C-3
ピザ風ドリア



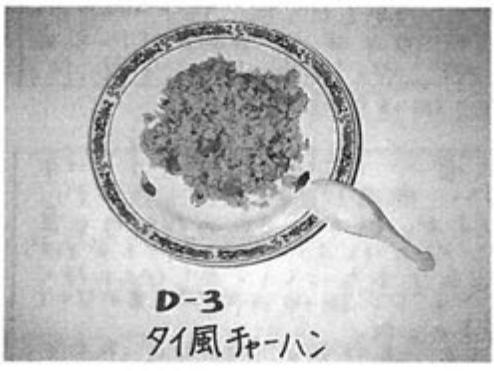
C-4
なすのトライカレー



D-1
茶膳茶がゆ



D-2
スペイン風ピラフ



D-3
タイ風チャーハン



D-4
チキンピラフ

★ タイ米を使っての実習に取り組んでの生徒の感想 ①

最初、二人立てて決める日寺には“タイ米 = ピラフ”的イメージから外れようとして、お好み焼きを作る選んだ。朱でお好み焼きを作る比自体や、丁寧にかぎついたのにましてやタイ米で…と日が直づくにつれ本家にもなったが、作ってみると、いいなくて普通のヒビベア直和気もなかつた。世間では好評ではないタイ米だが、調理方法さえ工夫されればタイ米の性質を生かしたものができることが分かった。

私は今日の調理実習で、タイ米を食べることか（本部）初めてだったのが可か、今までは「美味しい」とか「おいしい」とか言ふていいのを開いていた。母にも調理実習の話をしたら「おいしいところじゃう？」と言ふね、とても不思議だつたのが可か。厚原、つくつと食べたら、(私が余が下をかむ) ハラセムか) おいしさってと思ひた。それに、うちの班の場合、水も多めだったので、全然ハラセムして感じたが、リラックスして。

今まで日本米で作、たピラフよりも、タイ米を使、ア作、たピラフの方が、パラパラしていい、ピラフはあつた。調理実習の時、カレ粉を使つて、タイ米の臭いが気にならなかつた。むろん日本米でもさりげなく食べやすかつたと思う。食堂とかで、白飯のまゝタイ米を使って、ビニール袋で臭いがしないか、とかあつたが、少し手を回して味は、タイ米はなくておいしい食材だと思ふ。

えびチャーハンを作、丁寧に作り、木がべちゃべちゃして耗りが“ありすぎ”た。味つけをちゃんとしなが、丁寧のが“悪いけど、料理はあんまりおいしくなかつた。(他の学生の(本部)しかつた) 低予算で、あんだけの料理で、ア作れるかと見えて、良かつた。タイ米で、うつけて、そんなどんぶりに、パラパラしおかっさし、煮干しなんてもいいのに、

タイ米で、お好み焼き、といでのう、聞いたところも見たところも、いいので、少し心配だつたけれど、作ってみて、本当に普通のお好み焼きみたいを感じて、タイ米のパラパラした感じはなくなりました。うれしかつた。他の学生の人も、聞いてくれたので、一度家にあつたタイ米でやつて、丁寧に家でも、「おいしい」と言ってくれたので、やつてよかった、と思った。

(二) 調理実習

タイ米は、この調理実習までに食べたことがなく、タイ米はどんなものかあまり知らないが、だ。私達は、雑炊をしたので、特徴はあまりはっきりとはできずか、だが、他の学生のを食べて、パラパラ感や、チャーハンなどにむかっていることがわかった。最近、また、タイ米を食料にしたりするらしいが、なんひとつ、最近、あまりタイ米を食料にしたりするらしいが、なんひとつなく、輸入先の人々に悪い気がする。あと、調理の感想を書かなくては…。米についての知識もふえてよかつた。でも、味は少しいまいちだ、だかな?

★ タイ米を使っての実習に取り組んでの生徒の感想 ②

「タイ米」という言葉だけでおしゃれでいいイメージがあつたけれど、實際調理してみるとタイ米も丁度おかしいと思った。日本米と使ふ方を変えて食べればおしゃれ食べられると思う。日本米ほど粘らしくないからピラフやチャーハンに利用するのがいいというのが実体験として感じられてよかった。タイ米を食べるいい機会に遇到了と思う。

私はあつ実習で初めてタイ米を口にしました。明らかに甘っかり感があり、又少しパサパサしている感じが印象を打消しました。水分がたっぷり入った感覚でなく、さし芋で食べにくかったです。というか正直な感想です。しかし一度実習したことでタイ米の特徴や今まで多くなったつけ麺などなど、他の中華料理にもなじみやすくなると思います。

タイ米って何のはニュースとかで、とてもまずくて食べれないとか、そういうことを言っていたのであまりいいイメージではなかった。調理実習をしてみて、そんなにまずもないし、安いし、よかっただので家でまたタイ米を使って何かつくろうと思った。タイ米はタイ米のパラパラしたところとか牛乳ちょっと利用したら、かなりいいものができると思う。

私は1度家でタイ米100㌘の白飯を食べて以来、「もう2度とタイ米なんか口にしない」と思ったほどタイ米ぎらいでした。あのパサパサした感じがとても嫌だったからです。でもこの実習であのパサパサした感じを生かして、ドリアを作つてみたら意外に芳しかったので、タイ米は国産米よりずっと安いので、きっとあの特性をいかして料理に使っていいければいいと思いまして、でも水加減などが国産米と深く同じで、手間がかかるのが少し欠点だと思った。

タイ米は日本人の口にあかないわけではなく、調理の方法によつては日本米と同じくらい、もしくはそれ以上おいしくつくふることがわかった。タイ米はあまりといつて偏見だと見つけていたが、タイ米は嫌だという日本人はあわがままだつてよみと思う

我が家は産地と直接契約をしているせいか、米不足のころのタイ米への依存に陥らなかつたので、テレビなどでもタイ米を捨てる、とかのニュースによつて、タイ米へのいやな感じの先入感が強かつたが、調理実習のあのほどよいパサパサ感は大変気に入つた。調理上性質のちがうジャボニカ米にインカ米を同一方法でおいしく食べれないかもしれないが、少しの工夫でとてもおいしく変身することを学べて良かった。

III. おわりに

この実習を実施するにあたり、昨年8月新たに資料があればとタイ米に関しての本を捜しても店頭に見あたらず、毎日のように新聞紙上をにぎわしていた記事も見あたらない。米屋には新米がならび、価格も5月には国産米(1kg)800円・ブレンド米(1kg)600円であったのが、8月末には国産米(新米1kg)585円・ブレンド米(タイ米を含まず1kg)500円ではほとんど変わらなかった。

言うまでもなく、米の緊急輸入は我が国の米不作という事情から行われたもので、タイ・アメリカ・中国・オーストラリアなど諸外国に即対応してもらえたことに感謝すべきであるのに『平成の米騒動』といわれて5ヶ月たてば、残念ながら＜タイ米等のますさ＞だけが強調され、偏見としてのみ残ってしまった。そして＜タイ米などが捨てられる＞という事件にまで至ってしまった。

各国の気候・風土に培われ、国民の食生活を長年支えてきた食文化の代表である「米」をもっと正しく理解すべきであるし、先入観やイメージにとらわれず、実際に調理して、おいしい食べ方・調理のしかたを見つける努力も必要である。計8時間の学習だけでは不充分な点が多いが、この実習を通してほとんどの生徒は「調理したい・工夫したいで、タイ米もおいしく食べられる」ことを実感した。この経験を生かして、生徒達が各家庭でタイ米・ブレンド米を活用したり、米だけでなく今後、次々と輸入される食品の特徴をよく知り、じょうずに利用していくとする姿勢をもちつづけるきっかけになることを期待している。

＜飽食の時代が、あたかもそのつけが回ってくるように、空腹の時代に転じるのは、そう果てしなく遠い先のことでもないのではないか＞(辺見庸「もの食う人びと」あとがきより1994年6月刊) —『平成の米騒動』とは私達の食生活を見なおすための一警告ではなかっただろうか。

謝辞 実習にあたり、タイ米を提供していただいた高松食糧品店に御礼申し上げます。

参考文献

- (1) 赤堀千恵美・赤堀博美「おいしい輸入米の食べ方」ブックマン社(1994年)
- (2) 越膳百々子「輸入米・こうすればとびっきりうまくなる」21世紀ブックス(1994年)
- (3) 沖島美佐子「輸入米クッキングBOOK」実業之日本社(1994年)

学校に行きたい。でも、行けない。

——本校における登校拒否の事例——

瀬 崎 浩 美

I. はじめに

登校拒否が、どの学校においても大きな問題となっているなか本校では登行拒否生徒はないといえる程、少なかったようです。しかし、過去10年間の保健室来室状況をみると、一日平均来室人数は、S60年度7.5人、H5年度5.09人と減っていますが、「内科的理由での来室」生徒の割合は、S60年度25.52%、H5年度35.14%と逆に増えています。「内科的理由での来室」が、精神的問題によるものとはいませんが、中2生で実施している“ステップ”のH5年度の結果をみると、悩みの程度が「ひどく苦しんでいる」者が、8%（全国平均7%）で、特に、家庭生活についての悩み、不満については、全国平均より高いという結果です。また、欠席については、H5年度は年平均約6.65人/日で多くはありませんが、月によっては10人以上/日の時もあるので、身体面においても弱さがみられます。

このように、生徒は日々、身体的、精神的悩みをもちらながら一日の大半を学校で生活しています。今回、附属という集団に慣れにくく、いじめに発展したA子の問題を一つの事例として検討していただけたらと思います。

II. 事例

1. このケースの背景

(1) A子の家庭環境

A子は、両親とA子の3人家族で一人っ子である。父はサラリーマンでA子が幼小時より出張が多く、帰るとA子をよくかわいがってくれた。A子にとって“やさしい父”が病気のため東京に長期入院となる。A子が小5の頃である。主に父の世話は、父方の祖父母がおこない、時々母親が東京へ行く形となるが、A子を伴って上京することはあまりなかった。母は、父親不在でしかも入院という大変な状況の中で、気丈で、教養があり、私達と話をする時も言葉を選びていねいに話された。A子に対しても、大人の扱いをしてきたと言われていた。教育にも熱心で、御自身も自宅で近所の子供達に英語・数学を週1～2度教えておられる。A子は、本校入学後も母娘の2人暮しである。その他の家族関係（母方の祖父母、親戚等）については、情報を得られなかった。また、父親の病状等についても、A子にも詳しい事は話されておらず、私達にも多くは語られなかった。

(2) A子のクラス環境

附属小学校からの入学が約5割、残りを一般入試で選抜している。その結果、男子は、

附小出身者と一般選抜者の比が、約5:5だが、女子は、約6:4となっている。A子は、一般選抜で入学してきた生徒である。A子のクラスは、男子より女子の方が活発な子供が多く（学年全体の傾向ともいえる）男子は、何となく頼りなくみえ、女子は、「きつい」と思える程、言動もしっかりしている。しかし、中には、おとなしく何も言えない子供もあり、A子は、しっかりした意見をもっているが、人前ではあまり発言しないので、そんなメンバーの一人であったようである。また、A子にこの学校を推めてくれた知り合いの子供も同じクラスではなく、帰宅方面が同じである子供達もクラスにはいなかった。A子が私に話してくれた内容によると、クラスの中は、グループに分かれているが、グループ単位で行動する人が多く、自分はグループで行動することは好きでないので、一緒にいるがただ一緒に行動しているだけのことだった。

(3) その他の環境

前述したが、A子が入学するにあたり、小学校時代より交友のあった附属出身者より、いろいろアドバイスを受けていた。また、学校の様子など話して下さり、是非受験するよう強く進めてくれたようである。また、父親の恩師でもある方がこの学校におられ、A子にとって、最も身近な人となってくれていた。父親の入院という父不在のA子にとって、父親的存在であったようである。

2. 内容

(1) A子との出会い

A子が、連続欠席し始めたのは、2学期の学校行事後からだった。1、2日の欠席は、一学期にもあったが、二週間以上もの欠席は初めての事だったので、担任は毎日電話での連絡をとりあってはいたが、母親からの「精神的なものからくる発熱」の言葉で、家庭訪問することにした。

（A子）・数名による「言葉、視線、態度」のいじめを受けている。

・注意してほしいが、自分の名前はださないでほしい。

（母親）・行事後に発熱する事が今までにもあったので、そうかなと思っていた。

・本人は、なかなか話してくれず、わからないが、つらそうにしている。

・友人関係によるものなら、何か本人にも問題があるだろうが、わからない。

（担任）・いじめている者はだれなのか、教えてほしい。

・対処したいが、詳しい事がわからない。話してくれない。

担任は、学年に報告し、翌日、母親の「あとひと押しされれば行けそう」という言葉で家に迎えに行く事にした。母親への配慮から、担任の独断での行動とし、A子には何も告げられていなかった。

（担任）・渋っているA子を友人が誘いに来て、母親が押し出すような形だった。

・私は、後ろからついていく形で、2人の様子を見ていたが、A子は、ふり返っては私の存在を確認する感じで、2人の間で会話はずまなかつた。

乗りかえ駅でA子は、「家に帰りたい」と言い、帰宅させることになった。担任は、A子にわからないよう帰宅を確認した。

私がA子と話をしたのは、その翌々日で担任よりA子の欠席理由と今までのおよその経過を聞き、登校についてきた母親と友人の母親と共にであった。A子は登校すると、保健室で横になっており、その間、母親と友人の母親、担任の4人で話をした。

- (母親) • 昨晩、長時間話をした。これまでの事や学校に行くにはどうしたらよいのか等。小学校よりだれとでも仲良くできる子で、ベタベタした関係は嫌がり、私も始めは、本人に問題があるのではと思ったが、人の嫌がる事は言ったりしたりする子ではないので、本人の思い過ごしだろうと思っていた。
- 何故いじめられるのか、腹立たしく思えてきた。
 - 無理に発校しなくていいと思うが、家にいてもつらうなうのでどうしてやつたらよいのかわからない。
 - これからは、何でも本人に伝え、大人の勝手な考えで進めないでおこう。

- (友人) • 優秀で真生面でこの学校にふさわしいと思いつすめたが、悪い事をした。
- A子は、適当に手を抜いたり、騒いだりする人ではないので、また、何でもきっちりやらないと…と思い込んだりするので苦しいのではないか。

その後、A子を含めて話をしようという母親の提案で、渋々ではあったが、A子も話をしてくれる事になった。

- (A子) • (ほとんどが、母親の話にうなづいたり、“そう”“ちがう”という短かい一言だった)
- クラスの一部の人から、言葉によるいじめを受けている。また、学校や担任からのプレッシャーも感じる。学校は厳しい所で甘えは許されない。
 - 保健室は、体調の悪い人が利用する所で、特別視されるのはイヤ。でも、テストは受けたい。
 - 担任は、私を無理に登校させようとするので恐い。いじめている人達についても影響が恐いのでそっとしておいてほしい。

母親と友人の母親との間にすわり、小さく背中を丸め、じっと机を見たり、声を出す時、隣の母親の方を助けを求めるように見たりしていたA子が印象的だった。A子の希望どうり、担任は迎えに行かず、保健室受験をしてもかまわないということにした。いじめについては、関係している生徒について表だった指導は控え、担任が注意している事となった。それからA子は、テスト2日目より保健室受験する事になった。それもテスト1日目に友人の一人である生徒が腹痛で1教科保健室受験した事を私に確めて来室してきた。テスト中は集中しているが、終わると迎えに来た友人を残し、早々に帰宅した。

翌週は欠席。父の恩師が自宅訪問、その後、学年主任が訪問し、A子は、ワープロの手紙を母に渡し、姿を見せなかった。それには、今までのいじめられた事、クラスがその影響を受けている事等書かれていた。

11月に入り、午後早退、体育、家庭科、美術等の欠課が続き、保健室でA子と話す機会が増えた。何度かクラスの友人がA子を迎えてくれたが、教室に戻る事は少なかった。そういった中で、父の恩師と保健室で、何度か昼食を共にした時は、明るく、笑顔でよくおしゃべりをし、本当にリラックスした感じだった。

- (恩師) • A子は、明るくおしゃべりのはずむ子供。徐々に意志表示が見られるので、自分を取り戻しつつあるのか。いじめられた事には、深く傷つき、許せない気持ちが強い。
- 周りを気にせず、“自分は自分”と考えてほしいが、それができない自分に苛立ちを感じどうしたらよいのかわからない状態である。

- ・自分の想いを外に出せないので、機会をつくって話していこう。

保健室でのA子の様子は、担任から他の学年教師にも伝わってはいたが、“見守っていく”という形となった。担任は、直接的な話は避け、仲間とはどういうものなのかという話をクラスの中で事あるごとに話され、また、いじめていた生徒達には、面談を行っていた。しかし、A子は、担任やクラスを避けている様子で、自宅でも古い絵本やCDに耳を傾けていた様子であった。夜も眠れず、肉体的にも精神的にも疲れきっているようであった。

ある日、A子は、母親と担任について話をしていて、何かいいたいが言えないという事であったので、恩師より、“自分であれこれ考えるより、担任の先生に想いの内をぶちまけなさい”と言われ、A子も思い切ったようである。私を含め3人で話をした。

- (A子)
- ・クラス全体が感じている事だが、担任は、私達を子供扱いしている。言葉の調子や扱いからそう感じる。また、学級通信やHRの話の中で、いじめについて話をされているが、私にとってはつらい。興味本位にとられるだけなのでやめてほしい。迎えに来られた事も本当にいやだった。
 - ・いじめている人達は、ああでしかないんだと思う様にしている。人は、外力で押さえつけたり、変えたりできないのだから、変わらない。けれども、先生達が監視していたらいじめないので、監視してほしい。

- (担任)
- ・A子が自分から話をしてくれてうれしかった。これ程、自分から話をしてくれた事は今までなかったのでよかったです。しかし、人は力で押さえる事はできないと言いつつも、監視をということに矛盾を感じるが…。
 - ・クラスでのA子のバックアップ作りが大切と思うが、A子自身が、友人と距離を置いてしまうので心打ちとける友人関係ができるかどうか心配。

面談後のA子の様子は、ホッとした感じで、笑顔さえみせた。“だいたい想いの内が話せました”ともらした。しかし、いじめた生徒達との話合い等については、拒否しておりその後も、早退、欠課は続いた。そして、だんだん、その生徒達がいるという事だけで、不快感をもつ事が増え、担任についても自分の気持ちをわかってもらえないと悩むようになっていた。学校に対し、母子共に不満を感じているようであった。

12月に入り、テストは、保健室受験となる。第一日目に母子で保健室を訪れる。

- (母親)
- ・あの話合い後から、担任に話してもわかってもらえないと言いました。学校は、何をしてくれるのだろうか。

かねてより、副校長が、A子と話をしてみようとおっしゃっていたので、A子の希望もあり、話をする運びとなったが、A子が緊張するので、是非自宅に来てほしいと切望された。副校長は、“非常に立場がむずかしいので考えたが、向こうの土俵で話をきいてみる”と訪問された。

しかし、2日目テスト後、保健室で連絡を待っていたA子は、他教師と話をしていて、怒ってしまった。

- (A子)
- ・悪いのはいじめている人達で私は悪くないのに、“がんばれ、元気だせ”とはおかしい。
 - ・苦しんでいる私の気持ちがわかっていない。放っておいてほしい。
 - ・クラスの話合いも、詮索ばかりになるので、いやだ。

翌日、副校長が訪問され、A子の気持ちをきいて下さる事となった。

(A子)・期待をもって入学したが、考えていたのと違っていた。2学期にこんな事が
ありショックだった。早目の冬休みをとり、疲れを癒したい。

その後、早目の冬休みをとり、冬期講座ややめていたスイミングをし、徐々に体調をと
り戻しつつあった。ただ学校の事については、気にしている様子であった。担任は、手紙
で連絡をとっていた。クラスの友人は、電話をかけたり、手紙を書いたり、冬休みには、
A子の家に行く計画をしていたが、A子より“クラブに行くので心配しなくてよい”との
返事で、実現しなかった。

いじめている生徒達については、何度も話をする事で彼女達に返ってよくないのではと
いう声もあったが、A子母子の不満は学校側のその態度であったので、もう一度話をする
事となった。彼女達は、“いじめたわけではないが、自分達のやった事で登校できないの
は悪かったと思っている。出てきてくれたら話もしたいし誤解も解きたい”と話していた。
また、冬休みに手紙を書いて自分達の気持ちを伝えたいとも話していた。

A子母子にその面談の件について話をすると、“気にしないようにします。落ち着いて
きた。そうですか、私の事を少しばかり気にはしてくれてるんですね。”と静かに語ってくれ
た。母親は、“A子は随分落ち着いてきて、学校がこんなにもA子のプレッシャーになっ
ているとは今さらながらかわいそうに思えてくる。三学期は元気になってほしい”とのこ
とだった。

三学期に入り、欠席、早退は少なくなったが、体育等の欠課は、あいかわらず保健室に
いる事が多い。クラスになじめず、HRの時間も教室にいる日が少なくなってきた。また、
クラスメートへの不信感（今まで一緒にいじめていた人達が、反対に声をかけてき
たりしてきた）がA子の中で大きくなってきて、“クラス替えが待ち遠しい、他のクラス
から私のクラスは雰囲気が悪いと言われている”等の言葉がきかれるようになった。いじ
めている生徒達が、大声をあげたり、コソコソ話をしていると非常に気にして、保健室に
やってくる事もあった。クラスでのバックアップの態勢は、組まれてはいたが、もう一つ
うまくいっていない様子であった。

三学期も終わり、二年生ではどうなるのだろうかと心配していたが、何かふっきれた様
に毎日、登校してきている。一学期に来室した際、少しクラスの事で話をしてくれたが、
すぐに笑顔が戻り、今では、あのうつむいてばかりだったA子ではなく、笑顔をみる事が
多くなっている。髪型も少し変え、かわいらしく、何が彼女をそうさせたのかわからない
が、勉強にもクラブにもまた、クラブでも順調のようである。

III. まとめ

保健室からみると登校拒否の成り立ちは、親から受け継いだ不安神経質などの因子をも
ち、長期にわたったある種の養育態度や、ストレスフルな生活環境において困難な場面に
遭遇した時、一次的な不登校が現れる。さらに未解決の葛藤や不安などが長期に存在した
時に、身体症状、問題行動、神経症等に逃避し、一次的に学校へ行けない行動ができると
理解するとわかりやすいであろう。文部省の児童生徒の問題行動の実態と文部省の施策に
よれば、「登校拒否とは、主として何らかの心理的、情緒的な原因により客観的に妥当な
理由が見いだされないまま、児童生徒が登校しない、あるいは登校したくともできない状
態にあることとして幅広く理解することが妥当であると言う。登校拒否の全国的な動向に

については、「学校嫌い」を理由として年度間に50日以上長期欠席した児童生徒」と定義づけられている。また、分類についても臨床的立場や原因等から様々な分類がされている。同様に文部省「生徒の健全育成をめぐる諸問題—登校拒否問題を中心に」(1983年)では、これらの分類を統合して次の様に分類している。

- ①不安を中心とした情緒的な混乱によって登校しない神経症的拒否型
 - ②精神障害による拒否で、精神的な疾患の初期の症状とみられる登校拒否の型
 - ③怠学すなわちいわゆるする休みによる拒否で、非行に結びつきやすい登校拒否の型
 - ④身体の発育や学力の遅滞などから劣等感をもち、集団不適応に陥り、登校を拒否する型
 - ⑤転校や入学時の不適応、いやがらせをする生徒の存在などの客観的な理由から登校を拒否する型
 - ⑥学校生活の意義が認められないというような独自の考え方から、登校を拒否する型
- この六つのタイプ（その他を入れて七つ）について、教育相談の行われた件数と全国の登校拒否生徒の態様別比較を中学生について比較したS61年の統計がある。

態 様 別 区 分	教育相談件数		全国登校拒否生徒数	
	生徒数	構成比(%)	生徒数	構成比(%)
① 不安を中心とした情緒的な混乱によ って登校しない、神経症的拒否型	2,854	69.5	6,367	21.5
② 精神障害による拒否で、精神的な疾 患の初期の症状とみられる型	144	3.5	931	3.2
③ 怠学すなわちいわゆるする休みによ る拒否で、非行に結びつきやすい型	414	10.1	16,278	55.1
④ 身体の発育や学力の遅滞などから劣 等感をもち、集団不適応に陥り、登校 を拒否する型	284	6.9	1,657	5.6
⑤ 転校や入学時の不適応、いやがらせ をする生徒の存在などの客観的な理由 から登校を拒否する型	330	8.0	1,753	5.9
⑥ 学校生活の意義が認められないとい うような独自の考え方から、登校を拒 否する型	47	1.2	720	2.4
⑦ その他・不明	32	0.8	1,850	6.3
合 计	4,105	100.0	29,556	100.0

この表より全国の登校拒否生徒の中で最も多いのは、③の怠学型で、教育相談件数中7割をしめている①の神経症的拒否型は、2割にすぎないことがわかる。これは、学校現場における不登校生徒と、相談所等を訪れる生徒は、原因において異なっていることがわかる。しかし、怠学型の中にもこれから神経症的症状をおこす恐れのあるもの、またカウンセリングを受けに行かないものが含まれているのかもしれない。いづれにしても、登校拒

否は、学校に来ない状態なのであるから、学校側が発症に何らかのかかわりがあると考えられる。

三川俊樹氏は、登校拒否を「ストレス」と関連づけて提えている。「ストレスとは、さまざまな生活環境の中で生じる出来事（ストレッサー）がきっかけとなって生じる危機的な状況にうまく対処する事（対処能力）ができなかった結果、心身の機能不全を起こした状態のことである」と述べている。

学校側のストレスとして、①学習、②クラブ、部活動、③対人関係があげられる。

学習上では、学習への動機づけのための競争や賞罰、報酬などである。これは、成績のよくなかった生徒や失敗した生徒にとっては、恥辱や罰などに対する不安が残り、小学校の低学年や進学をひかえた生徒、またある成績以上でないと進学できない私立学校等で多くの事例がある。

クラブ、部活動では、対人関係上のストレスとも関係しているが、仲間意識や上下関係の厳しさに対処できない場合である。また、必修クラブであるがため、好まないクラブでも行かなければならぬといった場合である。運動部、伝統のある部活動などで“いじめ”“暴力事件”などがきっかけとなりやすい。

登校拒否児の性格特性として、内向的、自己中心的、引っこみ思案といった特徴があげられる。友人をつくるのが下手で苦手なために、人間関係がわざらわしくなり、学校に魅力を感じず、行きたいという動機が弱くなる。また、友人や教師のはげましの言葉でかえって落ち込んだり、恐がったりし、それが対人関係のストレスとなってしまう。

一方、家庭内に過度な緊張がある場合も、子供の対処能力を低くしてしまう事がある。例えば、父親が厳しい現実から逃避している姿を息子がモデリングしたり、幼小時に両親との別れを体験した母親が子供と母子分離できないといった事例である。

以上の様な様々なストレッサーは、多かれ少なかれどの子達も経験している。にもかかわらず、ほんの少数ではあるが子供達が登校拒否を起こしている。人には外からの攻撃に対し、身を守る防御反応がある。精神面から考えると他者からの精神的刺激を自己の経験や外的資源などを使って処理する能力を持っている。よって、登校拒否行動が、それぞれの持つ生徒の対処能力の個人差に関係あるならば、その対処能力を伸ばし、様々な行動や技能を身につけさせることも考えねばならない。もちろん、学校側の持つストレスの改善は、まず最優先に考えなければならないし、家庭においては、両親の意見の不一致や対立などが現実に直面しようとする子供の対処能力を損なわせてしまう事も考えなければならない。したがって、子供の対処能力を高めると同時に、家族全体が起こってしまった現実に対処していく能力を高められるよう援助していく“ファミリーカウンセリング”も登校拒否において注目されている。

IV. 終わりに

A 子とかかわりを持つようになって附属に来て初めて生徒とじっくり話をしたように思います。忙しさにおわれ、生徒とじっくり話をする、耳を傾ける余裕がなくなってきたいるのかもしれません。また、生徒の本当の姿をみる目がかすんできているのかもしれません。学校側も、生徒がどのようなストレスを感じながら学校生活を送っているのか直視し、反省されるべきところはすべきだと思います。また、家庭においても、学校での子供達の

様子をみてもらい、家庭生活でも改めるべきところは改めるべきだと思います。そして、いつまでも学校、家庭で抱えこまず、第三者である機関への相談も必要だと感じます。事実、思春期は、精神疾患の好発する時期でもあるので、精神科に対し偏見を持つ事のないようにしたいものです。佐藤修策氏は、「登校拒否は子供の発達過程における一種の心理的な挫折体験と考えている。登校拒否臨床においては、これを『治療』とみないで、『援助』と考え、登校拒否臨床の目標は、苦しい登校拒否事態と対決し、これを子供と親が克服するように援助することだと思っている」と述べています。A子との出会いは、私に改めて、生徒との対話とは何なのか考えさせてくれるものでした。クラスの中に登校拒否児がいないとなかなか研修の機会や書物等に目を通す事も少ない事と思います。こういった事例を提示する事で、全体で考える場が開けたらと思います。

この研究集録を書くにあたり、また、A子とのかかわりにおいても常に適切なアドバイスや御配慮いただいた附属天王寺校舎養護教諭・楠本久美子先生他、多数の先生方に厚くお礼申しあげます。

参考文献

- 〔1〕第一法規 登校拒否のすべて 第I部 理論編
 - 1-1-2 欠席と欠席率
 - 1-1-8 身体的疾病と登校拒否
 - 1-3-1 臨床的視点からみた登校拒否の原因論
- 〔2〕佐藤修策著「精神の健康性と心理臨床—登校拒否研究を通じて—」川島書店 1991年

自己表現のすすめ

—英語で伝える私たちの生活と社会—

いとう よう一
伊藤洋一

I. はじめに

外国人に日本の社会や文化について尋ねられたとき、私たちはしばしば答えに窮する。これは何も英語力不足のせいばかりではなく（むろんそれも主たる原因ではあるが）、質問された話題についてよく知らないとか、あまり深く考えたことがないといったことがその要因だと考えられる。話す内容が自分になければ、ある程度の語学力があったところで悲しいかな沈黙に甘んじているしかないである。そして、自分の無知を、日頃の勉強不足を嘆くばかりである。

昨今、外国語で積極的に意志の疎通を図ろうとする態度の育成がますます重視されるようになってきている。しかし他人に伝えるべき事柄がなければ会話は成立しないし、対立する意見がなければ議論の起りようもない。態度の育成の前提としてまずは話す内容をもつことが出発点となる。生徒たちが毎日の学習で学ぶ様々な文型や語彙は表現のための素材にしかすぎないのであって、既習の学習事項を使うためには、ある文型や語彙を必要とする内容がなによりも必要である。そしてそれはある事柄についての情報や経験をもとに生徒自らが育むことによってしか持てないものである。したがって、その意見を人にわかるように伝えるための手助けをし、発表の機会を設けることが伝達手段としてのことばを教えるもののひとつの重要な役目となる。

昨年度、A E T (ALT)との授業を担当することになったが、その時間を生徒たちが英語を使って日常的なやりとりをする場に終わらせるのではなく、彼らの発達段階や興味に応じた話題に関して考えたり意見を述べたりする場にしようと考えたのは以上のような理由からである。普段の授業では教科書を限られた時間で消化することに精一杯であるため、書かれている内容について意見を求める必要を感じながらも、どうしても時間不足を理由にテキストを読んで終わらせることが多かった。そこで、週一度のこの時間は教科書からは離れ学校生活や社会問題について考え、生徒自身が伝えるべき内容をもつことができるようになる場として位置づけることにした。また外国人講師からの意見を聞くことで、自分たちと違った視点からある問題について考えることもできるのだということを生徒は知るだろうし、それは細やかではあるが異文化理解への端緒ともなると考えたのである。

II. トピックの設定

日常生活や、自らが暮らす社会における様々な問題について考えさせる機会を与えるために、まずは適当なトピックを設定しなければならない。幸いに、手元に『What Do You Think? / 考えよう私たちの生活と社会』（谷口幸夫／桐原書店）という本があった。は

しがきに、「この本ではあなたの身の回りの情報を整理して、わかりやすい英語で書いてあります。この情報（Input）をもとに、『あなたの意見は？』というドリルがついています。そのドリルの中で自分自身の意見（Output）をのべてみましょう。」と書かれている。生徒自身の意見を求める授業の目的にまさに適っていて、扱われているトピックも生徒の興味を引きそうなものが多かったので、この本をテキストとして使うことにし、そこで扱われているトピックを利用した。テキストの中の18のトピックのうち実際に授業でとりあげたのは、次の15のトピックである。

1. クラブ活動と勉強
2. 制服
3. アルバイト
4. 塾
5. 留学
6. 夏休み
7. 水の汚染
8. 働く女性
9. カード社会
10. 捕鯨
11. ジャーナリズムの役割
12. 飢餓とダイエット
13. 原子力発電
14. 在日外国人
15. アパルトヘイト

1から6のトピックでは、直接的な情報や自らの経験をもとに生徒が彼らにとってもっとも身近な事柄である学校生活について話すことができるようになることを目標とした。そしてそれを発展させる形で7から15のような社会問題にまで視野を広げ、より広範な話題について、拙いながらも英語で意見表明できるようになることを次の目標とした。確かにこの9つのトピックの中には日本語で話し合うことさえ難しいものも含まれている。しかしながら、この外国人講師との授業をただ条件反射的に簡単な質問に英語で答えることを目標とした日常会話の練習に止めるのではなく、ある話題についてよく考えしっかりととした自分の意見を述べる機会としたかったこと、そして生徒が将来において外国人と英語で語り合うことがあるならば、むしろ両者に共通した社会問題についてであろうと考え、敢えて取り上げることにした。

III. 授業での活動

さて設定したトピックを使っていよいよ授業を組み立てていくことになる。導入から始まって、情報の入力（収集）、自分の意見をまとめるための共同作業、発表とまとめというのが実際に行なった主要な活動であるが、それについていくつかの実例を挙げながら述べてゆくことにする。

1. トピックを導入する

生徒はその日の授業でどんなトピックを扱うのか事前に知っているが、テキストを読む前にこれから英語を使って話を進めてゆくための準備が必要である。それには様々な活動を考えられる。一年間を通じて次のような活動を行なった。

1. トピックについてのA E TとJ T Eによる簡単な会話
2. トピックについての生徒同志のミニ・ダイアログ
3. テキストの写真を利用した英問英答
4. トピックに関連した映像について英問英答
5. トピックに関連した数字を使ってのクイズ

6. トピックに関連した映画の台詞の聞き取り

この6つの活動の中からもっとも一般的であると考えられる1と、もっともよく行なった2の活動について簡単に説明してみよう。

1の活動はJTEとAETがその日のトピックに関する短い会話をしてその内容について生徒が質問に答えるというものである。例えば、第3課はアルバイトがトピックになっているのでAETの高校時代の経験をもとに次のように話を進めて行く。

JTE : I remember you worked part-time in your high-school days. What kind of job was it?

AET : I worked as a waitress in a restaurant.

JTE : Did you work every day?

AET : No, three times a week.

JTE : What did you do it for?

AET : To get some money to buy something I want.

JTE : Is it common for high-school students to work part-time in your country?
.....

会話を聞くことでAETの経験や意見をまず知ることができて、その後の会話の手がかりになるし、彼女の国（アメリカ）の高校生の生活の一端を知ることができる。この活動はそれなりに意義があり、生徒の興味を喚起するのに有効であると考えられるのだが、案外時間がかかるうえにどうしても生徒が受け身になってしまう。そこで二学期の始めから生徒がペアでおこなうミニ・ダイアログから授業を始めることにした。この活動では生徒はとにかく口を開かなくてはならないし、相手の答えに耳を傾ける必要があるので能動的にトピックに関わってゆける。テキストの第10課「便利さとその代償；朝シャン」では生活用水による水の汚染がトピックとして扱われている。生徒は授業の最初に次のようなミニ・ダイアログを行なう。

A : Do you wash your hair every day ?

B : Yes, I do. / No, I don't.

A : Why? / Why not?

B : Because I want to be clean all the time.

Because shampooing every day damages my hair.

(下線部の部分をBの生徒が答える)

ペアになった生徒は交互にAとBの役になってやりとりするのだが、簡単な会話なので練習に時間がかかるない。その後AETがAの役になって2、3人の生徒に質問することで、その日扱おうとしているトピックについて話すきっかけを作ることができる。最初の例に比べるとずっと手軽で時間もかかりず、しかも生徒が主体となることができるので、導入のための活動としては非常に有効であると考えしばしばこの方法を利用した。

2. 情報を収集する

あるトピックについて話すといつても事前にその事柄についての知識がなければ、そしてそれが英語で入力されていなければ、トピックについて話することは無理である。学校生活がトピックの場合はテキストの本文を主にその情報源とし、さらに生徒自身の経験を素材としてどうにか話を進めることができる。しかしながら学校という自分たちに近しい場所から踏み出して、社会で問題となっている事柄について話そうとする場合、新たな枠組みが必要になってくるのは当然である。そこで、トピックに関する情報や知識を得ることを目的とした活動を設けなければならない。そのためにリスニングとリーディングによる情報収集を目的とした活動を行った。

リスニングの活動は以前に比べると随分と行なわれるようになったが、市販の録音教材をテープで流して生徒がそれを聞き取る活動がもっとも一般的ではないだろうか。生徒にすれば自分のリスニングの能力を試されているのだという印象を抱いてしまい、聞き取れたか聞き取れなかっただけが目的になってしまいがちである。そこでもっと聞き取る内容に焦点を当てた活動ができるものかと考えてみた。例えば、A E Tがトピックに関連した三者択一のクイズを出し、三つある選択肢の中から正解だと思うものを生徒が選ぶ活動を考えられる。実はこれは導入の方法のところであげた活動の5を発展させたものである。次はその一例である。

Q. 1 How many people are starving to death on the earth?

- a. 5,000,000 b. 50,000,000 c. 500,000,000

Q. 2 How many children die from hunger a day?

- a. 400 b. 4,000 c. 40,000

Q. 3 How many tons of crops do we get a year in the world?

- a. 18,000,000 b. 180,000,000 c. 1,800,000,000

Q. 4 How many tons of crops do we need a year to feed all the population in the world?

- a. 500,000,000 b. 1,000,000,000 c. 5,000,000,000

この日のトピックは「飢餓とダイエット」であるが、この四つの質問は食糧問題について話をする材料を与えていた。生徒は答えを推測し正解を知ることで、いかに多くの人々が毎日飢餓にさらされているか、そして地球上の全人口を養うほどの穀物が生産されているにもかかわらず餓死者が絶えないという意外な事実を具体的な数字を通して認識することができる。つまりこの活動は単にリスニングの練習をしているのではなく、トピックについて考えるための素地を作る役割を果たしているのである。

リーディングによる知識の獲得は読解の授業で当たり前のように行なわれているが、生徒が主体になるような情報交換の活動としてのリーディングを考えてみた。ペアになった二人がそれぞれ違う絵や図をもとにして、質問を交わしながらある事柄についての情報を完成させるのはしばしば行なわれる活動であるが、それを応用すればただ自分でテキストを読むといった単調な作業を活性化できる。またリーディングを文章を読むことに限定し

なければ、グラフや地図を使っての活動が可能になる。テキストの第17課では、原子力発電が取り上げられているのだが、このトピックについて話し合うには予備知識が不可欠である。そこで日本の電力の供給や原子力発電に関して二種類の異なる資料を『ジャパン・アルマナック』（朝日新聞社）を利用して作り、それについての質問を用意する。（資料1）生徒はペアになり、質問をし、相手の質問を聞き、自分の持っている情報から答えを探し、それを相手に伝える一連の活動を相互に行なう。トピックに関する情報を二人で協力して収集することがことばを媒介とした伝達活動になっている。さらに、その情報を手がかりにして次のような真偽問題を解きながら事実を確認してゆく。

Read the following statements and choose the correct ones.

1. There will be more than 50 nuclear power plants in the near future in Japan.
2. The Japanese government has a plan to build some plants near big cities.
3. Japan will depend more and more on nuclear power as a source of energy.
4. Nuclear power became the second major source of electricity in these past ten years.

一般的なリーディングの活動には違いないが、原子力発電というトピックについての情報を得るために過程の一部になっているので、文章を読むことの目的が明確である。グラフや図を読み取り、わかったことを相手に伝え、それを書き留めて計算をし、答えを出し、その情報を整理して、事実に対する認識を深めてゆく。活動全体を通して、設定されたトピックについて話し合うための予備知識が蓄えられてゆくのである。

以上の二種類の活動は学習者が自分の意見を築くための土台づくりとして、情報や知識を積み上げてゆくことを目的としている。いづれの場合もことばそのものが学習事項として自己目的化しているのではなく、作業を進めるためになくてはならない道具として機能している。これは日常的な場面におけることば本来の働きにほかならない。

3. トピックについて考える

授業の中心となるのがこの活動である。既に述べたように学校生活に関するトピックを扱う場合生徒自身の直接的な経験や知識があるので、準備もテキストに書かれた意見を読むくらいの簡単なものでよく考えやすい。とはいってもまったくの自由討論では意見も出にくいし的が紋ないので、ある程度の枠組みが必要である。枠組みの設け方としては様々なものが考えられるが、生徒に興味を持たせるような状況を設定する方法がある。次はその実例である。

1. 留学生をクラブに勧誘する
2. 制服についての記事を学校新聞に書くためにインタビューをする
3. アルバイトで学業が疎かになっている友人を説得する
4. 留学するために面接試験を受ける
5. 実際の夏休みと、架空の夏休みの計画をたてる

(資料1)

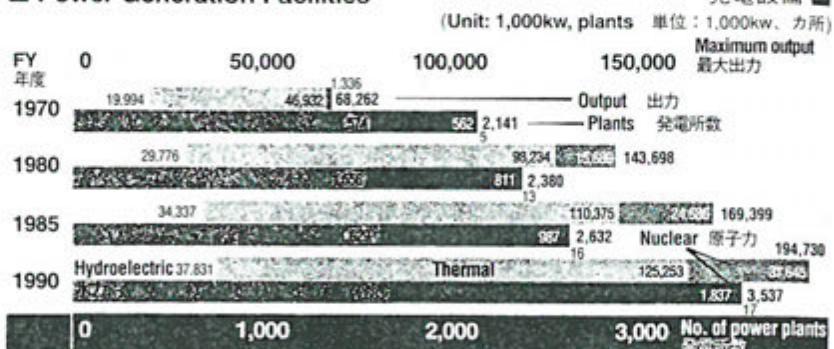
16. Safety or Not? (A)

1. Ask your partner the following questions to get some information of nuclear power generation.

- Q.1 How many nuclear reactors were in operation in 1991?
- Q.2 How many nuclear reactors were under construction in 1991?
- Q.3 Which plant will be the biggest in the future?
- Q.4 Which area of the country has most nuclear power plants?
- Q.5 How many nuclear power reactors were there in that area in 1991?
- Q.6 How many kilowatts of electricity can be generated in that area?

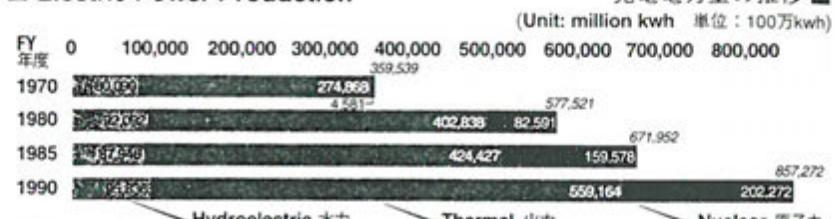
2. Listen to your partner's questions and give him/her the information needed.

■ Power Generation Facilities



★Federation of Electric Power Companies 電気事業連合会「電気事業便覧」

■ Electric Power Production



★Federation of Electric Power Companies 電気事業連合会「電気事業便覧」

16. Safety or Not? (B)

1. Listen to your partner's questions and give him/her the information needed.

■ Locations of Nuclear Power Plants (End of 1991 fiscal year)

Power Reactor & Nuclear Fuel Development Corporation
動力炉・核燃料開発事業団

Hugen ふげん (Fukui) • 165

Monju もんじゅ (Fukui) • 280

Kansai Electric Power 関西電力

Mihama 美浜 (Fukui) • 340 • 500 • 826

Takahama 高浜 (Fukui) • 826 • 826 • 870 • 870

Oi 大飯 (Fukui) • 1,175 • 1,175 • 1,180 • 1,180

Kyushu Electric Power 九州電力

Genkai 玄海 (Saga) • 559 • 559 • 1,180 • 1,180

Sendai 壱戸内 (Kagoshima) • 890 • 890

Shikoku Electric Power 四国電力

Ikata 伊方 (Ehime) • 566 • 566 • 890

Japan Atomic Power 日本原子力発電

Tokai 東海 (Ibaraki) • 166

Tokai Daini 東海第二 (Ibaraki) • 1,100

Tsuruga 富賀 (Fukui) • 357 • 1,160

原子力発電所の立地 ■

(1991年度末)

(Unit: 1,000kw 單位: 1,000kw)



★ Federation of Electric Power Companies 電気事業連合会「電気事業便覧」

2. Ask your partner the following questions to get some information of nuclear power generation.

Q.1 What is the main source of energy to generate electricity? (Graph 1)

Q.2 How many nuclear power plants did Japan have in 1970 and in 1990?
(Graph 1)

Q.3 How many kilowatts of electricity could nuclear power plants generate in 1990? (Graph 1)

Q.4 Which source of power produced more energy, hydroelectric or nuclear in 1990? (Graph 2)

Q.5 What percent of electricity was generated by nuclear power in 1990?
(Graph 2)

Q.6 How many times as much electricity was generated by nuclear power in 1990 compared to that generated in 1970? (Graph 2)

ここで留意すべきなのは、たとえ身近な話題を扱うにしても単なる雑談のレベルに止まらせないで、もっと掘り下げてトピックについて考えられるような発問を用意することである。そのような工夫をしてことで生徒はより深く物事を考えられるようになるのではないかだろうか。第7課「留学の功罪」の授業を例にして、どんな活動が可能であるのか紹介してみたい。

留学といえば昔にくらべて随分と身近なものになった。それは英語を学ぶものにとって大きな憧れであるし、人によっては学習の動機にもなる。しかし留学の機会が増えるにつれて留学生が巻き込まれるトラブルも増加している。留学の華やかな面と同時に、その問題点についても考えさせたいところである。そこで別の時間を利用して、日本人の学生の留学体験記を速読の教材として読ませ、また留学を扱ったドキュメンタリー番組を見せて、留学の正と負の両面について考えられるような題材を与えた。授業ではテキストのダイアログを読み留学についての一つの考え方を知るとともに、必要な語彙や表現を学ぶ。そしてトピックについて個々の生徒が考えるため、次のような状況を設定し問題意識を喚起するような質問を用意した。（資料2）ここでは英語圏にある高校へ一年間留学するプログラムに応募した生徒が筆記試験に合格し、二次試験である面接を受ける場面を設定している。簡単なあいさつから始まって、留学の動機や目的、留学中にやりたいこと、トラブルが起こった場合の対応の仕方などについて順次質問され、それぞれの問い合わせに対して自分の考えを述べなければならない。速答を要求するのではなく、ある程度時間をかけて留学についての自分の考えをまとめることが目的である。テキストのダイアログやプリントに与えられてるヒントを参考にして作業を進めてゆく。ペアを組んでいる相手の意見を聞いたり教師の助言を受けながら、質問に対する答えを考える。完成した解答を使ってペアで練習して、最後に面接の会場を設置し何人かの指名された生徒が応募者になったつもりでインタビューを受けることになる。他の生徒は誰の受け答えがよいかを判定し留学に行ける応募者を決めるようにしておく。現実に起こり得る状況であり、特に留学に関心がある生徒にとっては意欲的に取り組める活動である。応募者になった生徒は試験官の役割をするA E Tと一対一で話をすることになるのでかなり緊張するが、現実味のある経験ができる。他の生徒も自分で答えを用意し応募者の答えを聞くことで、留学についての自分の考え方を深めたり意見をまとめるよい機会をもつことになる。

二学期、三学期にはさらに視野を広げ社会の出来事や問題について考えてみた。社会問題を扱う場合、比較的身近な事柄で今まで考えたこともあり学校生活についてのトピックと同じく準備をそれほど必要としないものと、情報や予備知識が不十分なためかなり準備をしないと話が始められないものがある。大まかに分類すると、前者は「水の汚染」「働く女性」「カード社会」「ジャーナリズムの役割」などであり、後者は「捕鯨」「原子力発電」「アパルトヘイト」などである。ここでは後者のトピックに関して行なった活動を紹介する。

2の「情報を収集する」のところで述べたような方法によってトピックについての知識や情報を得たところで、それを前提として生徒が話を進めやすいような活動を考えなくてはならない。現実の生活において会議などの特別な場合を除いては、日常的なやりとりからまたまた話題が社会問題に及んで自分の意見を求められ、日頃思っていることを表明するということが自然な流れだと考えられる。そこでトピックに関する情報を折り込みなが

[資料2]

5. STUDYING ABROAD

You are much interested in studying abroad. So you have applied for a program to study at high school in a foreign country for a year. You have passed the written test. Now you are to have an interview test.

Interviewer = A Interviewee = B

(B knocks the door.)

A: Come in!

(B enters the room and greets the interviewer.)

A: Have a seat. (B sits down.) May I have your name, please?

B: I am _____

A: How do you feel now, Mr. ____ / Ms. ____?

B:

A: Good. / Make yourself comfortable.

I'm going to ask you some questions to find out what you think about studying abroad.

B: I see.

A: First of all, why are you so interested in studying abroad?

B: Because _____

A: As you know, if you pass this test, you will be able to study in any English speaking country. Which country do you want to stay in most?

B:

A: Why?

B:

A: What experience do you hope to have during your stay there?

B: I want to _____

A: What good do you think it will do to you?

B: Well, I think _____

A: I think you should have a certain level of English command to study abroad successfully. How long have you been studying English?

B:

A: Some people have a hard time making themselves understood with the host family. What would you do if you had the same problem?

B: I would _____

A: What do you think is most important when you study abroad?

B:

A: I see. That's all I'd like to ask you about. I hope you will be able to study abroad.

B: Thank you very much.

[Vocabulary]

improve my English ability 英語をみがく talk with native people 規地の人と話らう
have a broader view of things 観野を広げる become internationalized 國際人になる
understand ... culture better ~文化をさらに理解する
introduce our own culture 自國の文化を紹介する

ら、すでに読んだテキストに出てきた語彙や表現をなるべく使った会話を用意し、既習事項の定着を兼ねながら、会話の一部を自分の考えにしたがって変えたり、予め作られた空欄を自分のことばで補うことにより会話を完成させる活動を行なった。こうすれば土台となる会話に導かれてトピックが多少難しくても話が進められるし、部分的に答えるだけで負担が軽減される。

第18課では「アパルトヘイト」がトピックとして取り上げられている。この授業をしていた頃は、折しも南アフリカで初めてのすべての人種による選挙にむけての準備が進められており時宜に叶った題材であった。トピックについて生徒はある程度知っていたり、英語で情報を与えるために直前の授業を利用して最近の南アフリカの情勢について書かれた雑誌の記事を読ませた。そして扱われているトピックに関する知識の枠組みができたところで、AETと協力して作ったアパルトヘイトに関する会話を印刷して配布し、それを手助けに話をすすめるようにした。（資料3）新聞記事の内容をきっかけに、アパルトヘイトが話題になり、選挙のことや、南アフリカの将来について二人であれこれと意見を交換する設定になっている。会話そのものが現状の説明となっていて、その情報をもとに空白の部分を考えるようにしておく。まずAETとJTEがモデルのダイアログを示す。そしてペアで会話を完成させる作業へと移って行く。教師はその間生徒の間を巡回して適宜助言を与える。時間がきたなら何組かを指名して、会話を読ませて自分たちの考えを発表させる。質問と解答の部分だけを取り上げてさらに何名かの意見を求め、AETがそれに対してコメントを加える。このような手順でアパルトヘイトについて話をした。以下の文は授業での活動をもとに生徒が定期テストにおいて書いたものである。（会話は少し短くして質問の数が減らしてある。問答の部分だけ抜粋する）

Q : What do you think about the idea of IFP ?

- A : (1) I guess that maybe they are afraid to change the political system because they might lose their power.
(2) I think they must change their thought to make a new South Africa.

Q : What do you think South Africa will be like in the future ?

- A : (1) I hope all races will have equal rights, use them, and cooperate to make a beautiful and peaceful country, which will lead other countries in Africa.
(2) I think many black people will be politicians, sharing power with white people.

扱う題材が難しい場合、 性急に意見を求めて話すべき内容を持たなければこぼは出でこない。トピックへの関心を呼び覚まし、問題意識を喚起することから始めなければならない。授業中に行なわれる対話や映像によるトピックの導入、リスニングやリーディングによる情報の入力（収集）、既習の語彙や表現を使った会話練習などの活動は、より高度な能力を育むためのステップである。ひとつひとつの課題を解決しながらその成果を積み重ねてゆくことで、なんとか生徒は自分で意見を持つことができるようになる。 そうした活動を通じて今まであまり関心のなかった事柄についてこぼを発することができるようになることに学ぶことの核心がある。思考という営みがこぼを得て自己表現として結

[資料3]

20. Ebony and Ivory

3. Work in pairs and complete the dialong with your own words.

Jack is reading an article about South Africa. Then he talks to Kenji, his room-mate, looking up from the newpapers.

Jack: It's hard to believe how quickly things have changed in South Africa.

Just think that Nelson Mandela was released from prison as recent as 1990.

Kenji: Yes, that's right. Thanks to the efforts of Mandela and De Klerk, South Africa will have its first all-race election in April.

Jack: But I felt bad when I heard that the leader of the Inkatha Freedom Party had been trying to keep separate homelands for some blacks. What do you think about his idea?

Kenji: Well,

Jack: Isn't it strange that some white groups have the same idea as the IFP.

They say that they want to have their own land to live separately from black people.

Kenji: Probably they are afraid that they will have no freedom if black people rule the country.

Jack: The latest news is that these groups said they would boycott the election. But if they do,

Kenji: Naturally apartheid will not disappear suddenly. They will have many problems to solve.

Jack: What do you think South Africa will be like in the future?

Kenji:

At least the April election will give everyone hope that things will be better.

Jack:

[Vocabulary]

violence 効果 conflict 矛盾 difficulty 困難 civil war 内戦

demand for separation 分離への要求 transition to democracy 民主主義体制への転換

pro/anti-apartheid アパルトヘイト支持の/反対の political role 政治的な役割

equal rights 平等な権利 provide job, education, housing 職業、教育、住宅を供給する

negotiation 談判 reach an agreement 合意に達する settlement 裁決、決着

実するのである。

IV. 活動の評価

ある事柄についての考えをまとめ、それを自分の意見として発表するこのような形式の授業において、生徒が獲得すべきことは二つある。ひとつはあるトピックについて発話するために必要な語彙・表現であり、もうひとつは、すでに述べたようにその表現を必要とする内容である。授業中のまとめの段階で生徒から出てきた意見に対してはできるだけコメントを加え、ほかの生徒の参考になるようなすぐれた考えについては板書して確認し、生徒の意欲を高めるよう心がけた。しかし授業という限られた時間の中ですべての生徒に意見を述べさせて評価することは不可能である。本来なら、授業中の活動内容を何らかのかたちで数値化して評価すべきだとはわかっていたが、残念ながらそこまで緻密にはできなかった。そこで、前者については授業で行なった会話を使って語彙力・表現力のテストとしてその定着を確認し、後者については自分の意見を文章として書かせてそれを授業での活動の総和として評価の対象とした。

私たちの生活や社会についてよく考え、それを自らの意見として伝えるのが授業の第一の目的であった。すでに述べた授業での活動を通して様々なトピックについてある程度自分の考えを持てるようになったわけだが、まだ会話のなかでの断片的なものでしかない。最終的には心の内に芽生えた考えを書くという作業を通じて整理し、まとまりのある意見として結晶させる必要がある。そこで、授業で扱ったトピックの中から一つを選び、定期テストの問題や宿題としてそのトピックについての意見を書かせた。（授業において提示された考えの中ですぐれたものはプリントにして配布し、自分の意見を書くとき参考にすることができるようにしておいた）文字によって表現された各人の意見の中からよい作品を選び、プリントにして配布することで全体に還元し、それを読むことでさらに考えが深められるようにした。

一年間の間に広範なトピックを扱ったがそのなかで生徒たちはどんなことを考えたのだろうか。試験の問題や宿題として書かせた「アルバイト」「留学」「働く女性」「捕鯨」「原子力発電」についての意見を紹介し、彼らがそのときそのときの授業において取り組んだ様々な活動の成果を紹介しておく。（資料4）

V. A E Tの役割

真実苦労の多い一年であったが、なんとか最後まで続けられたのはこちらの要求に勞を惜しまず応えてくださったA E Tのブレンダ・マクラクリンさんの力に負うところが大きい。最初のうちはこちらの主導で教案を考えていたが、一年が終わる頃になってようやく対等な関係で準備まで含めて授業に関わることができるようになった。彼女自身は一年間の本校での授業についてどんな感想をもたれたのだろうか。以下のコメントをいただいたのでここに紹介しておく。

My teaching experience as an assistant English teacher to Itoh sensei at Tennoji Fuzoku High School was very rewarding. This was due in part to the many things I was able to learn from him, and also due to the motivation of the students. Most

of them, during the course of the year, were able to improve their ability to think about an issue critically and then present an opinion using evidence to substantiate it.

In the first half of the school year, because the topics were personal, it was relatively easy for the students to use English in class discussions. They had already given some thought to the issues and had reasons immediately available to support whatever opinion they eventually arrived at. In the second half when the discussion progressed to global issues, it became more difficult for the students to use English to talk about their ideas. Although it was challenging, it was not impossible, and the students were able to come up with some very thoughtful comments.

All in all, team-teaching last year proved that in a conversation class, one of the key factors in encouraging students to use English is to provide them with a reason to do so by making the class relevant to their own lives.

最後にA E Tの役割を整理しておく。まず準備の段階ではJ T Eの作った原稿の英語を添削するのが重要な仕事である。ただ、二学期からはJ T Eはアイデアを伝えるだけで彼女に会話を作ってもらうことも何度かあった。その場合はJ T Eが会話の長さや語彙をチェックした。授業中は、モデル・ダイアログの相手になったり、生徒が英文を書くときの相談役になったり、生徒の発表についてコメントをしたりと、いろいろと助けてもらった。さらに生徒の書いた意見を添削してもらうこともあったが、ひとりひとりの生徒の意見にコメントを書いておられたので彼らにとっては随分と励みになった。惜しむらくは、授業中は生徒主体の活動が多くなったこともあるって、彼女の経験や考えを話してもらう機会があまりなかった。異文化を知る窓口として彼女の出番をもっと設けていたなら、異文化理解の面からさらに充実した授業になったことだろう。自分たちとは違った視点からトピックについて考えられることを知ったなら、生徒からもっと思慮深い意見を引き出せたかもしれない。それが心残りである。

VI. 総括と課題

一年間の授業を振り返えてみると、試行錯誤の連続であった。A E Tと長期的に共同で授業をするのも初めてであったし、生徒に自分の意見をまとめさせることを中心とした授業を行なうのも新しい試みであった。何日考えても容易にいいアイデアが浮かばず、授業の直前までプリントの原稿を手直ししていく冷汗をかいたことも一再ならずあった。教案通りに授業が進められたときもあれば、うまくいかずに教案の手順を変更することもあった。ただ、自分たちの暮らしや社会についてしばし足を止めて考えてみようという当初の目的そのものは授業のなかで達成することができた。また、授業で行なうべき活動やその配列については一定の形式が出来たと考えている。残されたことは本稿において紹介した個々の活動をさらに改善し、いかにそれをバランスよく組み合わせるかである。

むろん反省点も多々あった。まず第一には意見をまとめる時間を十分に確保できなかつたことが挙げられる。一時間に行なう活動が盛り沢山であるために、本論にはいるまでに時間を要してしまい、考えがまとまらないままに生徒に発表させてしまったことがあった。また、ある生徒の発言を土台にして別の生徒の発言を促して意見をやりとりすることがで

[資料4]

What Do You Think?

<Part-time job>

I have never done a part-time job. Because I have to study and I want to have enough time to sleep. My parents often says, "Person who doesn't work must not eat." Then I help their work, for example, cooking dinner. I think that to help our parents is more important than doing part-time job.

I think high school students don't have part-time job. If we had these job, we couldn't do a lot of experiences. For example, club activity, jichikai activity. We can do these activity just now. But when we become college students, we can do a lot of part-time job. So high school students don't have part-time job.

I think part-time job is O.K. for high school students. Because in high school we learn many subjects, but the subjects is not often useful in the future. Part-time job teaches us how to get along with many people in different generation, and how to use own money. Part-time job must do ourselves good.

<Studying abroad>

I think studying abroad is a very fantastic thing. I think so many students want to study foreign languages and see how big the world is, so they go abroad. They'll have experience touching many cultures and culture makes them abandon their stereo-typed idea. But when they can't make themselves understood in a foreign language, they'll lose their courages. So I'm sure studying abroad isn't useful for all the students.

Many students go abroad to study to learn other cultures and languages. They will be able to learn things which they can't learn in their own country and these things will help them to see their own country from a distance. Of course, they will be very lonely at first. It is hard to fit themselves into totally different things, but as long as they don't lose themselves, they will be fine. For that, it's important to have a definite purpose to study abroad.

I'm very interested in studying abroad because there are many adventures to us in it. In Japan I depend on my parents. But if I go to foreign countries, I have to do anything for myself. In other words, studying abroad will make me independent of my parents. It is good for all of us when I come back to Japan. And I can improve my English ability, talking with native people. But I think we need to keep the manner. I want to have a broader view of things.

<Women at work>

Women should be given the same chance to do interesting work and develop their individual talents. In that view point, men and women have the same right. But in family, they don't have the same part. They should share the houseworks well for 'their children' and 'for themselves'. Both of them work outside and nobody take care of their child. That will keep him or her from knowing somebody'd love. And if they don't share the housework well, either of them will be weighed down. It is important to recognize their own roles.

Why am I studying now? Of course to get responsible position someday. Not to take care of my children. I think having children is important work, but all my life doesn't exist for it. I know it is difficult to work while taking care of

my children. A lot of people think men have to work to make their living but women can depend on her husband. I doubt this. I think women have to work to make their living.

I don't think it is right that only women stay at home. But not all women want to work at office as hard as men do. So I think a woman who wants to work should work, and a women who wants to stay home and be a good wife should be at home. It is said that women have become strong these days. It is the best for people to be able to do what they want.

<Whaling>

I am against commercial whaling because the history shows us that we've killed them too much. Since whales are wild animals and not like cows, we can't raise the number of whales so easily. Also now seas are getting polluted, so even though they are not going to be extinct, still I'm sure that they are having a hard time to live. But I think just to maintain the Japanese culture, maybe very small amount of whales can be killed.

Whales are lovely and intelligent animals, I think. But they are animals just as cows are. If it's cruel to kill whales, it's cruel to kill cows. Exactly, it is more difficult to control the number of whales than that of cows, so we Japanese have to be careful about whaling. If we can be careful and whales will not decrease in number, we can eat whales, I think. Then we have to think about the other decreasing animals in the world.

I am against whaling, because we human beings can't increase the number of whales like we do with cows. Now, the number is increasing because people haven't been hunting whales. If we begin whaling again, I think, the number will decrease soon. Of course it is important to keep our Japanese culture of eating whale meat. But we also have to consider about the world opinions. There are a lot of food to get protein now, and we can get them very easily, so we don't need whale meat to get protein. So I am against whaling.

<Nuclear power plant>

Now that nuclear power plants have been, and will be built, we can't stop using electricity made by nuclear power plants right now. So it is not appropriate that people only demonstrate in front of nuclear power plants. Instead they should propose some new ways of making electricity available. I think that must be the best way for us.

I think that all of the nuclear power plants should be shut down immediately. In the past people had lived without electricity. We can live without electricity, but we can't live without our good health. Human kind depends on too much. Don't you think so?

It's very difficult to think about it because we need so much energy throughout the year, for example, for the air conditioners or lights. But we should think about its demerits. We can't easily suggest to stop using nuclear power as long as we use much energy. We know how dangerous it is and it's too late to do something after an accident happens. But we don't believe that an accident will happen in our country, so we think we are safe and it's O.K. to turn on the lights, TV, ... We must change such thoughts and think more seriously about our daily lives and the comforts we enjoy.

きなかったことは是非とも解消すべき課題である。ある程度話せそうな話題についてはあまり枠組みを作らずに自由な発言を求めるべきであったと今は思っている。また、難しいトピックが続くと学習者が消化不良を起こしたり、欲求不満に陥ったりするので、長期的な視点からトピックを配列する必要性を感じている。さらには、精選した題材について掘り下げて学んでゆくことがいかに大切か実感することができたので、トピックの選択に際しては充分に配慮しなければならないとも感じている。また、評価のところでも触れたが授業中の生徒の活動をどう数値化して評価するのかも考えてゆかねばならない。

このように今後改善しなければならないことはいくつもあるのだが、多少関心があったとしても深く考えることのない話題を取り上げて考えさせ、それを英語で表現する機会を持てたことは大いに意義があったと考えている。日常会話のレベルに留まらずに生徒の発達段階や興味に応じた活動内容を提示することで、自分の考えを英語で表現することの難しさ、そして自分のことばが通じたときの悦びを生徒は実感ただろう。授業中の活動を通じて生徒たちが視野を広げ、自分たちの暮らしや社会をしっかりと見つめる姿勢を身につけてくれたならば本望である。

VII. むすびにかえて

ある夏のこと、私は四人のスイス人とウェールズを旅行していた。最初の晩、近くのパブで食事をしながら雑談していたときまたま政治的なことが話題になった。そのとき欧洲には何発の核弾頭ミサイルがあり、現在核の時計は何時何分を指していると具体的な数字をあげて議論を進めてゆく彼らに驚いてしまった。そして自分のまわりのことにしか興味がなく、世の中の仕組みや政情についてあまりにも無知な自分をはっきりと自覚した。今まで自分はいったい何を学んできたのか。そんな劣等感に苛まれた。

それから十年以上たち、日本にいながら外国人と話すことはそれほど珍しいことはなくなってきた。外国人と交われば交わるほど、お互いの理解を深めるためには日常会話のレベルを越えて日本について、世界について議論する機会が増えてゆくだろう。そんなとき社会人となった生徒たちが授業を通じて考えたことを思い出し、なんとか英語で自分の意見を表明して議論を深められたなら。そうした場面が実現すること。それが英語教師となった私の願いである。

<参考文献>

- ケネス・サガワ、小林昭江『若者たちの異文化体験2』（聖文社）
- 『ジャパン・アルマナック'93』（朝日新聞社）
- 犬養道子『飢餓と難民』（岩波書店）
- 勝俣誠『現代アフリカ入門』（岩波書店）
- 篠田農『アバルトヘイト、なぜ?』（岩波書店）

意欲的に個性・創造性を發揮させる指導

——過去時制の指導「物語の創作・発表」——

かな いとも あつ
金 井 友 厚

I. はじめに

中1のはじめには、ほとんどすべての生徒たちが、英語が好きだと言ってくれる。英語に対して大きな希望や夢を持っていた生徒たちの中にも、残念ながら、その興味を少しずつ失っていくものが多い。中1の終わりには、英語に苦手意識を持ってしまっている生徒が若干できてしまう。もちろん、彼らの努力不足もあるだろうが、教師の側にも大きな責任があるだろう。そこで、中2で最初に出てくる言語材料に工夫を凝らして、生徒たちにわかりやすく、興味・関心を持たせる授業を提供することを考えてみた。中2の最初の言語材料は過去形である。規則動詞の過去形、不規則動詞の一部の過去形を導入したあとで物語の創作と発表の活動をさせることにした。物語に過去形は自然に使われるからである。

II. 活動の実際

1. 活動のねらい

活動の第1時限に活動のねらいを告げる。資料1に書かれているように、個人活動ではなく、各クラスにすでに存在する8つの班を利用した、グループ内で協力し合って、物語を創作していく。物語の翻訳で終わるのではなく、グループで工夫して、4場面とオリジナルの1場面を加えて、5場面で完結する物語を創作する。そして、みんなの前で発表し互いに評価しあう。また、日本だけでなく世界各国の物語から選択することにより、異文化理解、国際理解を培うことにも役立つ。この活動の中で、英語を読み、書き、聞き、話すといういわゆる4技能を育てる総合的なコミュニケーション能力の育成を目的とする。

2. 活動計画と実際

生徒に渡した資料1の活動計画にそって、物語の創作と発表を進めていく。(1)の物語の選択は、グループ内で話し合って、決定していくが、選択のための資料として、写真1、2の本の世界のお話、日本のお話の目次リストを各班に与えた。



[資料1]

Picture-Card Show
--- Original & Creative Story ---
(物語の創作と発表)

- ・日本や世界各国の物語を読み、いろいろな国の文化や習慣を学ぼう。
- ・5人グループで協力して、その物語を自分たちの習った易しい英語で、作り替え、さらに、もう一場面を創作し、紙芝居風に表現してみよう。
- ・みんなの前でその物語を発表し、その物語を味わおう。

◎ 活動計画

- (1) 4/13 Wed. 活動計画の説明
物語の選択（世界のお話、日本のお話のリストを検討する）
- (2) 4/14 Thu. 物語の決定
4場面の構成を考える。創作場面（5場面）について話し合う。
班内で役割を決定する。
- (3) 4/16 Sat. 各場面に合った絵を描く。
各場面の原稿を英語で作成する。
- (4) 4/19 Tue. 絵と原稿を完成させる。
原稿の音読練習をする。
物語のあらすじを日本語で書く。
- (5) 4/20 Wed. 各班ごとに、録音する。
発表の仕方を話し合って、工夫する。
- (6) 4/21 Thu. 発表（本番）
他の班の発表を評価する。他の班の発表より学ぶ。
- (7) 4/22 Fri. 発表（本番）
他の班の発表を評価する。他の班の発表より学ぶ。
- (8) 4/23 Sat. 発表（本番）
他の班の発表を評価する。他の班の発表より学ぶ。
- (9) 4/26 Tue. 他のクラスの優れた発表の録画を鑑賞する。
- (10) 4/27 Wed. 他のクラスの優れた発表の録画を鑑賞する。
自分たちの班の取り組みについて反省する。

〔資料2〕

47期生（中2）

Picture-Card Show
Original & Creative Story 一覧表

クラス	班	物語名
A	1	ヘンゼルとグレーテル 【ドイツ】 (グリム)
	2	しあわせすぎる男 【ギリシャ】 (イソップ)
	3	ほらふき浦島 【日本】
	4	おむすびころりん 【日本】
	5	マッチ売りの少女 【デンマーク】 (アンデルセン)
	6	桃太郎 【日本】
	7	おおかみと七ひきの子やぎ 【ドイツ】 (グリム)
	8	町のねずみといなかのねずみ 【ギリシャ】 (イソップ)
B	1	豆の大木 【日本】
	2	しあわせすぎる男 【ギリシャ】 (イソップ)
	3	きっちょむさんと火事 【日本】
	4	美女と野獣 【フランス】 (ペロー)
	5	みにくいあひるの子 【デンマーク】 (アンデルセン)
	6	ウイリアム・テル 【スイス】
	7	つるの恩返し 【日本】
	8	ヘンゼルとグレーテル 【ドイツ】 (グリム)
C	1	ウイリアム・テル 【スイス】
	2	美女と野獣 【フランス】 (ペロー)
	3	へっぴりよめご 【日本】
	4	桃太郎 【日本】
	5	こびとくつや 【ドイツ】 (グリム)
	6	ジャックと豆の木 【イギリス】
	7	人喰い鬼と少年 【アフリカ】
	8	ありとぎりぎりす 【ギリシャ】 (イソップ)
D	1	マッチ売りの少女 【デンマーク】 (アンデルセン)
	2	死人がわすれたなぞなぞ帳 【日本】
	3	ねこのよめさま 【日本】
	4	つるの恩返し 【日本】
	5	ジャックと豆の木 【イギリス】
	6	子どもとおおかみ 【ギリシャ】 (イソップ)
	7	人魚ひめ 【デンマーク】 (アンデルセン)
	8	おむすびころりん 【日本】

[資料 3]

物語の枠組と統一性 CINDERELLA の場合

Once upon a time, in a far away place, there lived a beautiful girl called Cinderella. She lived in an old house with her stepmother and two stepsisters.



So Cinderella married the prince. The mice and Bruno the dog went to live with them in the palace. And they all lived happily ever after.

Picture-Card Show — Original & Creative Story — (物語の創作と実話)

お話を題材

Hansel und Gretel

グループ名 (2-1, 1-III)
SBS (1) 楽長室 (実話者)

英語 Story

Woodman family lived in a forest. They're very poor. Their little bird left in their house. Hansel and Gretel are woodmen's children. They are very hungry because they don't sleep. They heard stepmother voice near now. Hey, darling! Shall we throw away two children, sleep in a forest? Then we are die from hunger.

Woodman is timid. At last he agree. I don't know what to do. Gretel said I don't care. Gretel, here is some. The two sleeping hand to hand.

英語

お話を題材はとても狭く、ちょっとかなといふが到底もどりだらう。だからこのままでは、おなじかついで私がまだ紙面に載せておいた。お手本の教科書はまだほかの「木と屋」などはまだ載せておらず、このままでは手本にならない。ところが、この手本を手本としてみても、どうも手本のように見えない。手本には「木と屋」と記載されているが、手本には「木と屋」と記載されている。

Picture-Card Show — Original & Creative Story —

Class (2-A), Group (I)

Hänsel und Gretel

登場人物の紹介
 ハンセル… 黒人 女の声子 塔-ブル… ハンドル
 外 魔女… 小さな 黒い魔女ルーシー ベイクル・ジ-ズ
 太アーヴィング 魔女… 外部登場人物

あらすじ

第1場面 (実話者)
おとぎ話とおとぎ話はちがうよ。木にはいきながら机に向むけられて、おとぎ話はちがうよ。木にはいきながら机に向むけられて、おとぎ話はちがうよ。木にはいきながら机に向むけられて、おとぎ話はちがうよ。木にはいきながら机に向むけられて、おとぎ話はちがうよ。木にはいきながら机に向むけられて、おとぎ話はちがうよ。

第2場面 (実話者)
おとぎ話… 木から出たおとぎ話… おとぎ話… おとぎ話… おとぎ話… おとぎ話… おとぎ話… おとぎ話… おとぎ話… おとぎ話…

第3場面 (実話者)
ハンセル… 木から出たハンセル… 木から出たハンセル… 木から出たハンセル… 木から出たハンセル… 木から出たハンセル… 木から出たハンセル… 木から出たハンセル… 木から出たハンセル… 木から出たハンセル… 木から出たハンセル…

第4場面 (実話者)
魔女… 魔女… 魔女… 魔女… 魔女… 魔女… 魔女… 魔女… 魔女… 魔女…

手心… 手心… ハンセル… ハンセル…

Picture-Card Show — Original & Creative Story — (物語の創作と実話)

お話を題材

Hänsel und Gretel

グループ名 (2-A, 1-III)
SBS (1) 楽長室 (実話者)

英語 Story Next morning before sun rise in Hansel und Gretel were wake up. They were given a lunch some bread. And then they eat a cabin as the good guide and life done. The very angry get home. He said. But "I" am not right of a real "I". And not get home as it supposed. Gretel was up. Gretel was embarrassed for her was look around for some how find of scald. Then "Hey, look that! There is gone a shadow of all! This one made of chocolate candy cookie and biscuit."

英語

次回朝 星の下に 起きたれ 朝へ来れ 直哉おひる 溶入 ハンセル グルーペル お家へ来てまつてまつて 番を 育め らう。 グリコの溶入 うどんを 烹いて あたか 冷却する クロマツの溶入 カレラモモの溶入 クロマツの溶入 うどんを

Picture-Card Show
— Original & Creative Story —
(物語の創作と発表)

お題の題名

ハンセルとグレーテル

グループ名(2-A. / B)
第(4)場面(発表)

"Hansel, is looks good!"
Stayed with gherrie. When old woman appeared from the
house. He had long nose and a terrible face.
"Who is eating my house?" "I'm sorry, I was hungry."
Bengie and Bongie say. Bengie, and old woman said with
a smile.
"Oh, you're very nice in my house."
Old woman showed in the house them.
When she does close, old woman's face changed suddenly.
He shuch was who is the terrible brot who eat boys.
"He he he he, Bengie, all see you."

Bogata, you are my made now, do don't work.
Because I know, don Bengie was make to wear clothes,
and Bogata was make cleaning.

お題名
お菓子の家で二子が食べていると、中からおばあさんが
おり出ます。おばあさんは、中に入りてすが、実は
おばあさんは魔女で、ハンセルを食べようとしています。

Picture-Card Show
— Original & Creative Story —
(物語の創作と発表)

お題の題名

Hänsel und Gretel

グループ名(2-A. / B)
第(4)場面(発表)

The witch came the cage to examine
Hänsel every day. "Hey, are you far or not? Be watched
me your finger," the witch said. Hänsel let the
witch be holded a thin bone in stead of his finger.
The witch has weak eyes. So she think it his finger.
"Good dinner, he isn't fat at all. I've not waited yet.
I eat you today," she said to Hänsel. The witch enjoy
Gretel, make a fire in furnace. "Gretel thought
a little time and said "I don't know how to make a
fire in furnace." "What a useless child you are!"
the witch said. The witch make a fire herself. Gretel
pushed the witch into furnace in her power, then
Gya~. The witch died with fire in furnace.
Two children go to home with the witch's treasure
after that. Their mean stepmother was stand
because she was sick.

お題名
エヒェン・ハシーネは怪(おじや)

Picture-Card Show
— Original & Creative Story —
(物語の創作と発表)

お題の題名

Hänsel und Gretel

グループ名(2-A. / B)
第(5)場面(発表)

Hansel and Gretel lived in an old house
with their brother. But for while brother got marry
so Hansel and Gretel have new stepmother.
new stepmother is very beautiful woman. She like
rosy cheeks. Hansel and Gretel say "We have
beautiful sister. Her baby is big". But they
didn't know she much. Beautiful stepmother is
witch. She's wish was not die.
One day brother is die. He brother was poor, fair
Hansel and Gretel are not eat because they have
beautiful and gentle soul respectively.
He night new stepmother say "Let's die, no of
food". So Gretel make a fire in furnace. That's our
brother go to the bridge to the river. New
stepmother push her in fire. So she is in the
furnace. She is die. Hansel say "Mother, oh"
Then new stepmother eat him.

お題名
ハンセルとグレーテル
お菓子の家で二子が食べていると、中からおばあさんが
おり出ます。おばあさんは、中に入りてすが、実は
おばあさんは魔女で、ハンセルを食べようとしています。

活動(1)により資料2のように各班の物語が決定する。日本の物語だけでなく、世界各国の物語がバランスよく入っている。活動(2)で、第5場面（創作場面）を十分に検討する。その後、一部の人に負担がかからないように、班内で、1場面ずつ割り当てる。(3)で、物語の書き出しと締めくくりを「シンデレラ」の例をあげて、指導する。（資料3）(3)、(4)において、各場面のあらすじ、英文、絵を仕上げる。（資料4、写真3～5）



写真3



写真4

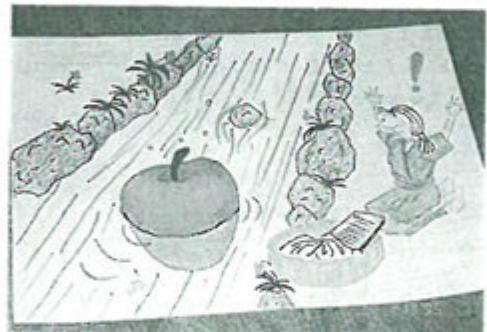


写真5

活動(5)において、グループ内で音読練習後、効果的な発表について話し合い、グループごとに小部屋で録音する。

活動(6)～(8)において、発表と他の班の発表を聞き、次の資料5の評価用紙に評価する。それぞれの発表は、ビデオに撮り、他のクラスの優秀作品を鑑賞する。

〔資料5〕

**Evaluation Sheet
for the Picture-Card Show**

評価： A (よい) B (わるい) C (どちらでもない) の3段階評価とするが、特に優れている場合にはA⁺の評価をつけてあげよう！

Evaluation of the Picture-Card Show

発表班（　班）物語名（ハニエルとアーテル）	
1. 物語の英語は分かりやすくて、楽しかったか？ (A ⁺ … ① - B - C)	
2. 創作の部分の内容はよかったですか？ (A ⁺ … ② - B - C)	
3. 絵は英語の場面とうまく合っていたか？ (A ⁺ … ③ - B - C)	
4. 発表には何か工夫がされていたか？ (A ⁺ … ④ - B - C)	
5. コメント 絵本がちょっと変わった。 おもしろいけど、ハーテルちゃんとハニエルちゃんがちょっと 可愛い。	

評価者(Evaluator) 2年(A)組()番 氏名()

Evaluation of the Picture-Card Show

発表班（5班）物語名（マッキモウタセ）	
1. 物語の英語は分かりやすくて、楽しかったか？	〔A* …②-B-C〕
2. 創作の部分の内容はよかったです？	〔A〕 …A-B-C)
3. 絵は英語の場面とうまく合っていたか？	〔A* …A-B-C〕
4. 発表には何か工夫がされていたか？	〔A〕 …A-B-C〕
5. コメント	PGMなどの言葉、とてもうまく使われていました。 場角には手数が多いので、この辺に落とし易いです。 少し落書きみたいで、（第1場面）特にもう少し。 三天めはちょっと。

Evaluation of the Picture-Card Show

発表班（8班）物語名（A mouse in the town and a mouse in the country）	
1. 物語の英語は分かりやすくて、楽しかったか？	〔A* …③-B-C〕
2. 創作の部分の内容はよかったです？	〔A* …③-B-C〕
3. 絵は英語とうまく合っていたか？	〔A* …③-B-C〕
4. 発表には工夫がされていたか？	〔A〕 …A-B-C〕
5. コメント	効果音が入っているのはとてもよかったです。 発表の事の大ささなども適当で、聞きやすかったです。 方り効果音がお絃じょぐくありました。

発表と評価を含む授業のうち(6)の授業の指導案を資料6として載せておく。

(9)(10)において、今回の活動のまとめとする。生徒の感想を次にあげておく。

ア. 物語の選択や創作について

- ・知らない話だったけど、なかなかおもしろくできてよかったです。創作のおちを考えるのはしんどかったけど楽しい。
- ・物語を選ぶとき、候補がいろいろあって困りました。創作はみんなの意見が聞けておもしろかったです。
- ・物語を選ぶのはかなり意見がくいちがって、困難だった。また、英訳するのがとても、難しかった。
- ・けっこう班で楽しくできた。新しいクラスで知らない人とのふれあいができた。
- ・むずかしかった。どうすれば、おもしろくなるかなど。でもやっていて楽しかった。

イ. 物語の録音について

- ・みんな楽しそうに録音しているようだった。工夫がこらされているものもあった。
- ・録音の時は、色々と笑い声が入ったり、笑ってしまったのは失敗だったと思います。
- ・最初の日の一番目の発表だったので、効果音をしたりするひまがなかったので残念だった。私は第1場面だったので少しきん張した。
- ・うるさかったので、静かな所でやりたい。
- ・やはり笑ったりしてうまくいかなかった。でも、みんなでこうしたら良いとか、いろいろ議論できて良かった。

ウ. 他の班の発表について

- ・効果音など細かく入れている班がいたので、すごいと思う。
 - ・工夫をしている班がけっこうあり、おもしろかった。ゆっくり話すと分かりやすいとうことが分かった。
 - ・5場面をとてもユニークに、ミステリーに作っていておもしろかった。
 - ・みんな絵が上手ですごいと思った。
 - ・あまり話が分からなかったけど、いろいろな工夫をしていて、とてもおもしろかった。
- エ. その他（感想・意見・アイディアなど）
- ・いろいろな物語を知ることができたのでよかった。また、英訳の勉強になった。
 - ・班の人と仲良くなれたのがいちばんよかった。私たちの班ももっと工夫をすればよかったと思う。B組の子が紙しばいの「わく」を作っていたのですごいなと思った。
 - ・英語で物語を読めるなんて、去年ではまったく考えられなかった。1年間がんばったなあと思う！
 - ・英語に訳すのが大変だった。でも訳す時に、自分なりにいろいろ考えたりして楽しかった。もっと分かりやすくすれば良かった。効果音を使ったりするのは良いと思う。
 - ・こういうのをまたしてみたい。もしするときは最初の班の人の為に準備期間を長くしてほしい。
 - ・とても、楽しかった。音を途中で入れるとかいうのがとてもおもしろかった。また、こういう企画をして、楽しみたい。
 - ・録音は、録音でおいて（保存用）発表は、自分の生の声でやった方が、テープを流すよりは、いいと思う。
 - ・もし、今度、同じ企画があったら、悲話を喜劇にしてみたい。紙芝居のかわりに、前で演技する、というのもいざ自分となればイヤだけど、楽しそうだ。

III. 今後の課題と展望

生徒たちの感想にも書かれているように、今回のような創作的活動は楽しく充実感があったようだ。難しかったが、機会があればまたやってみたいという生徒がかなりいた。さらに、個人活動ではなく、グループ活動であったところがよかったです。グループ内で教え合い、協力し合って1つの作品を創り上げることができた喜びは大きいだろう。また、無理に詰め込んで覚えるのではなく、自ら必要を感じて練習する創造的活動にも魅力があるようだ。しかし、彼らが書いているように、習熟度を考えた課題でないと、難しさばかり感じ、期待した到達度まで達しない場合がある。そして、時間的な保障がないと、よい作品にはならないことも注意しなければならない。また、今回はスムーズな発表とグループ内での音読練習を目的として、事前に録音したのだが、コミュニケーションという立場からは聴衆を意識しながら、生の声で発表をした方がよかったですのかもしれない。最後に今回のPicture Card ShowからDrama (Skit Playing)への生徒の提案（アイディア）には傾聴すべきものがあるように思う。

今回の活動を通じて、生徒たちのどの力がどれだけ伸びたのか測定していないので、それについては明確に述べることができないけれども、英語を楽しく学び、自ら進んで英語に取り組むような活動はきっと彼らの英語力（興味・関心・態度）を伸長していると信じたい。そういう意味で、また、このような活動を授業の中に取り入れていきたい。

[資料6]

Teaching Plan

Instructor: Tomoatsu KANAI

- I. Date: Thursday, June 21, 1994
- II. Time: The 4th Period (11:40~12:30)
- III. Class: The 2nd-year, Class A (22boys & 18 girls),
Tennoji Junior High School Attached to Osaka Kyoiku University

IV. Aims of This Unit:

- 1) To familiarize the students (Ss) with the forms and use of the past tense;
to have Ss remember the past forms of regular verbs and introduce some irregular verbs
- 2) To make Ss read and listen to various stories of Japan and foreign countries and understand their cultures or customs
- 3) To have Ss produce stories (original & creative) in English in groups and express their stories as 'Picture-Card Show' therefore to improve their writing and speaking abilities through the whole chain of activities

V. Teaching Aids:

Picture cards, words cards for communication activities, outline sheets of the stories and evaluation sheets for today's Picture-Card Show, etc.

VI. Teaching Procedure(Time):

A. Warm-up(4 min.)

- 1) Greetings To greet the teacher in a loud voice
- 2) Singing a song To enjoy singing 'Yesterday Once More'

B. Presentation of some irregular verbs(12 min.)

- 1) Oral presentation
- 2) Mim-mem
 - ① I went to the hospital last Sunday.
 - ② I saw my sister and a baby.
 - ③ I said to her, "What a beautiful baby!"

C. Sentence making game(10 min.)

- 1) Explanation of the game and giving the word cards to Ss
- 2) Playing the game and writing the sentences made up by Ss on board
- 3) Reading the sentences with past forms of the verbs (regular & irregular) as follows;

- ① Taro and Hanako went to the park last Sunday.
- ② Mr. Hirose played volleyball with Mr. Yoshimura this morning.
- ③ Mr. Uda listened to kiso eigo 3 on the radio yesterday.
- ④ Mr. Inui said to me, "Study math hard."
- ⑤ The students didn't go to school last Saturday.
- ⑥ Mr. Hirata watched a baseball game on TV last night.
- ⑦ Mr. Kanai went to the U.S.A. three years ago.
- ⑧ Mr. Sumi lived in Tennoji in Osaka in 1984.

D. Picture-Card Show(20 min.)

- 1) Explanation of some handouts (list, outlines, and evaluation sheets)
- 2) Presentation (2 groups)
- 3) Evaluating of the shows

E. Announcement of the next period(3 min.)

F. Greetings(1 min.)

参考文献

- 〔1〕村川修二郎（1993）、「世界の人気昔ばなし」「日本の人気昔ばなし」、主婦と生活社
- 〔2〕金井友厚（1994）、「過去時制の指導—物語の創作・発表を目指して」
英語授業研究学会・関西支部、第46回例会、発表資料
- 〔3〕樋口忠彦・高橋一幸（1994）、「ロール・プレイ—記者会見」
『現代英語教育』第30巻第11号 pp.37-39、研究社出版

英語教育の今日的課題に対する現場的考察 ——「コミュニケーション」と「国際理解」をめぐって——

高 橋 一 幸

今年度、『英語教育』誌（第43巻、第1～12号、大修館書店）に「英語教育時評」を連載する機会を得た。94年2月初旬より執筆に取りかかったが、何を書こうと自由というのもこわいものである。ネタ探しに明け暮れた一年ではあったが、英語教育の諸問題に絶えずアンテナを張り巡らし、多分に独断的ではあるが自己の考えを深め、整理する機会を持ちえたことは有益であったと思う。研究集録の場をお借りし、若干の加筆と資料および注釈を補足して、ここにまとめて再録させていただきたい。

1. 観点別評価にいかに対応するか

(94年4月号)

学年末は、通知票、指導要録の作成と現場教師にとって多忙な時期である、特に、指導要領の改訂に伴い、91年度入学者から「観点別学習状況」が「評定」、「所見」以上に評価の中核として位置づけられる至り、教師はこれまで以上（？）の労力を要求されている。¹⁾

新指導要領における「自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの能力の育成」を学力の基本とする新しい学力観に立ち、各教科に4つの観点からなる評価項目が設定され、A、B、Cの3段階の絶対評価が義務づけられたのは周知のとおりで、外国語の場合は次の4観点である。

- ① コミュニケーションへの関心・意欲・態度
- ② 表現の能力
- ③ 理解の能力
- ④ 言語や文化についての知識・理解

この観点別評価への対応をめぐって、今現場にはかなりの混乱や戸惑いがあるようだ。

1. 拒絶反応—高校入試への内申書をめぐって

2月7日の朝日新聞によると、今春、観点別評価を調査書に採り入れるのは全国で39都道府県であるが、その記入をポイコットする学校がかなりの数に上っているということである。校長がすべてにAをつけて再提出する、一律にBをつける、また、A、B、Cの比率を決めて絶対評価を相対評価に切り替える、など対応はさまざまで、現場の混乱ぶりがうかがえる。「生徒の関心まで評価すべきでない」などの批判の声が強いことだが、筆者も含め、教師が自信を持って評価できないことが背景としてありそうに思う。特に英語の場合、上記観点の中でも、①、④に対してかなりの戸惑いを感じられるようだ。

2. 過剰反応

一方、過剰(?)とも思える反応も見られる。例えば、授業中の生徒の発言の一つひとつに対して、今の発言は意欲的であった、あるいは、文化に対し理解ある発言であったなど、教師がいちいちエントラーブックや特製「補助簿」に評価を記録したり、異なる色のカードを与えて記名させて回収し、それを得点化して学期末の評定に加えるなどの実践である。大変な労力であり、熱心な取組みとして敬意を表するのだが、何か本末転倒な気がしてしまうのだ。

コミュニケーションへの意欲と能力を育成するために何よりも大切なことは、生徒の発するメッセージ全体に耳を傾け、それに反応する中から教師と生徒、生徒同士のインタラクションを促し、活発な発話を促すなどやかな授業の雰囲気を作り出すことであろう。授業は観点ごとの評価のためにあるのではないはずで、そこからは真のコミュニケーションは生まれてこないのでないだろうか。

3. 現場での課題

観点別評価重視の意図は何だろう。察するに、それは従来の知識偏重の教育、英語の場合には文法知識注入一辺倒の“授業の改革”であろう。我々にとって大切なことは、実際の授業の指導過程の中にこれらの観点を位置づけることである。

観点①の「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を評価するには、それができるような創造的な活動の場を定期的に授業に位置づける。例えば、教科書の対話文をペアで協力してオリジナル化し、スクリプトとして発表させるはどうだろう。生徒の表現の能力を見ると同時に、どのような個性、創造性を發揮するか、先生や仲間にいかにアピールするかなど活動への関心・意欲・態度を見ることがきよう。このような活動を行うと必ずウケをねらう生徒が出てくる。英語でのウケ狙い、大いに結構。また、ジェスチャーやアクションに工夫を凝らす、発話内容に合わせて言い回しを工夫する、喜怒哀楽の表情豊かに演じる、小道具や音響を使う、といった生徒が出てくればシメタものである。ほめれば、他の生徒も次は負けじと奮いたつ。このように生徒が楽しく取り組める創作や発表の機会を多く作り、その都度、教師が設定したいくつかの観点から、“大ざっぱ”に評価し、その記録を蓄積したい。

観点④のうち「文化に対する知識・理解」は、個別に評価することは困難である。与えた知識をペーパーテストで測るのは本来の趣旨ではないだろう。²⁾むしろ、教師自身が、異文化理解、さらには人権教育の観点を持って教材の深化を図り、授業に反映することが大切だろう。

ともあれ、大切にしたいさまざまな観点を授業に取り入れ、それらができるかぎり活動化し、その評価も加えて自信を持って相対評価を行うことができる、そんな授業づくりができれば観点別評価にも展望が開けよう。

次は、筆者のかなり乱暴な私見であるが、上記のような相対評価の結果が5、4なら、すべての観点についてA、3、2ならばB、1ならばCとすることを、とりあえずの基本方針としておく。しかし、生徒の能力はこんなに機械的に割り切れるものではない。必ず「ちょっと待てよ」と抵抗を感じる生徒が出てくる。こういう生徒に対しては、それこそ個別の絶対評価が必要で、教師の生徒理解がものを言うときであろう。

<注>

- 1) 従来「評定、観点別学習状況、及び所見は並列」とされていたのが、「観点別学習状況を基本とし、評定及び所見を並用する」に、評価の表示方法も「+、空欄、-」から「A, B, C」に改められた。(指導要録改訂に関する文部省通達)
- 2) 観点④については「初步的な外国语の学習を通して、言葉と背景にあるものの考え方や文化などを理解し、身に付けている」とこと定義され、さらに、「単に記憶に留めることなく、それらを積極的に活用し、コミュニケーションに生きて働くものとして身に付けることが大切である」という注釈が見られる。(文部省(1993),『コミュニケーションを目指した英語の指導と評価』pp.43-44, 開隆堂出版)

2. 英語教師の専門性と自己研修

(94年5月)

新学年が始まって半月余り。新任の先生方には、緊張の中にも希望に燃えた日々をお送りのことと思う。今回は、多分に自戒も込めつつ、新任の先生方へエールを送りたい。

1. 教師は専門職!?

「教職は専門職である」と言われる。要するにプロというわけだが、教職は、次のような点で他の専門職とは少々事情が違っている。

① 生徒は教師を選べない。

プロの仕事を評価するひとつの物差しは「客の評判」である。例えば、水道の配管工の場合、工事の後に万が一にも水漏れでもしようものなら、二度と仕事の依頼は来ない。教師と同様、免許を要する医師の場合にも、「ヤブ医者」というレッテルを患者に貼られたら最後、町内の人からさえ敬遠されてしまう。教師はどうだろう。生徒を客と見立てるこの是非はさておき、同じ専門職でありながら客に選択権がないという点で教師は特異である。

② 経験年数の別なく同等の責任を担う。

現在、「初任者研修」が法律で義務付けられてはいるが、ひとたび教室に入り生徒の前に立てば、たとえ新任でも、生徒にとってはただ一人の「先生」である。

このような意味で、我々は、他の職業以上に専門職としての自覚を持たねばならないのだが、授業がうまくいかない、生徒の学力が向上しないなどの問題に直面したとき、その責任のすべてを生徒に転嫁することが教師にはできてしまうのだ。ここが「教職の恐さ」である。

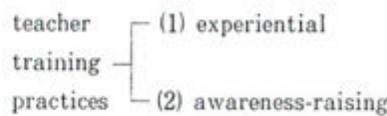
2. 英語教師の専門性と自己研修

教育は日進月歩である。中でも、わずか百年余りの歴史しか持たない日本の英語教育の現場は日々試行錯誤である。「コミュニケーションへの積極的態度と能力を育成し、国際理解の基礎を培う」という指導要領の目標とは裏腹に、百年一日の如く文法訳読に終結する授業が今なお生き続いている教科は他には見当らない。

我々にまず必要なことは、「教えられたように教える」ことからの脱却である。固定的授業観を捨て、常に新しいものを吸収する姿勢を持って研修に努めたい。今日よく耳にす

る「生涯教育」は、子どもを指導するのが仕事の教師にこそ不可欠である。大学で学んだのはわずか4年間、この先長く続く教員生活で学ぶことははるかに多く、また、多くなければならぬはずである。

Rod Ellisは、教員研修の枠組みを次のように示している。³⁾



(1) は、要するに実践を積むことである。自分一人で行うに留まらず、研修会などで授業を公開し、助言や批評を受けるのが望ましい。

教職では、経験を積むことによって自ずと身に付くものと、自ら求めることによってのみ獲得されるものがある。例えば、授業中の生徒掌握の技術は、失敗を重ねる中から経験により獲得されるもので前者に属する。一方、教授法や指導技術、その背景にある言語習得理論や外国語指導理念に関する知識などは、自ら求めて初めて獲得されるもので後者に属する。この種の研修が(2)に当たり、教師のawareness（認識）を高めてくれる。

(1), (2)のいずれにせよ、さまざまな研修方法があるが、多忙な教師にも容易に行える方法を紹介する。

① 英語教育専門誌を購読する

英語教育に関しては、海外論文も含め多くの書籍が発行されている。しかし、多忙な校務の中、自分の興味やニーズにあった書籍を探し、それらを読み破るのは容易ではない。英語教育専門誌を定期購読すれば、今、英語教育において何が問題で、今後の方向はどうなのか、などを概観できる。その中から、特に興味を持った記事があれば、関連文献を選んで読んでみると、エリアを絞り理解を深めていきたい。

② 研修会、研究会に参加する

書物を通して間接的に学ぶとともに、他人の実践を直接見聞きすることも重要である。英語教育に関わる大小多くの研究団体や学会があり、さまざまなプログラムの研究会、研修会が催されている。ビデオを使った授業研究などを通じて、いろいろな実践に触れることができる。研究会の情報については、大修館書店『英語教育』誌の「英語教育通信」や、研究社出版『現代英語教育』誌の「インフォメーション」欄などが参考になる。

このような研修を通して、さまざまな理論や実践を知り、自分の目標とすべき教師を見つけ出したい。「学ぶ」ことは「真似る」ことから始まると言われる。ある時期、特定の教師を徹底的に模倣することも大切である。コピーできたならば、そこに自分らしさを加味しつつ徐々に改良を加え、最終的に自分の授業の型を創造したい。

「知る」→「真似る」→「改良する」→「創造する」というプロセスで自己の授業の原型が築かれる。このくり返しが、experientialとawareness-raisingとを融合した自己研修の場となることだろう。

<注>

3) Rod Ellis (1985), "Activities and procedures for teacher training"
(In *ELT Journal*. Volume 40/2)

3. コミュニケーション活動再考

(94年6月号)

新指導要領が実施されて、中学校では2年目、高等学校では初年度を迎えた。コミュニケーションへの積極的态度と能力の育成をめざして、現場ではさまざまな実践が行われている。コミュニケーション活動は着実に授業の中に位置づけられ、今や「コミュニケーション活動花盛り」である。

1. Information Gap

これはコミュニケーション活動考案の合言葉的存在である。例えば、「たずねる」という言語行為は、原則として未知の情報を聞き手が欲している時に生じる。スピーキングの活動においては、対話者間に意図的にインフォメーション・ギャップを設定し、そのギャップを埋めるというタスク(task)を与えれば、情報を求める言語活動が成立するというわけである。⁴⁾

そこで、異なる情報が欠落した表を各ペアに与え、英語で問答し合いながら、できるだけ早くそれぞれの表の空欄を埋めるという形式の活動がよく見られる。次に示すのは、中学1年生で「3単現」の疑問文を扱った fixed pair work の一例である。

【Task Card A】	Mary	Bill
play tennis	○	○
play the piano		
like sushi		×
have a brother	×	

【Task Card B】	Mary	Bill
play tennis		
play the piano	○	×
like sushi	○	
have a brother		○

よく行われるもうひとつの活動例を見てみよう。次に示すのは、中学2年生で過去時制および比較表現を扱った group work である。

【Task 1】 Answer the question about yourself.

Q : What time did you get up this morning?

【Task 2】 同じ列の友だちで君より早く起きた人は何人いるかな。

Name					
Time					

【Task 3】 一番早起きの人はだれで、何時に起きただろう。英語で書こう。

これは、席を立って次々と相手を替えながらインタビューし、与えられた課題に該当する友だちを探す、“Find someone who...” 形式の flexible pair work である。

その他、対話文の一部を自由に変えたり、空所を捕って対話するといった “open dialogue” 形式の活動もよく見られる。

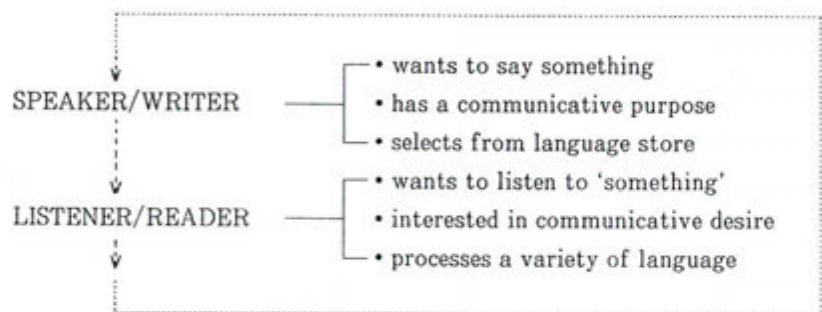
2. それがどうしたの？

しかし、このような活動は、本当に「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育成しうるものなのだろうか。「メアリーがピアノを弾いたから、ビルが寿司が好きでないから、どうしたの？」「早起き結構。でも、それが何なの？」といった疑問を中学生が持たない方が不思議である。「そのような疑問を持っていては英語は上達しないのだ」と言ってしまえばそれで終わりだが、学習者中心の授業とはとても言えそうにない。

これは、中学校のみに限った話ではない。手元にある高等学校「オーラル・コミュニケーションA」の教科書を見ても、多少のレベル・アップはあるものの、同様の活動が随所に見受けられる。

3. To Make It More Communicative

Jeremy Harmerは、コミュニケーションの本質を次のように図示している。⁴⁾



コミュニケーション活動を再点検する上で、まず重要な視点は次の2点である。

- ① 生徒がやってみようという強い意欲と目的意識を持って取り組める活動であるか？
- ② 単一の文型・文法事項の練習に留まらず、生徒自身が伝達目的達成のために既習の言語材料から必要に応じて選択できる活動、言い替えれば、言語形式よりも内容に重点を置いた活動であるか？

なお、Harmerは、その他のチェックポイントとして“no teacher intervention”を挙げているが、コミュニケーション活動においては、伝達の流暢さ（fluency）、および伝達目的（communicative purpose）が達成されたか否かに評価の視点を移し、生徒の犯す誤りに対する教師の対応も文型操作練習などの学習活動時とは区別すべきである。些細な誤りも見逃さぬ完全主義者（？）の多い英語教師にとって、心してかかるべき事柄であろう。

以上のような観点から、自作の、また、教科書に掲載されたコミュニケーション活動を再度検討し、生徒が本当に積極的に取り組めるようグレード・アップを図るのが「コミュニケーション重視の授業」を行うまでの今後の課題だろう。

<注>

- 4) Morrowは、コミュニケーションの成立条件として、information gap, chice, feedbackの3要素を挙げている。
- 5) Harmer, J. (1983), *The practice of English Language teaching*. Longman.

4. "英語教室" のすすめ

(94年7月号)

近年、少子家族の増加に伴い、生徒数の減少が進んでいる。筆者の担当学年の「指導要録補助簿」の家族欄を見ても、2人または3人兄弟の生徒が全体の87%を占め、一人っ子10%に対し4人兄弟以上はわずか3%である。その結果、公立の小・中学校では学級数が減少し、空き教室が増えているとのことである。中学校に続き高校でも、平成5年度から10年度を期限として40人学級を実施する旨、文部省より通達が出されたのも、生徒数減少がその背景にあるのだろう。

1. 空き教室の活用

「教科ごとに専門教室へ移動個性派時代の中学校で増加」という記事を4月4日の朝日新聞で目にした。同記事によれば、米国などのように生徒がそれぞれの教科の教室に移動する「教科教室型授業」を採用する学校が増えてきたということである。佐賀県や福岡県で導入されたのに続き、岡山県倉敷市の中学校でも2年後に導入されるそうである。音楽、美術、技術家庭科や理科以外の教科にも教室が設置され、活用が図られているようである。これは指導要領が改定され個性を生かす教育をめざす方向性が打ち出されたことを受けてのことであろうが、先に述べた生徒数減少による空き教室の存在がそれを可能ならしめた側面もある。もし、空いた教室があるとすれば、それを眠らせておく手はない。英語科では、LL教室も相当普及しているが、LLのない学校はもとより、その有無に関わらず、ひと味違った英語教室の設置の可能性も探ってみてはどうだろうか。

2. 両国中学校の「国際理解教室」

昨年の語学教育研究所・研究大会の分科会で、東京都墨田区立両国中学校の長勝彦先生のお話を伺う機会を得た。同じく中学校現場にいる教師として、ことばに言いつくせぬ感銘を受けたので、誌上を借りて紹介させていただきたい。

先生は、生徒数減少によってできた空き教室を職員会議の了承を得て、「国際理解教室」として、隣接する準備室とともに手間暇かけて整備してこられたそうである。教室に29インチテレビ2台、準備室には三脚に取り付けられた家庭用ビデオカメラが置かれているが、業者による特別な工事を要する設備は特にない。

教室壁面には、先生の外国旅行のおみやげのティー・タオルや地図がところ狭しと飾られている。また、不要となった時計がいくつも掛けられ、いろいろな国の時刻を差し示している。一方、準備室には、廃棄された校長先生のデスクとチェア、ソファー、机上には社会科で余っていたのをもらってきたという地球儀が置かれている。廃物利用と言えば、不要となった校内電話を先生自ら天井を這わせて配線され、隣の準備室と接続してある。手作りのこの教室を最大限活用されているのだが、例えば、スキットの発表では次の如くである。

ペアの生徒Aは、準備室の椅子に腰かけてデスクの上の電話をとり、生徒Bは教室の電話をとって、両者が実際に電話で対話している。別室にいる生徒Aの姿と発話内容は、室内に固定されたビデオカメラに録画され、生中継で教室の29インチテレビに映し出されている。発表者以外の生徒は、自分たちの目の前で話すBと別室にいるAの英語の対話を教

室にいながらにして鑑賞する。再生と同時に録画もされているので、発表者自身が後で見て自己評価することも可能だ。⁶⁾

このようなセッティングをされて、その気にならぬ生徒がいるだろうか。生徒を主体的に学習に取り組ませ、コミュニケーションに対する積極的な態度と能力を育てる上で、何千万円をつぎ込んだ最新のLL教室以上の効果を期待できる環境作りがそこには見られ、生徒たちは目を輝かせ、生き生きと活動に参加している。

3. Language Gym

「教室=机と椅子が整然と並んだ修練の場」という固定観念を取り払えば、新しい学習環境作りの可能性が広がる。何もないオープンスペースの部屋もあっていい。できればカーペットでも敷き、素足で入れるようにしたい。(テーブル付き)折りたたみ式の椅子を必要に応じて好き勝手に並べられるよう部屋の隅に置いておく。こういう部屋があれば、例えば、Fruit Basket、グループごとの英語カルタ取りや神経衰弱などのゲームも自由に行なえるし、Total Physical Responseなど、与えられたインプットに対して全身で反応させることも容易に行なえる。Language Laboratoryならぬ、“Language Gym”である。また、車座に腰を下し、BGMとしてsoft musicでも流しながら、リラックスした雰囲気の中で教師の導入に耳を傾けたり、小グループで個人音読を発表し合ったり、コミュニケーション活動を行なってみるのはどうだろう。ここでは、Suggestopediaに近い教室環境を作ることも可能となる。このような部屋は、ひとり英語科のみならず、他教科、学活など利用価値が高いのではないだろうか。

みなさんの学校に眠っている部屋はありませんか？

<注>

- 6) 本研究集録の別稿(pp.289-304)の“newscasting”におけるAV機器の活用については、この長氏の実践にヒントを得たものである。

5. 教科書の創造的な利用法

(94年8月号)

去る5月29日(日)、英語授業研究学会・関西支部春季研究大会が開かれ、そのシンポジウムでは、「検定教科書の創造的な利用法」について、樋口忠彦先生(同学会会長、近畿大学)他、中高2名の先生方から、それぞれの研究実践をふまえた提案がなされた。

「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」のだということはよく言われることである。今回は、授業の主たる教材である検定教科書をどのように創造的に活用するかについて考えてみたい。

1. 創造的な利用とは

「指導目標、到達目標に向かって効果的な教授・学習を可能ならしめるために、学習者の実態に照らして、肉付けしたり、贅肉を切り落して教科書を使いこなすこと。」(樋口)

教科書を使いこなすためには、教科書研究を通して、使用教科書の特色や編集趣旨を十分に理解するとともに、検定教科書の種々の制約による限界をも知って活用を図ることが

前提条件となろう。ここで教科書の大ざっぱな構成を見てみると、次の2つに集約されるだろう。

① 言語材料（語彙、文型・文法事項）

② 題材（教科書本文）

これらについて、教師が生徒の実態にあった取り扱いを工夫することになる。

2. 言語材料の取り扱い—教師の固定概念を打ち破ること

生徒が英語嫌いになる原因のひとつに、たくさんの単語を覚えなければならぬことがある。教えた単語はすべてつづりを覚えさせなければならぬという教師の固定概念を崩すことから教科書の創造的な使用が始まる。単語力がコミュニケーション能力を支えることはまぎれもない事実である。学習した単語はすべてつづりを書けるに越したことはないが、それはコミュニケーション能力育成の絶対条件ではない。教科書の新語についても、理解語彙と発表語彙を区別して指導すること、また、取り扱う話題や機能に応じて、オーラル・コミュニケーションのための語彙を補充してやるなど弾力的な取り扱いを工夫することで、生徒の負担を軽減しながらもコミュニケーションに役立つ語彙力を増強することができる。

文型・文法事項の取り扱いについても、同様に、1セクション・1アワー式の“教科書準拠”的指導ばかりではなく、生徒の学習状況に応じて、取り扱いを工夫すべきだろう。例えば、生徒が一般動詞の疑問文や否定文に習熟していれば、過去時制の指導において、肯定文→疑問文→否定文を3時間に分けて指導する必要はない。一度にまとめて取り扱うこと、その時間からさまざまなコミュニケーション活動を行わせることが可能となる。次時以降で繰り返し使用させることで定着を図ればよい。現行教科書のexerciseのページには、さまざまな学習活動、言語活動が用意されているが、これらについても、生徒の興味・関心にあわせて教師が味付けをし直したり、発展させたいものである。

3. 題材の取り扱い—本文の内容を深化・発展させる

検定教科書本文は、使用語彙、および分量の制約の中で、著者の意図を十分に尽くせるものでない場合が多い。

対話文では、余剰性（redundancy）のないスケルトン・ダイアローグと化すことを余儀なくされ、行間に意味的飛躍を生じることも多い。このような場合、本文のオリジナル化を図らせれば、生徒は個性・創造性を發揮し、より生き生きとした自然な対話文を創作する。⁷⁾

物語やエッセイなどの叙述文についても同様で、本文を訳読するだけでは、題材に関する知識や理解が十分に深まらないことが多い。教科書の題材には、感動教材あり、平和教材あり、また、あるものは異文化理解や人権教育に資するものもある。指導書等も参考にして、それぞれの題材のねらいを把握し、教科書には制約上盛り込めなかったプラスαの情報を教師がオーラル・イントロダクションの中などで適宜補足してやることで、字面の日本語訳に留まらぬ、題材への切り込みが可能となる。

6月号でも述べたように、今や現場はコミュニケーション活動花盛りであり、学習した文型・文法事項をどのような言語活動につなげるか、さまざまな工夫が見られる。反面、

題材の理解、深化という視点はなおざりにされていることはないだろうか。「本時の目標」に目をやると、多くの学習指導案に次のような記載が見られる。

Aims of This Period:

- 1) To familiarize the students with the use of to-infinitive through various communication activities

- 2) To give the vocabulary as follows; (That's all!)

英語学習は、文法と語彙だけなのだろうか。ここでは、コミュニケーションのノウハウは指導しているが、「伝える内容を育てる指導」が欠落してはいないか。教科書にとって題材は生命。その取り扱いがコミュニケーション能力の育成にとって不可欠な要素であり、国際理解の基礎を培うことにつながるのだと思う。

<注>

- 7) 樋口忠彦・高橋一幸(1992),「自分ならば——教科書のオリジナル化」(『現代英語教育』第29巻, 第2号, pp.41-43, 研究社出版) 参照。

6. 高等学校「ライティング」教科書と コミュニケーション指導

(94年9月号)

日本の先生は「教科書を教える」という意識が強すぎないか。教科書を教えるのと、「教科書で教える」のは違う。先生自身の主体性、素養によって教えるという意識が希薄なのです。

これは、7月4日の朝日新聞に寄せた、参議院議員で英語の専門家でもある國広正雄先生のことばである。先月の拙稿「教科書の創造的な利用法」と軌を一にすることばかりと思う。この記事は、文部省による高等学校「ライティング」の教科書検定結果を取り上げたもので、申請された22冊の教科書のうち、15冊が「指導要領にそぐわない」と指摘され、3冊が不合格になったという。

高等学校指導要領で「英語ⅡA」が「オーラル・コミュニケーション」(OC)に、「ⅡB」が「リーディング」に、「ⅡC」が「ライティング」へと改名されたことは周知の通りである。カタカナ科目名のオンパレードだが、これは、従来の文法中心からコミュニケーション志向の授業へと発想転換を迫るものだろう。

「英語ⅡC」は、筆者の高校時代「グラマー・コンポジ」と呼ばれていたのを思い出すが、長年続いてきた文法・和文英訳の流れを大転換することへの抵抗感が出版社/編集者、現場の双方にあるのかもしれない。

1. 現場の反応

近年、使える英語をめざした実践が多く見られるようになった反面、入試に対応するには、コミュニケーション能力育成など所詮きれい事のお題目にすぎず、やはり「文法、和文英訳、英文和訳こそ力なり」という信仰にも似た反発があることも事実である。この傾向はいわゆる進学校ほど強く、OCを週2時間設定しているが、これはあくまで表向き。実際には1時間だけで、それも生徒の息抜きの時間、残る1時間は、受験向けの文法の授

業をしている学校もあるとか。巷間よく聞く話である。

英語教育の理想と現実は、最終的には常に大学入試に帰結してしまうのだ。生徒にとって最大の外的動機づけ（instrumental motivation）の要因である入試問題にメスを入れるか、入試から英語を外すかしない限り、理想と現実のギャップは一朝一夕には埋まりそうもない。

2. 「教科書に固執せず…」とは言うけれど

さて、冒頭の引用に続けて、國広先生は次のように述べておられる。

「いくら工夫を施しても、こうしたライティングの教科書で本当に英語力が身につくか疑問です。（中略）教科書に固執するのはいかにも時代遅れです。」「受験英語と実用英語の両立は可能です。極端に言えば、昔ながらの英文法や英作文のテキストを使っても、例文を声に出して読み、手で書き写すという作業を反復すれば、自然に英語が内在化し、表現できるようになるのです。」

教師に意識改革を促し、主体性を持って教育に取り組み、教科書を一素材として使いこなしなさいという願いを込めた文脈の中での極言だと思うが、教科書否定と聞こえなくもない。教科書は、生徒の実態にあわせ教師が主体的に活用すべきものだが、授業の主たる教材であることもまた事実である。英語教師は多くの場合、英語が好きで英語の教師になったのであり、ある意味では、味気ない例文を声に出して読み、手で書き写すことに快感を感じる「変人」なのかもしれない。準義務教育と言ってよい現在の高等学校で、同じことを生徒に要求しても無理であろう。難しいロックの歌でもすぐに覚えてしまう生徒が、なぜ英語の教科書は音読しようとしないのか。それは声に出して読んでみようという気にさせるだけの魅力がないからである。生徒を内発的に動機づける内容が教科書には不可欠である。

3. 書くことへの積極的な態度を育てるために

① 書くことの言語活動を工夫する

あてがい扶持の脈絡もない単文を英訳するだけでは、生徒は乗ってこない。1文から2文3文へ、さらにはまとまりある文章へと段階を追って導きたい。また、たとえ和文英訳であっても、生徒が「どう書けばいいだろう」と興味を持ち、「書いてみよう」という意欲を起こす身近で現実的な課題を与える。

言語活動を考える際には、書く目的を明確にすることが大切である。日記などを除き、書くという行為の前提には「読み手」が想定されているはずである。手紙文を例にとれば、架空の人物宛でなく、書きあがった手紙を他のクラスで無作為に配布し、読んだ生徒から返事がもらえるとか、A LTが読んで口頭で返事を返してくれるとか、読み手が明確になるだけで書く意欲は大いに高まるだろう。⁸⁾

② 誤りに対して寛容な姿勢を持つ

誤りに対する姿勢は、nativeよりも、non-nativeの教師の方がはるかに厳しいという。日本人教師には、この傾向が特に顕著なようだ。伝わるように書くには文法を押さえなくてはならない。しかし、行き過ぎは禁物。書こうとする意欲を失わさせては元も子もない。

表現したい内容がある。けれども、うまく表現できない。そのような時にこそ指導が生

きる。そういう場をいかに作り出すかが、教科書、教師に与えられた課題だろう。

〈注〉

- 8) 高橋一幸 (1992), 「日記や手紙文の書き方の指導」(『ECOLA 英語科教育実践講座』第4巻「コミュニケーション能力の育成: 書くことの指導」, pp.62-68, ニチブン) 参照。

7. Slow Learners の指導

(94年10月号)

夏休み、そして2学期は研修会、研究会の季節、新しい理論の紹介と併せて、現場からのさまざまな実践報告がなされる。参加者の大半は現場の先生方、同じ現場教師の実践に対する研究協議は概して活発になるのだ、前向きな意見がひとしきり交換されたところで、水を差すかのごとく次のような否定的発言が聞かれる。

「生徒さんがよくできるからいいです。うちの生徒ではとてもできません。」

「いえ、そんなことはない。」

「いや、無理だ…。」

もはや生産性なき押問答である。

1. 指導の“反則”

Slow learners は、

1. 理解力がないから、
→ 授業はすべて日本語で進める。
- 2.1. 覚えが悪いから、
→ 放課後も残して指導する。
- 2.2. 生活習慣がなっておらず、やる気がなく、ルーズだから、
→ 宿題を出して点検し、小テストをしないと勉強しない。
- 3.1. できないから、
→ レベルを下げて、易しいことを徹底的に反復練習させる。
- 3.2. アルファベットもまともに書けないから、
→ スピーチやスキットなんて無理無理！

これは、筆者の友人で、兵庫県三木市立志染中学校教諭の岩本京子先生が研究社夏期セミナーのシンポジウム「Slow Learner の指導をどうするか」で提案された際の資料から抜粋（一部改、番号は筆者）した「Don'ts 集」である。

2. Slow learners にこそ英語で授業を

Slow learner とは、ペーパーテストで点数の取れない生徒をさすことが一般的である。綴りを正しく覚えられない、文法規則の定着が不十分などの結果、テストの達成度が低いのである。中学校入学時には、ほとんどの生徒が英語を「聞けるように、話せるようにな

りたい」と願っている。なのに、いきなり文字を導入し、難解な文法用語を使った説明に安易に流れる教師の工夫のなさが、彼らの、彼女たちの出鼻をくじき、英語嫌いを作っているのではないか。

教師以上に音感に優れた生徒たち。文法事項の導入においても、絵や実物など視覚教材を用意し、理解しやすい文脈を作り、文字や日本語の説明に頼らずに英語で進めれば、生徒は興味を持ってついてくる。ここを工夫するのが教師の仕事である。

生徒の学力が高いからオーラルの授業ができるという考えは誤りである。逆に、slow learner がいるからこそ、英語で授業を進めるべきなのだ。教師にとって、準備の手間はかかるが、だからこそ、生徒の目の高さに合わせた指導ができるのだ。

3. 授業で力をつける

授業だけではついてこれない。だから、放課後も残して指導する。「落ちこぼしたのは指導者たる自分の責任」と考える真面目な教師ほど補習を行う。労力をいとわぬ教師の良心であるが、この方法に安易に流れるのは危険である。そもそも放課後は生徒にとってクラブ活動に参加したり、友達と遊んだりできる自由時間である。生徒と十分なラポートがあればいいが、「君は遅れている、だから補習を行う」式の教師からの一方的な押しつけで生徒を拘束するのであれば、生徒を動機づけることはできず大した効果は期待できない。特別な指導を行う前に、本来の学習の場たる授業で生徒がやる気を出す活動を与えるのが先決である。

宿題にしても、すべてを家庭に持ち帰らせてできるくらいなら、slow learner とは呼ばれないわけで、生徒が興味を持つ課題を考え、教師が指導できる授業中に筋道がつくところまで取り組ませることである。その上で、「さあ、もう一息だね。あとは自分で完成してごらん。」と言って次時までの課題としたい。

中学校が週3時間体制になって以来、課外での指導、家庭学習の課題開発が盛んに行われてきたが、slow learner の指導においてはとりわけ、「力をつけるのは授業中」という原点に立ち返る必要があろう。

4. 自由度の高い活動を与える

岩本氏いわく、「生徒は動機づけられていないから、英語を学習する気にならない、覚えられない。動機づけも目的もないままの反復練習はただの“がまん大会”である。」

「どうせできっこないから…」と、やる前から決めつけて、生徒の持つ可能性を教師自らが否定し、伸びる芽を摘んでしまってはいないだろうか。思い切って、ペアでスキットを作る、グループで紙芝居を作って上演する、簡単なスピーチに挑戦させるなど、生徒たちが工夫を凝らし、個性を発揮できる活動を与えてやりたい。教師主導の活動からは生まれない期待以上のアウトプットが出てくるかもしれない。ペアやグループ活動を導入すれば、生徒たちは互いのいいところを出し、弱点は補い合って、高め合い伸ばし合うものである。「ちょっと難しそうだが、おもしろそうだ、ひとつやってみるか」と思わせるような課題や活動を工夫して授業で与えることが教師の最も大切な役割である。「テストの点数が低い=精神年齢が低い」という公式は成り立たないのである。

8. A L T 常駐の時代を迎えて

(94年11月号)

外国人指導助手A L T (Assistant Language Teacher、当初の呼称A E T)が1987年に導入され早8年目。当初は、他教科の教職員集団も含め教室外でどのように接すればよいのかという戸惑いなど受け入れ体制の問題から、いざ授業となれば、A L Tに何をしてもらえばよいのか、どう連携すれば日本人教師J T E (Japanese Teacher of English)によるSolo Teaching (S T)では得られない効果が上がるのかなど、暗中模索の混乱期があった。テレコ代わりにA L Tを使い、“We're not human tape recorders!”という反発を招く一方で、A L Tの派遣を辞退する学校が相次いだことも記憶に新しい。⁹⁾

しかし、その後、数多くのTeam Teaching (T T)に関する書物が出版され、講習会や研究会でも望ましいT Tのあり方が討議され、最近では、J E Tプログラムとは別に市町村独自でA L Tを採用し、全中学校・高等学校に常勤で配置する自治体も現われるなど、T Tは制度的にすっかり定着し、A L T常駐時代も遠くなさそうである。

1. A L Tに何を求めるか

① 学習者へのinputとfeedback

A L Tの話す英語が「わかった！」、自分の英語を「わかつてもらえた！」という体験は生徒にとってこの上ない動機づけとなり、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成に大きく寄与する。feedbackでは、発音の矯正役、語法の訂正係に終始せず、生徒の発話内容に耳を傾け、大きな言語的、非言語的反応(verbal/non-verbal reaction)を返してもらうことで、生徒に自分の英語の“通じビリティ”を実感させる。これはA L Tであればこそ効果抜群である。

また、J T EとA L Tのさまざまなやり取りを聞かせることで、コミュニケーションの手段としての英語を生徒に実感させることができる。両者のインタラクションは、生きたことばのデモンストレーションであり、S TではできないT Tならではの手法で、新文型・文法や教科書題材の導入にも大いに活用したい。

② 学習者とのinteraction

A L Tの英語を聞く、A L Tに発表を聞いてもらう、といった距離を置いた活動に留まらず、A L Tと生徒個人との直接的なコミュニケーションの場を授業に組み入れることで「通じあえた！」という喜びを味わわせることが忘れてはならない。

③ Cross-cultural understanding

A L Tから異なる文化に関する知識や体験を知らず知らずのうちに直接享受することができる。A L Tの存在は「教室に異なる文化を持つこと」に他ならない。J T Eが指導書などから仕入れた付焼刃の知識を知ったかぶりして話すより、A L Tから引き出す方が生徒にとって印象的かつ新鮮である。国際理解の見地から、アジア、アフリカ等も含めた世界の多くの地域からA L Tを招請することも今後検討すべきだろう。

2. J T Eに求められること

① Take the initiative in planning

—Don't be an AJT (Assistant Japanese Teacher of English)!

TT本番では、できるだけALTに全面に立ってもらえばよいが、指導立案では、生徒を熟知したJTEがイニシアティブをとるべきである。指導案作成では、生徒の活動はもとより、ALTとJTEの役割をはっきりと明示し、生徒を含む3者が相互にどう関わり合うのかを十分に確認しておく。また、チームを組んで間もないあいだは、二人の主な発話を書き下した「TTシナリオ」とでも呼ぶべき指導細案を準備しておくと授業を円滑に進めるのに役立つ。

② Do what you can't do in ST

— Don't be an interpreter of your ALT.

役割を明確にと述べたが、極度の分業によってALTとJTEの役割が固定化され、二人の「からみ」が生まれないと授業が硬直化し、TTの価値は半減する。例えば、ALTが話した英語をJTEがすべて日本語に翻訳し直すのをよく見かけるが、極力避けるべきだ。要は、生徒にわかるインプット (comprehensible input, i + 1)¹⁰⁾ をALTに与えてもらうことで、それを吟味できるのは、やはりJTEなのである。その他、JTEの説明中、ALTは何をするのか、ALTが範読している間、JTEはどうするのか、(何もせずボーと突っ立っていることが案外多い)など、JTEとALTの二人の教師がいることの利点を絶えず追及し、生徒を含む3者を常に活動させることが肝心である。

③ TT is no longer a "special" class

— Plan a TT along with your daily ST's

TTは、JTEによる日々のSTの延長線上に位置づけられなければならない。日頃のSTで文法説明と訳読だけの授業をしていながら、TTに際しては、「今日は、外国人の先生に来ていただいたから、この機会に積極的に英語で話しかけなさい」と言っても、生徒はただただ萎縮し、何も言えずにうつむいて1時間過ごすことになる。TTのノウハウについての研究はもちろん重要であるが、STの質を高めることができよりよいTTに結びつくのだと思う。

制度として定着したTTを、内容をさらに高め、授業計画全体の中に自然な形で位置づけていくこと、自然体のTTが今後の課題である。

<注>

9) AETのJTEに対する不満も高まり、“JTE bushing”の声も聞かれた。次は、和田稔(1992)、「国際交流の狭間で Part II」(『現代英語教育』第28巻、第11号、p.28)からの引用である。手厳しい批判であるが、自戒のことばとして紹介しておきたい。

There is a small number of “good” teachers (dedicated, professional) and an alarmingly large number of “bad” teachers. How do I define “bad”?

Someone who :

- lacks any rapport with students
- shows no interest in his/her work and gives no thought to work
- says, “I can't” but means “I won't try” or “I can't be bothered”
- is proud to say “I can't speak English”

10) The Natural Approachの創始者Krashenは、「インプット仮説」の中で、与えたインプットが理解されたときに習得(acquisition)が起こると述べている。

9. リスニングの指導

(94年12月号)

T : テープを大いに活用して、リスニングの力を伸ばしなさい。

S : 先生、何度も聞いたけど、どうしても聞き取れません。

T : 何回聞いたの？

S : 必死で5回聞きました。

T : そんなことじゃまだまだ甘いな！ 5回聞いてわからねば10回、それでも分からねば、20回、30回、わかるまで聞くんだ！

S : Hmm.....

1. リスニング指導の現状と生徒の困難点

新指導要領では、「聞き話すこと」が「聞くこと」、「話すこと」に分離された。高校では「話し手の意向などを聞き取る能力を養う」オーラル・コミュニケーションBが新設され、今年度より実施に移されている。リスニングの指導を充実し成果を上げるべしとの文部省の意向であろう。

ところが、現場では、「テスティングはあれど指導なし」というのがこれまでの現状である。重要性は認識しているが、筆者も含め、教師自身が系統的指導を受けた経験がなく技能が乏しいこと、また、参考とする先行実践が少なく、実践に即した文献も少ないと原因であろう。いきおい、冒頭に示したような指導とは呼べない“勝算なき叱咤激励”がくり返されることになる。

望月昭彦氏は、学習者の困難点として次の4点を挙げている。¹¹⁾

- (1) 話される英語が速くて、音素の識別ができない。
- (2) 語彙・文法力が不足して予測して聞くことができない。
- (3) 聴覚に達する音声はすぐに消えていくため、新語にぶつかると心理的パニックになり聞き取れない。
- (4) 背景知識が不足しているため内容が理解できない。

2. リスニング指導のポイント

上記の困難点をどう克服するかが指導のポイントとなるが、それぞれ次のような対処が考えられる。

(1)	①自然な速さで話される英語に慣れさせ、②それらに特有な弱化や音声変化現象を指導する。
(2)	①オーラル中心の授業を通じて聞き話せる語彙を増やし、②文法知識を活用して聞き取れなかった箇所をモニターする方略を教える。
(3)	聞き取りのポイントを事前に与え、概要・要点を把握する練習を行わせる。
(4)	生徒にとって身近な話題を選択し、口頭導入を通して先駆知識の呼び起こしや補足情報の提供など、pre-listening指導の充実を図る。

中高の指導では、概要・要点の把握を中心とするのがいいだろう。即ち、日々の授業で

- (1) ①、(2) ①を実践し、聞き取りに際しては、(4) に配慮しつつ、聞き取りのポイントを

段階的に示すことで記憶力テストにならぬよう留意して(3)を行い、(2)②の指導を補足することでリスニングの方略を教えるのである。

しかし、少しでも分からぬ部分に出会うとパニックを起こし、全部がわからなくなるというのは我々が体験的に知るところである。そこで弱化や脱落(elision)、連音(liaison/linking)、同化(assimilation)など音変化の指導も補足的に行い、聞き取り困難点をシラミつぶし式に指導していけばどうだろう。

3. 聞き取り困難点の克服

次は、中1教科書(*Everyday English*, 中教出版)からの抜粋である。

A : Hi, Becky. How are you doing?
B : Fine, but I have school.
A : How is your Japanese class?
B : I like it. But Japanese is hard. So many *kanji*.
A : I know.
B : But Koji and Emi help me.
A : Help them, too. Help them with their English, Becky.
(登校時、家の前で級友と)
C : I'm sorry, Becky. I'm late again.
B : Koji, what do you have in that big bag?
C : I have a big dictionary . . . and comic books.

下線部を空所にしたspot dictationを大阪教育大学および京都教育大学の英語科の学生(2回生から4回生、計35名)行った。聞かせたテープでは、下線部はすべて音変化を生じている。例えば、最後の“in that bag”は/in ðə bɪ bæg/と発音される。結果は満点ゼロである。彼らの英語能力が低いのではなく、今までこのような指導を受けてこなかったことによる当然の結果だろう。自然な速度で話される英語(natural spoken English)では、このような変化が生じることを教える必要がありそうだ。筆者は上例のように、脱落する音の上に×印、連音や同化の部分に○印を付けさせている。そして、テープと同じように音読させる。自ら調音できる音は聞き取れるはずである。

このような指導ではJazz Chants(Oxford University Press)や歌を活用すると、音変化を忠実に調音しないといけないので、効果的に、しかも楽しみながらに学習することができる。授業開始時のウォームアップで、歌やチャンツを継続的に利用すれば、単なる雰囲気作りに留まらぬ発音指導、間接的にリスニング指導も行なえる。意識化させることで、慣れてくれば中学生であっても、音変化の生じる個所を予測し、自ら印を付けて自然な音読ができるようになってくる。

一例として、授業で歌った曲の中から、生徒にも人気の高いWhitney Houstonの“The Greatest Love of All”的歌詞の一部を次に紹介しよう。ほんの数行の歌詞の中にも数多くの音声変化現象が見られる。これらの箇所は、この歌を上手に歌うためのポイントともなる。

I believe that children are our future.	子供達は私達の未来。
Teach them well and let them lead the way.	正しく教え、彼らに導いてもらおう。
Show them all the beauty they possess inside.	子供達の内に秘めた美点を我ららず引き出し、
Give them a sense of pride, to make it easier.	自分に誇りを持てるようにしてあげよう。
Let the children's laughter.	そして子供達の笑い声に
Reimind us how we used to be.	私達の幼き日々を想い出そう。

ここでは、聞き取り困難点の指導のアイデアを中心に紹介したが、概要・要点の把握の指導も含め、リスニング能力の向上には継続した指導が不可欠である。

＜注＞

- 11) 望月昭彦（1989）、「いかにして概要・要点を聞き取るか」（『現代英語教育』第25巻、第11号、研究社出版）

10. 関心・意欲・態度をどう高めるか

(95年1月号)

11月に開かれた英語授業研究学会・関西支部秋季研究大会では「英語学習およびコミュニケーションに対する関心・意欲・態度をいかに高めるか」というテーマでシンポジウムが持たれた。翌日、同僚の先生の机上を見ると『国語教育』という雑誌が置かれている。何気なく目をやると、特集テーマは「関心・意欲・態度の評価手順を見直す」とある。教科の如何を問わず、今や関心・意欲・態度は現場最大のキーワードである。

1. 関心・意欲・態度の階層と指導の要点

「関心・意欲・態度」はセットフレーズの如くに使われることが多いが、その一つひとつはレベルの異なるもので、3つが同時に形成されることはない。3者の間には「関心<意欲<態度」という階層があると思う。

中1では「関心」(interest) の前段階として、「英語の勉強って楽しそうだ」、「英語の音っておもしろいな」といった「興味」(curiosity) を抱かせることからスタートである。そして楽しみながら授業に参加する中から、より知的で内容的な関心(interest) へと生徒の意識を高めたい。

入門期に生徒たちが抱いている英語学習に対する新鮮な興味、コミュニケーション能力に対する憧れも、「授業=文法説明+文型操作練習+和訳」、「英語学習=暗記」であれば関心にまで高まることなく消滅してしまい、早くも「英語嫌い、落ちこぼれ量産体制」へと入ってしまう。

授業では、入門期の早い段階から目的を持って生徒が自ら英語を運用できるようなタスク(task)を与える、コミュニケーション能力を育成したい。与えられた課題をやり遂げることによって、「英語を使って、今日はこんなことができるようになった！」という成就感、達成感を生徒が味わったならば、次に与える課題にも頑張って取り組もうとする「意欲」が生まれてくる。

生徒の興味、知的関心のレベルもその精神年齢に応じて上がるのは当然である。与える

タスクにも内容的高まりがないとせっかく培ってきた意欲も減退するだろう。学習の進展に応じて、教師からのコントロールを弱め、生徒の個性・創造性を発揮する場面の比重を多くしていく配慮が「意欲づけ」の上で不可欠である。

生徒に対する絶え間ない「意欲づけ」がある一定期間成し得ることが初めて初めて、生徒は常に英語学習に積極的に取り組むようになる。この時点でその生徒は積極的な「態度」を形成したと言えよう。

前述のシンポジウム司会者の樋口忠彦先生（近畿大学）のまとめのことばを借用すれば、望ましい態度を形成するには、「注入的・全体的・拘束的」な授業から「活動的・個性的・自由創造的」な授業へと変革することがその前提となりそうだ。

2. 生徒に形成させたい態度とは？

生徒の興味・関心を高め、意欲づけを行うためのアイデアを捻り出すことは大切だが、それは「望ましい態度」を形成させるための手段であって、それ自体が最終目的ではない。いったい我々は生徒に「どのような態度」を形成させたいのだろうか。それが3年間で到達させるべきゴールとなり、指導の目標、理念となろう。具体的なアプローチもそこから生まれてくる。自分自身確たる答は持ち得ていないのだが、現時点では次のように考えている。

①「英語学習に対する望ましい態度」

英語（および他の外国語）に関心を持ち、主体的に学習に参加する中から自己の英語力を高める学習方法を身につけ、機会あらば、その学習体験を生涯学習に活かそうとする。

宿題をよく忘れるから態度がなっていない。果たしてやる気の起こるような課題を与えていただろうか、十分な指導なしに過重な負担を与えてはいないだろうか。「意欲づけあっての態度の形成」ということを忘れないようにしたい。先に述べた文法説明、文型練習、和訳がroutineという授業をする先生に、「聞く力、話す力もつく授業をして下さい。」と直訴に及ぶ生徒がいたとすればどうだろう。「教師に向かって何を生意気な！」と一喝され、彼は態度の悪い生徒という烙印を押されはしないだろうか。注意すべきは、英語学習の中で培うべき態度を「授業態度」にすり替えないことである。

②「コミュニケーションに対する望ましい態度」

いろいろな活動を体験し、さまざまな題材に接する中から、自他の違いを知った上で、互いの価値を認め合おうとする態度を持ち、そのためにことばを積極的に使おうとする。

コミュニケーションの武器として、道をたずねる、電話をかける、依頼する、謝罪するなどといった場面や機能に応じた表現を指導するのは大切である。しかし、学校は英会話スクールとは違う。「コミュニケーション重視＝技能伝授」という側面だけをクローズアップしすぎると教育の本質を見失いかねない。

何のためのコミュニケーションかを考えることで、「コミュニケーション能力育成」と「国際理解の基礎を培う」ことが線となってつながるように思う。今、公教育としての学校英語教育の担うべき役割を考える必要があろう。

11. 定期テストの問題作成と評価

(95年2月号)

一年ほど前のこと、私立高校入試問題を検討し、良問と悪問を抽出した分析資料を見る機会があった。いわゆる長文読解問題の中に「良問」に選定された問題があった。「易しい語彙で生徒に身近で興味深い話題を提供している」というのがその理由である。題材内容は指摘通りだったが、さて、設問は...?

文中の()内に適語を補え式の文法、連語の知識を試す問題がほとんどで、受験者のリーディング能力を試す問題は皆無である。so ~とくれば that、go ~ a walk とあれば for。塾で訓練を積んだ生徒なら、英文など読む必要はない。かつて一世を風靡した「一秒ゲーム」である。良問どころか、英文をすべて読もうとする「素直な」生徒をペテンにかける悪問中の悪問である。

これは入試問題の一例であるが、「新しい学力感」に基づく評価のあり方が大きな課題となっている昨今、生徒の学習意欲や態度の形成に大きな影響力を持つテスト、教師・生徒の双方にとって、より日常的な定期テストの出題とその評価についても再検討が必要だろう。

1. テスト実施の目的

定期テストは、当該期間の到達目標に、おののの生徒がどの程度到達したかを「学習者」と「指導者」双方の視点から測定するために実施される。テストを通して、生徒は学習の成果を自己評価し今後の課題を発見する。同様に、教師は指導の成果を自己点検し今後の課題を発見しなければならない。生徒の出来不出来ばかりがクローズアップされがちだが、後者も忘れてはならない視点である。テスト問題は出題者の指導理念と学力感を反映するものである。

2. 問題作成の一般的留意事項

コミュニケーションへの積極的态度と能力育成の観点から、問題作成に際して次のような点に留意したい。

① 授業内容と整合性を持った出題

テストは日々の授業の延長であり、指導の一環である。いくらコミュニケーション重視の授業を行っても、テストで文法と和訳しか出題されなければ、生徒は教師の建前と本音を見透かし、授業に積極的に参加しなくなる。授業で行った活動と関連性のある出題をすることが、授業とテストの相乗効果を生み出す。

② 伝達手段としての英語への意識化

学習した言語材料をさまざまな現実的場面にあてはめて使用できる問題に取り組ませることで、「学習した事柄はこんなふうに役立つか」と実感させる。「ことば（思考・表現・伝達手段）としての英語」という意識をテストを通して高めたい。

③ 各技能のバランスと出題の妥当性

特定の技能に偏らぬように出題のバランスに配慮する。発音問題が解けたからといって、英語らしく調音し発音できるとは限らない。評価したい学力を測定できる妥当性（validity）のある問題を工夫しなければならない。

④ 生徒の意欲を高める出題

テストは多くの生徒にとって苦痛以外の何物でもない。英語で書かれたクイズに答え、それを例にクイズを作らせる、聞いたり読んだりした内容をもとに絵を描かせる、現実離れした夢を書かせるなど、「面白そうだ、チャレンジしてみよう」という気にさせる出題を工夫したい。

3. 主な出題ジャンルと問題作成および評価の視点

紙面の制約上、本稿では具体的な出題例を示すことはできないが、上記の4つの留意点をどのように問題作成と評価に反映するか、出題ジャンル別にいくつかの視点を挙げておきたい。¹²⁾

① 語彙力を試す問題

スペリング・テスト一色ではなく、読んで分かる、聞いて分かる理解語彙の力を測る問題も出題する。その結果、オーラル・コミュニケーションに役立つ語彙力が強化されよう。

② 読解力を試す問題

まず、和文英訳一辺倒からの脱却が必要。「理解の能力」と「翻訳の技術」は別物である。文単位の理解に留まらず、短時間で文章の概要・要点を捕らえる力を試す問題も含めたい。また、未知語の意味を文脈から推測させる問題などはリーディング能力を測る上で有効だろう。字面の理解に終始せず、中3レベルでは、読んだ内容に対する感想や意見を書かせることで内面的理解にまで深化させたい。

③ 文法力を試す問題

文法問題では、新しく学習した規則の理解と定着を測る。従って、冠詞の選択は正しく行えているか、3単元の-sが脱落していないかなど、文法的な正確さ（accuracy）が評価の基準となる。

④ 表現力を試す問題

和文英訳一辺倒からの脱却が必要。伝えたい内容を育てる指導がコミュニケーション能力育成の一方の柱である。例えば、対話文の空所を自由に埋めさせたり、続きを自由に創作させる。与えられた指示や課題に沿って、2、3文から10文程度のまとまりある文章を自由に作文させる。入門期には、表現形式を規定し、表現したい内容に応じた語彙を選択して文を作らせることから始め、学習の進展に伴って徐々に制限をゆるめ、課題のみ与えて、表現したい内容、必要な語彙と表現形式を自ら選択させる。また、与えられたテーマについて自分の意見を述べさせる。始めは、I (don't) think～の形で自己の立場を明示させ、because や for example ～の形で、その根拠や具体例（supporting idea）を付け加えさせる。さらに、賛成／反対を指定して説得力のある意見を構築させれば、ディベートへの橋渡しとなろう。

表現力を試す問題では文法問題とは異なり、正確さばかりでなく、理解可能性（intelligibility）を基礎に置き、伝えようとする内容（message）、全体としてのまとまりや文

章の滑らかさ（fluency）も評価の中心に据えて、総合的に評価することになる。

⑤ 聴解力を試す問題

概要・要点の聞き取りを中心に出題し、ある程度学習が進んだ段階ではスポット・ディクテーション形式で弱形や音声変化する箇所の聞き取りも補足的に出題する。いずれにせよ、リスニング・テストがスペリング・テストになっては妥当性を欠く。解答形式の工夫、英語で書かせる場合は語彙選択の配慮が必要である。

テストは指導の一環という観点から、テストを通して英語学習とコミュニケーションに対する積極的態度を育成し、運用能力を高めさせるという、より積極的なテストの効用を目指したいものである。

＜注＞

- 12) 具体的な出題例については、樋口忠彦・岩本京子・高橋一幸（1992）、「定期考査の問題と採点」（『現代英語教育』第29巻、第12号、pp.37-39、研究社出版）を参照。

12. 外国語（英語）の授業で何を教えるか

（95年3月号）

「中高6年間学んでも、電話ひとつかけられず、手紙一本書けない。」「英語学習は暗記の集大成、膨大な時間の浪費である。」等々。英語教育に対する世間の批判は厳しい。英語教育大論争の平泉試案のように、外国语学習に適正のある者を国民の中から選び、徹底的に熟達させよという案が登場する。他教科はどうだろう。すべての生徒が楽器を自由に奏で、自ら作曲できるわけではない。だからと言って「音楽は時間の浪費、やめてしまえ。」という批評を聞くことはない。仮にそのような批判があっても、学校における音楽教育の果たす役割について、音楽教師は自信を持って論陣を張ることだろう。我々英語教師はどうか。反論のことばもなく、「打たれっ放し」の状況に近い。明治以降の英語教育の歴史の浅さゆえであろうか。

コミュニケーション能力を育成し、「力をついている」と批判に応えられるようにならねばならない。しかし、公教育において、他教科ではなく英語教育、外国语教育の担うべき役割も考えていく必要がある。

1. ある差別発言から

「朝鮮人は朝鮮に帰れ一同僚に教諭発言」昨年の10月6日の日経新聞夕刊の記事である。大阪府下のある定時制高校で、日本人英語教諭Aが、同校で朝鮮語を教えている日本に帰化した朝鮮人教諭Bに対して発言したという。A教諭が時間途中で授業を打ち切ったため、生徒が授業中のB教諭の教室に入ってきた。後日B教諭が「授業がやりにくいので最後まで授業をしてほしい。」と申し入れたところ、腹を立てたA教諭が「お前ら朝鮮人に言われる筋合いはない。朝鮮人は朝鮮に帰れ。」などとなじったというのがことの経緯である。教育者として許容しがたい発言だが、それを言ったのが英語の教師であるという事実が衝撃であった。

コミュニケーションへの積極的な態度と能力の育成は大切である。が、我々は、何のためにそれを育成するのか。これは学校教育としての英語教育の本質に関わる問題である。

2. 外国語教育を通して何を教えるか

これは、模範解答のない究極のテーマである。語彙・文法・音声的特徴など目標言語 자체を指導し、言語分析能力はもとより、実際に伝達手段として運用できるコミュニケーション能力を育成する。これは「教科を教える」という授業の柱である。一方、「教科で教える」というもうひとつの柱があるはずだ。

日本人は、その地理的環境、長い鎖国政策、農耕民族特有の村意識などから、一般に「異なるもの」(eg. 異なる民族・人種、考え方、文化、習慣)に対して排他的であり、均質であることを是とする国民性がある。そのような中で、「ことば軽視」の伝統が培われてきたようだ。「沈黙は金」、「以心伝心」から「男は黙って〇〇ビール」に至るまで、例を挙げれば枚挙にいとまがない。しかし、それが国際的に通用するとは限らない。ことばをもって論理的に相手を説得したり、理解しあうことを見るとする文化もあることを知らねばならない。言語は人間の思考を表出するものである。「そうなのですよ」と説明するに留まらず、外国語の構造・表現形式からそれを学ぶことに意義があろう。

世界には、さまざまな人種・民族がいて、多くの言語が使われ、それぞれが異なる文化・習慣をその背景に持っている。言語や文化・習慣は違えど、人間として同じ喜怒哀楽の感情を持ち、体内には温かい血が流れている。当たり前のことではあるが、戦後50年を迎えるとする今日、「鬼畜米英」、「大東亜共栄圏建設」の時代があったことを忘れてはなるまい。

どの言語、文化、習慣も、人々の脈々たる生活の営みの中から創り出されてきたもので、等しく大切なものです。どの言語も等しく美しく、どの文化、習慣にも優劣はないことを子どもたちに伝えたい。

外国語教育を通して、異文化理解教育、国際理解教育を進めたい。しかし、異文化は外国にのみ存在するものではない。異文化理解の視点を持てば、その目は、在日韓国朝鮮人差別など「内なる異文化」、また被差別部落の問題などにも向けられよう。外国語教育を突き詰めていけば、人権教育に帰結するのだと思う。

3. 二本の柱を結ぶもの

「コミュニケーションへの積極的态度と能力を育成すること」と「国際理解の基礎を培うこと」は学習指導要領の二本柱であるが、それらは、切り離された別な目標ではない。

「異なるもの」への寛容な姿勢を養い、異質なところと同時に、その普遍性をも知り、人間と、人間が創り上げてきた文化・習慣に共感的関心を持ち、相互理解のために「ことば」を使おうとする積極的态度を持った子どもたちを育てることを外国語教育の目標と考えるとき、二本の柱はひとつにつながると思う。そして、これらのことを見るとする文化もあることを知らねばならない。言語は人間の思考を表出するものである。「そうなのですよ」と説明するに留まらず、外国語の構造・表現形式からそれを学ぶことに意義があろう。



生徒の創造的なオーラル・コミュニケーションを促す活動

——ロールプレイ：記者会見からニュース・キャスティングまで——

たか はし かず ゆき
高 橋 一 幸

はじめに

現行版の中学校検定教科書には、コミュニケーション活動としてロール・プレイがかなり取り上げられているが、生徒にはもうひとつ興味が感じられないようだ。これは、ロール・プレイのトピック、場面、登場人物がありきたりであったり、会話の流れがあらかじめ決られており、自分たちで主体的に会話を展開する余地がほとんど残されていないからだろう。生徒の興味・関心をとらえ、積極的なオーラル・コミュニケーションを引き出すには、彼らの個性・創造性を引き出す活動へとひと工夫凝らす必要がある。

ロール・プレイの楽しさを味わわせるためには、時には、トピック、場面、登場人物を生徒自身に選ばせ、会話の流れも生徒にまかせることが必要である。中学生は、新聞、雑誌やTVのニュースに关心が高い。そこで、生徒が選んだ“時の人”役の生徒に、“記者”役の生徒がインタビューを行う「記者会見」(press conference)はどうだろう。生徒が自分たちで記者会見の内容を考え、有名人気取り、記者気取りで自分の役を演じるのではないだろうか。さらに、取材をもとにしてニュース原稿を作成し、それをAV機器を活用して「ニュース・ショー」として放映することにしておけば、生徒は憧れのニュース・キャスターを堂々と演じるのではないだろうか。

このような観点から、中学2年生の小グループによる「ロール・プレイ——記者会見からニュース・キャスティングまで」の実践を紹介する。

1. 指導にあたって

クラスを5人程度からなる8グループに分ける。各グループとも、時の人に対して取材を行う“記者”役と、取材を受ける“時の人”役を担当する。「記者会見」は、グループを代表する時の人と、記者4人および進行役の司会者1人で進める。この記者会見を充実したものにするには、各グループで取材をしたり、取材を受けるための準備が不可欠である。そこで、次のA～Eのような役割を互いに分担し、協力して活動を進めさせることが大切である。

A：記者1——他グループから取材を受ける時には、グループを代表して“時の人”役を演じる。

B：記者2——“質問リスト作成キャップ”として、質問事項のまとめ役を兼ねる。

C：記者3——“取材キャップ”として、記者会見の取材メモの整理役を兼ねる。

D：記者4——“記者会見対策ブレイン”として、他グループからの公開質問状に対す

る応答のまとめ役を兼ねる。

E：司会者——“編集デスク”として、ニュース原稿作成のまとめ役を兼ねるとともに、ニュース・ショーでは“キャスター”役を演じる。

今回の記者会見からニュース・ショーに約7時間を配当したが、指導計画および指導上の留意事項は次のとおりである。なお、時間的に余裕がなければ、第5時の「記者会見」まで実施するだけでも大いに意義があろう。

1.1. 指導計画

- 第1時（20分）：活動内容、計画を説明し、各グループで演じる“時の人”を取り扱う話題、および役割分担について相談させる。また、授業の終わりに、次時に決定する“時の人”に関する各自が推薦する人物の資料（新聞や雑誌の切り抜きなど）を持参するように指示する。
- 第2時：各グループで“時の人”を決定し、人物名および資料を相手グループと交換する。その後、各グループでその人物にインタビューしたいことからを考え、配布された所定の用紙を使って「質問リスト」を作成する。
- 第3時：「質問リスト」から4～5つの質問を選び、「公開質問状」を作成し、相手グループと交換する。なお、「質問リスト」中の残りの質問は公開せず、記者会見の際の「ぶっつけ質問」とする。
- 第4時：「公開質問状」の質問に対する返答を全員で知恵を出し合って考えるとともに、「ぶっつけ質問」でたずねられそうな質問を予想し、対策を立てる。また、グループ内で記者会見のリハーサルを行なう。
- 第5時：「記者会見」本番（録画撮り）。記者は、会見者の応答をよく聞き、「質問リスト」のメモ欄に日本語または英語でメモを取る。
- 第6時：4人の記者の取材メモに基づき、各グループで協力してニュース原稿を執筆する。
- 第7時：教室内に仮設スタジオをセットし、各グループのキャスター役の生徒が、グループで作成したニュースを生中継でTV放映する。

なお、第8時に各クラスから選んだ優秀グループの会見とニュースを録画したものを鑑賞し、どこが良いかを話し合わせ、教師が講評したり、各グループで作成したニュース原稿をプリントにして配布してやってもよい。

1.2. 指導上の留意事項

① “時の人”はタイムリーな人物を選ばせる

時的人は、多くの友達が、今、興味・関心を持っている人物が望ましいが、話題的に難しきりすると、記者会見の準備段階や本番で、自分たちのグループも相手グループも困ることを告げておきたい。また、ニュース性があれば、アニメの主人公、アイドル、担任の先生などでもよいことにしておくと、どの生徒も気軽に取り組めるだろう。

② 質問の内容、順序を工夫させる

記者会見で利用する「質問リスト」の作成では、質問したいことを5W1Hを中心に多い目に考えさせる。次に、記者会見後のニュース原稿の作成も念頭に置き、質問数を7～8つに整理しながら、質問相互の関連や発展性を考えて質問の順序を決定させる。

なお、公開質問や予想されるぶっつけ質問に対する応答は、質問に単に答えるだけではなく、プラス・ワンの情報を含めて丁寧に答えられるように準備するよう指導しておきたい。

③ 「ぶっつけ質問」で実際の会話に近づける

記者会見の質疑応答がすべて事前通告ずみの質問に基づくものであれば、生徒にとって挑戦しがいがなく、実際の言語使用からもほど遠いものになってしまう。しかし、応答がすべて即興となると中学2年生には難しすぎる。そこで、記者会見の前半は公開質問に自信を持って答えさせ、活動になじませた上で、後半はぶっつけ質問に即興で答えさせることによって、一步でも実際のコミュニケーションに近づける。時の入役の生徒は、グループでの予想が当たったときには、得意満面で即座に応答し、記者団や評価用紙片手に会見を見守る傍聴生徒を驚かせる。また、予想がはずれたぶっつけ質問にも、四苦八苦しながらも「ここが腕の見せ所」とばかり、難局に立ち向かうものである。

④ 「記者会見の進め方マニュアル」を与える

各グループで記者会見のリハーサルを実施する前に、次に示すような「記者会見の進め方マニュアル」をプリントして全員に配布し、司会・進行を円滑に進めるための手順と必要な英語表現を説明し、read and look-up が行なえる程度まで練習させる。

How to Begin & End the Press Conference (記者会見の進め方マニュアル)

司会者： Now, we'll begin the press conference with Mr./Ms..

会見者： Hello, everyone. It's nice to be here.

司会者： (記者団に向かって) Do you have any questions?

記者1： (挙手)

司会者： (記者を指名する) OK. Mr./Ms., please.

記者1： (大きな声で、はっきりと質問する)

会見者： (記者の質問に答える)

*記者は自分の持つ質問リストにメモをとる

司会者： Any other questions?

記者2： (以下、同様に進める)

•
•
•

司会者： (自分のグループの最後の質問を受けるときには)

We are running out of time. So the next question will be the last.

記者4： (最後の質問をする)

会見者： (最後の質問に答える)

司会者： OK. This is the end of the press conference.

Thank you very much, Mr./Ms..

会見者： You're welcome. または、It's my pleasure.

⑤ A V機器を活用し、リアルな雰囲気を作る



〈記者会見の様子—ちょっとした環境作りも大切〉

生徒はちょっとした小道具や衣装でその気になるものである。TVに一度出演してみたいという生徒の夢をとらえて、AV機器を効果的に活用すればなおさらだろう。記者会見場を上の写真のように、レクチャー・アンプとテーブル付きの椅子で設営し、ワイアレス・マイクを準備してやれば記者会見場らしくなる。そして教師が記者会見の様子をビデオ・カメラで撮影、録画してやれば、いっそうリアルな雰囲気になり生徒の意気込みは自然と高まる。

会見後の、ニュース・ショーでも同様に、教室内に仮設ニュース・スタジオを設営する。これは300頁の写真(右)のように、教室のカーテンを外して出入口の戸にとめて背景とし、教卓にカーテンをかけ、マイクとネーム・プレートを置いただけの簡単なものであるが、生中継でモニターTVに映し出されると、写真(左)のように本物のTVニュースそっくりの雰囲気が出る。

肉声ではなく、マイクを通して自分の声が拡声されることに加え、TVにも映るということで、生徒たちは思い思いの工夫を凝らし、自分の演じる役割になりきって意欲的に取り組む。その上、「話す時は顔をあげて、相手の目を見て...」(Keep eye-contact.)といった注意を与えなくとも、TV映りをよくしようと、生徒たちは進んでそういうものである。

2. 活動の実際

自分たちが興味・関心を抱く人物について、自分たちで会話を組み立て会話を展開する(initiate the conversation)ということで、生徒たちは、時の人の決定から記者会見、ニュース原稿作成からニュース・ショーの放映まで、グループの仲間と協力し実際に熱心に活動に取り組んでいた。以下、各グループで選んだ時の人、記者会見およびニュース・ショーの様子を紹介する。

2.1. 各グループで選んだ“時の人”

各グループで選んだ時の人は、下の表に見られるように、サッカーのW杯アジア予選やプロ野球の日本シリーズの時期であった関係もあり、スポーツ選手が圧倒的であった。しかし、時事ニュース関係では、「矢ガモ事件」のカモ、コカイン事件の角川春樹、皇后陛下のご病状を説明する天皇陛下（？）など、その他として、盆栽の魅力に取りつかれたデンマーク人女性、人気アニメの主人公である「のび太くん」、「スネ夫」、「水野亜美」など多彩であった。

生徒たちは、自分たちの興味・関心を大切にしながら、あまり背伸びせず、自分たちの英語力で記者会見をこなせる人物を時の人として選んだようである。

Class A

会見	班	Interviewee (会見者)	会見	班	Interviewee (会見者)
①	1	サザエさんの息子 フグタ・タラ男	⑤	5	宇田先生 (担任)
②	2	風船おじさん	⑥	6	矢ガモ
③	3	セーラームーンの水野亜美	⑦	7	デーモン小暮
④	4	バスケットのマイケル・ジョーダン	⑧	8	角川春樹

Class B

会見	班	Interviewee (会見者)	会見	班	Interviewee (会見者)
①	1	サッカーのラモス選手	⑤	5	サザエさんの父 磯野波平 (養毛解説)
②	2	のび太くん	⑥	6	松山先生 (担任)
③	3	サッカー日本代表チームのオフト監督	⑦	7	JリーグカレーのCMの マサオ君
④	4	サッカーの三浦選手 (カズ)	⑧	8	スネ夫

Class C

会見	班	Interviewee (会見者)	会見	班	Interviewee (会見者)
①	1	ワールドカップ最終予選で活躍した中山選手	⑤	5	シンクロの小谷実可子
②	2	日本シリーズMVPのヤクルト古田選手	⑥	6	盲腸で入院していた大西康司君(本人)
③	3	巨人軍の松井選手 (ゴジラ)	⑦	7	マイケル・ジョーダン
④	4	カーネル・サンダース	⑧	8	ピア・シルベスター・セン*

*ピア・シルベスター・センさんは、盆栽の魅力に取りつかれた日本在住のデンマーク人

Class D

会見	班	Interviewee (会見者)	会見	班	Interviewee (会見者)
①	1	天皇陛下(皇后陛下のご病状について)	⑤	5	風船おじさん
②	2	貴ノ花 (宮沢リエとの破局について)	⑥	6	日本シリーズ優勝のヤクルト野村監督
③	3	日本シリーズ敗退の西武 森監督	⑦	7	横綱 曙
④	4	落合選手の奥さん (フリーエージェント)	⑧	8	鹿島アントラーズのアルシンド選手

2.2. 質問リストと公開質問状

記者会見に先だって、グループ毎に作成した自グループ取材用の「質問リスト」と記者会見での取材メモの記入例、および、後半のぶつけ質問を除いた「公開質問状」と質問に対して事前に準備した答弁の記入例を次に示す。記者会見を受ける時の人は、Jリーグ、ペルディ川崎のラモス選手である。双方あわせてご覧いただきたい。

Press Conference Question List (1)

<記者会見リスト: 日本代表団用>

Questions to Mr. ROMAS of Group (1)

* Chairperson (抹野)
* Reporters (岩澤, 石川, 佐々木, 齋藤)

公問質問1. (Reporter: 岩澤)
When did you begin soccer?

Keizo.
I began about 4, 5 years.

公問質問2. (Reporter: 抹野)
When were you young
Who was your coach?

Keizo.
Firstly.

公問質問3. (Reporter: 岩澤)
When did you come to Japan and
What did you first impression of Japan?
Keizo.
1971
1983
1993
After coming
from America

公問質問4. (Reporter: 齋藤)
What did you like Brazil?
Keizo.
Brazil is a beautiful country.

公問質問5. (Reporter: 岩澤)
What do you get from the
TV commercial of

Keizo.
TV.

公問質問6. (Reporter: 抹野)
How long do you practice soccer

Keizo.
About 5 hours per day.

公問質問7. (Reporter: 岩澤)
Who are the great player ever come from?

Keizo.
Totti.

公問質問8. (Reporter: 抹野)
When was active from soccer team?
What do you want to do?
Keizo.
1971
1983
1993
After coming
from America

Keizo.
I will play football in Brazil.

公問質問9. (Reporter: 佐々木)
Did you become Japanese?
Keizo.
No.

公問質問10. (Reporter: 齋藤)
Do you like Brazil?

Keizo.
Yes.

Press Conference Question List (2)

〈記者会見公開質問リスト：相手グループ別質問用〉

SECTION B

Questions to Mr. RAMOS _____ of Group ()

* Chairperson (柏野) * Reporters (有志) アシキ 森井

公開質問1. (Reporter: 有志)
When did you begin soccer?

Answer.

I began soccer when I was very small boy.
Maybe I was about four or five years old.

公開質問2. (Reporter: アシキ)
When you were young who was your coach?

Answer.

My brother was... He was very good player... and a great
coach...

公開質問3. (Reporter: 有志)
When did you come to Japan and what is

your first impression of Japan?

Answer.

I came to here 1977.
At that time, I heard about Japan is very active country.
My brother is such person and quiet. So I am surprised

公開質問4. (Reporter: アシキ)
What did you become Japanese?

What don't you like Brazil?

Answer.

I stayed Japan for long time and I was in love with
Japanese woman.

I like Brazil very much and I can't forget my life in Brazil.

公開質問5. (Reporter: 有志)
How many do you get from the TV
commercials?

Answer.

It is secret. But my life has been a little out.
I am grateful to everybody.

ぶつつけ質問 (残る2~3の質問は、secret questionsです。高機密質問にその場
でなんとか切り抜けましょう。ここからが会見者の質の見せどころです！)
●相手の質問にしおなことを示すと、その質問がズバリ出たら答えられるように、
みんなで細事を出し合い、情報を繋っておこう！

I like green pond on www.pondon.jp.
Please go back to July 2004.
2004-12-17
11:27:14.32.77.41
11:27:14.32.77.41

I'm not going to bid for the project again.
I'm here to bid my time to visitors.

1977
I'm not going to bid for the project again.
I'm here to bid my time to visitors.

1977
I'm not going to bid for the project again.
I'm here to bid my time to visitors.

2.3. 記者会見の様子

記者会見は、1.2.⑤で紹介したリアルな舞台装置の貢献もあり、大いに盛り上がった。各グループの司会者の進行で、記者役の生徒たちは質問リストを片手に次々に会見者に質問を浴びせ、聞き出した内容を熱心にメモしていく。時の人役の生徒も、公開質問には堂々と、ぶっつけ質問には緊張しながらも必死に応答する。聴衆の生徒たちは、しゃれたやりとりやぶっつけ質問に対する内容ある応答に、賞賛の拍手や「オー」といった感嘆の声をしばしばあげながら、記者会見の様子を熱心に見入っていた。

次に、角界初の外国人横綱である曙への記者会見の様子を、録画ビデオから掘り起こし、生徒たちが発話したままに示しておきたい。

●生徒の記者会見例

司会者: Now, we'll begin the press conference with Mr. Akebono.

曙: (曙のポスターで作ったお面を持った女子生徒が登場)

Hello, everyone. It's nice to be here.

司会者: Do you have any questions?

記者1: (挙手して司会者の指名を受けて)

You are from Hawaii. Is sumo popular in Hawaii?

曙: Yes, of course. Konishiki and Musashimaru are from Hawaii, too.

記者2: When did you begin sumo?

曙: I played basketball in high school. So I began sumo about seven years ago.

記者3: Why did you begin sumo?

曙: Well, I was interested in Japanese culture. And I wanted to be a strong sumo wrestler.

記者4: Who is your rival?

曙: My rival is all sumo wrestlers.

記者2: (これより「ぶっつけ質問」に入る) What do you think of Waka-Taka brothers?

曙: They are ... , they are ... a lot of practice, so very strong.

司会者: We are running out of time. So the next question will be the last.

記者3: Who will be the next "yokozuna"? What do you think?

曙: I think ... if all wrestlers practice hard and become strong, everybody have chance.

司会者: OK. This is the end of the press conference. Thank you very much, Mr. Akebono.

曙: You're welcome.

記者役の生徒たちからの質問は、前半（公開質問）は曙自身について、後半（ぶっつけ質問）は若貴兄弟や次期横綱について曙の意見を求めており、上手に構成されている。曙役の生徒も、記者の質問の意図を的確に理解して応答しているだけでなく、ぶっつけ質問にも多少口ごもったり、文法上の誤りを犯してはいるが、見事な内容の応答ではないだろうか。曙自身ならどのように答えただろう ... 。



2.4. ニュース・ショーの様子

第6時には、記者会見の取材メモに基づいて、グループ全員が協力してニュース原稿を執筆する。執筆に際しては、1.2.④と同様、以下に示す「ニュース原稿執筆マニュアル」を配布し、ニュースの始め方と終わり方を示すとともに、記者会見で得られた情報を単に羅列するのではなく、どのように配列すればわかりやすく興味深いニュースになるか、全体の構成をよく考えさせることが大切である。

ニュース原稿作成マニュアル

<Music>

This is the Ten O'clock News. Good evening. I'm (ニュースキャスターの氏名).
Today's news story is about (会見者の氏名など).

ニュースの内容（英語10～15文程度にまとめる。）

This is the end of the news. Good night, everyone. See you tomorrow.

<Music>

◆執筆上の留意点◆

- ニュース・トピックの紹介では、可能な限り、名前だけでなく、次の例のようにどのような人物かわかるように説明しよう。
例. Today's news story is about Mr. Alcindo of the Kashima Antlers.
～ about Mr. Nomura, the manager of the Yakuruto Swallows, etc.
- 難しい単語の使用をなるべく避けて、みんなで知恵を出し合い、できるだけ易しい単語や表現で書いてみよう。（キャスターが自信を持って読める原稿、視聴者の友達に理解してもらえる英語をめざそう。先生に積極的に質問しよう。）
- 事実の列挙ではなく、内容的なまとめと構成を考えよう。（段落を作ろう。文と文とのつながりを考えて、接続詞や副詞をうまく使おう。）
× He was born in New York. His father was a salesman. He has four children. His hobby is bonsai. He came to Japan ten years ago.
○ He was born in New York. When he was a little boy, he was not interested in baseball. He began to play after he entered high school. At first he was not a very good player. But he practiced very hard day after day, and

次に、前記2.2.および2.3.で紹介したラモスと横綱曙の記者会見に基づくニュース原稿2編を示しておこう。

●生徒のニュース原稿作成例 (1)

Ten O'clock News —News Story—

Class (2-B), Group (5), Newscaster (柏野悦子)

This is the ten O'clock news.
Good evening. I'm Etsuko Hashimoto.
Today's news story is about Mr. Paros,
* > a famous soccer player of the Verdy Kawasaki.
He began soccer when he was a
little boy. His coach was his brother.
He practiced very hard.
When he was twenty years old in 1977.
He came to Japan.
He became Japanese because he was in love
with a Japanese woman.
But sometimes he remembers his life in Brazil.
He practices five or six hours in a day.
If all the people do it, they are very very
tired. His great power comes from his friends
and his lovely wife.
I want him to show us his excellent
plays.

This is the end of the news
Good night everyone
See you tomorrow.

* He is a very good player and he is]
very popular.



●生徒のニュース原稿作成例 (2)

Ten O'clock News — News Story —

Class (2-D), Group (3), Newscaster (村田 佳織) CHECK
93.11.11
高橋

This is the Ten O'clock News. Good evening.
I'm Kaori Murata. Today's news story is
about Mr. Akebono, the first foreigner Yokozuna.
He is from Hawaii and his real name is Chado
Lowen, you know.

He began sumo seven years ago, because he was
very interested in Japanese culture. Besides sumo
is very popular in Hawaii. By the way his rivals
are all sumo wrestlers. About Waka-Taka brother,
he said, "They practice very hard, so they are both
very strong." "Who will be next Yokozuna?" we
asked him. He answered, "All the sumo wrestlers
practice very hard. So I think everyone has a chance."

We hope we have a new Yokozuna soon. Sumo is
very exciting right now.

This is the end of the news. Good night everyone.
See you tomorrow.

ともに記者会見で得た情報を要領よく整理・構成しているだけでなく、TVのニュース・キャスター気取りで、最後にニュースに対するキャスター自身のコメントをつけ加え、非常に上手にまとめている。また、(2)を注意深く見ると、記者会見時の発話の文法的な誤りは、このニュース原稿では姿を消し、正しい英語に修正されている点にも注目したい。

第7時には、作成したニュース原稿をキャスター役の生徒が生中継で放映し、一連の活動を締めくくる。なお、ニュースの開始と終了時には、音響効果として、TVのニュース番組から録音した音楽を流し、雰囲気作りを行うとともに、放映開始と終了の合図とした。



<ニュース・ショーや生中継の模様ー(左)TV画面、(右)仮設スタジオ>

なお、記者会見、ニュース・ショーとともに、①「英語はわかりやすかったか？」②「質問／応答（報道）の内容は良かったか？」③「それぞれの役割を堂々と演じられていたか？」の3つの観点について、互いにA、B、Cの3段階（特別良い場合はA°）で評価させ、寸評も書かせた。次に示すのは、横綱曙の記者会見の評価用紙、および、ニュース・ショーやの評価用紙の記入例（一連の活動の感想を含む）である。

Evaluation Sheet for the Press Conference

（記者会見・評価用紙）

◆ 会見者 (Interviewee): 横綱 曙

司会者・記者団 (3)班	会見者 (7)班
1. 司会者の英語や取材記者の質問の英語はわかりやすかったか? 【A°(A)-B-C】	1. 会見者の話す英語はわかりやすかったか? 【A°(A)-B-C】
2. 質問の内容はよかったです? 【A°(A)-B-C】	2. 応答の内容はよかったです? 【(A)-A-B-C】
3. 司会者は手際よく進行できたか。 記者はてきぱきと質問できたか。 【(A)-A-B-C】	3. 司会者や記者の方に向かって堂々と会見に応じていたか? 【(A)-A-B-C】
4. コメント 司会者が手際よく進行して いたりて良かった。	4. コメント がっつけ質問へも上く 応答できてい。

評価者 (Evaluator): (C)組 (3)班, 氏名 B. Saito

- ◆ 観点① 本物のニュースキャスターのように上手に話せていたか?
- 観点② 報道の内容は興味深いものだったか?

- ◆ 評価: A(よい), B(ふつう), C(悪い)と評価するが、特に優れている場合にはA° の評価をつけてあげよう!

Evaluation of the Newscaſting

	観点①	観点②	観点③	コメンタリ
1 班	A°…A-①-C	A°…④-B-C	A°…④-B-C	出たからアジョニが出来ますよおもしろい。内容をせかしながら、
2 班	A°…A-①-C	A°…A-④-C	A°…A-④-C	ちょっと少ソ語すぎると内容が良くなっちゃう。
3 班	A°…A-B-C	A°…A-B-C	A°…A-B-C	ものすごく緊張して足がずっとふくらんでる。まだNG出さないでね。
4 班	A°…④-B-C	A°…④-B-C	A°…④-B-C	イーティー、よく言、いいだ、まだ少しかべっつき過ぎる。
5 班	A°…④-B-C	A°…④-B-C	A°…④-B-C	すごく分かりやすく本当のニューススターみたいだ。
6 班	A°…A-④-C	A°…④-B-C	A°…A-④-C	もう少し落ち着いて話せばでも、良かっただと思う
7 班	A°…A-B-C	A°…④-④-C	A°…A-④-C	かっこよさと話しかけがまだ少しあった。
8 班	A°…④-B-C	A°…④-B-C	A°…④-B-C	いつもよりもっと緊張して笑うのが印象的だった。

- ◆ 今回の活動（記者会見からニュース番組生中継まで）を経えた感想を自由に書いて下さい。
- 方もいるんだ。ニュースキャスターには個人的におなかがちなんだ。だから、実際にやるところが少しある。(緊張したけれど)
英語スピーチ=ケーミック=本当に美しいものだけれど、かわいらしい、自分=身=はつぱん=ような気がする。
でもやっぱりまだまだみんな、おもちゃにならなかった事、せめてみんなが喜んでくれた。(私達も、明日)

おわりに

活動終了後の生徒たちの感想文を読むと、「おもしろかった。ニュース・キャスターには個人的にあこがれがあったので、キャスター役を実際にやってみてうれしかった。」「最初は、こんなことできるわけないと思ったけど、記者会見から最後のニュース・ショーまで本当に英語を使ってできたのでうれしかった。」など、ほとんどの生徒たちが、これらの活動を英語でやり上げることによって、大きな満足感、成就感を味わったようである。そして、「今度やるときには、記者会見を全部ぶつけ質問でやってみたい」と書いた威勢のいい生徒も何人か見られた。「シメタ！」ものである。生徒たちの英語力向上に合わせて即興性の比重を高めてゆけば、記者会見はいっそうすぐれたロール・プレイとなるだろう。その時、生徒たちはどのような時の人を選び、どのような記者会見をするのだろうか。

以上、活発なオーラル・コミュニケーションを促す4技能の統合的(integrated)なロール・プレイの活動例を紹介してきたが、生徒の個性・創造性を引き出すこの種の活動を考案する際の一般的な留意事項を次に整理し、本稿のまとめとしたい。

- ① 生徒にとって、「ちょっと難しそうだけど、ひとつやってみるか！」という気にさせる課題を与えること。達成可能な中で最も難易度の高い課題を与えたとき生徒は意欲を奮起させ、活動後の成就感も最高となる。
- ② 準備に必要な時間を保証した、生徒にとって無理のない planning を吟味すること。時間不足を宿題で補うなど、家庭学習に安易に依存するのは禁物である。
- ③ 活動が数時間に及ぶ場合には、導入時に活動の目的と計画を生徒に周知徹底することにより、活動の全体像を把握させること。そのことにより、生徒は見通しを持って活動に取り組むことができる。
- ④ 必要に応じて適切なモデルや活動の枠組みを提供すること。学習者中心といえども、自由にやりなさいというだけでは無責任。発達段階に応じて、教師からのコントロールを徐々に弱めていく配慮が大切である。
- ⑤ 生徒が個性・創造性を発揮する必然性のある場面を planning の中に組み込むこと。学習の進展に応じて、創作から即興(improvisation)の比重を計画的に高め、実際のコミュニケーションに近づけること。

これら留意点は、中学校のみならず、高等学校「オーラル・コミュニケーション」の指導にもあてはまるであろう。

なお、本稿は、『個性・創造性を引き出す活動—英語授業の変革を求めて』(樋口忠彦編著、岩本京子・高橋一幸他著、研究社出版、近刊)の執筆原稿に授業時の配布資料と生徒活動例を補足し、若干加筆したものである。本活動の立案、実践、まとめにあたっては、近畿大学教授・樋口忠彦先生よりご助言ご指導をいただいた。また、AV機器のさまざまな活用方法については、東京都墨田区立両国中学校教諭・長勝彦先生の実践を参考とし、機器の使用については、本校技術科教諭・上田学先生のご協力を得た。この場をお借りして御礼を申し上げる次第である。

<参考文献および資料>

- 長 勝彦 (1993), 「A V 機器を活用した授業」語学教育研究所・1993年度 研究大会, 発表資料 (『語研 FORUM』 pp.62-63.)
- 高橋一幸 (1992), 「言語活動を中心に据えた英語指導の実践研究 (IV) —中学第2学年ににおける学習の個別化をめざした創造的活動の試み」
- 『大阪教育大学紀要』第V部門教科教育, 第40巻第2号, pp.341-359, 大阪教育大学
- _____ (1993), 「中学第3学年におけるディベイトの実践—オーラル・コミュニケーションへの移行をふまえて」
- 『研究集録』第35集, pp.147-163, 大阪教育大学附属天王寺中・高等学校
- _____ (1994 a), 「個性・創造性を引き出す活動づくり」
- 研究社・1994年 英語教師のための夏期セミナー, 発表資料
- _____ (1994 b), 「コミュニケーション活動再考—より創造的な活動をめざして」
- 第9回鳴門教育大学英語教育学会, 発表資料
- 橋口忠彦・高橋一幸 (1994), 「ロール・プレイー記者会見」
(連載「個性・創造性を引き出す授業」第23回) 『現代英語教育』第30巻第11号, pp.37-39, 研究社出版)

A Practice of an Activity to Increase Learners' Creativity in Oral Communication
— Role Play : From Press Conference to Newscasting —

Kazuyuki TAKAHASHI

A number of 'role plays' are adopted for use as communication activities in the present authorized textbooks for junior and senior high schools. Many of such role plays, however, seem to fail to increase the learners' motivation. It is because the situations and characters are too routine, and have little or nothing to do with the learners' real lives. Also, there is usually no room for learners to adopt them to their own interests.

To stimulate the learners' positive participation in role plays, it is necessary to give them a choice of favorite topics, situations or characters, and a chance to move the conversation forward in their own way.

A series of role plays, "from press conference to newscasting", which attempts to solve these problems is reported on in this paper.

The following are some of the general points considered in devising learners' creative activities of this kind :

(1) Level: To give the most difficult task that can still be accomplished by the learners. Then their motivation and sense of satisfaction after the activities will be maximized.

- (2) Planning: To guarantee the necessary time for preparation during class hours.
Do not assign many things as homework.
- (3) Perspectives: To give the learners the whole picture of the activity so that they can work with a perspective.
- (4) Models and frameworks: To show the learners necessary models and the frameworks to promote their smooth activity.
- (5) Improvisation: To set in the steps of activities parts in which the learners have to improvize. To plan a gradual decrease of teacher's control and increase of learners' creativity.

ニューヨーク・タイムズに拾う四季

——教室で読む英文を探す中で——

ひがし もと くに お
東 元 邦 夫

はじめに

教科書以外の英文として、新聞・週刊誌を使うことがある。

英語学習の目標の一つとしてほとんどの生徒が、英語の新聞や雑誌が読めるようになりたい、と思っている。その（日本で発行されているものも含めて）英字新聞・雑誌を教室で使い始めるのは、およそ二年生の後半である。

その際、選ぶ英文の一つの基準を、季節に関するものとしている。そうすることで、たとえば、ニューヨークに住む人が感じている季節を、その英文から生徒が感じることができれば、と期待している。

そして、英語の新聞や雑誌が読めるという目標にどれだけ近づいているか、まだ何が足りないか、を生徒が実際に則して知る機会になればいいと思っている。

1993年卒業の35期生の場合、まず第二学年後半から「毎日ウィークリー」第一面のエッセイを利用した。この時点では、季節に関する文章を特に意識して選んでいない。第三学年になり *The New York Times (Weekly Review)* (以下 NYT-WR) の社説・投書・寄稿欄からの英文を季節に合わせて用いるようにした。

以下は35期生を中心にこれまでに、NYT-WRで拾ったニューヨーク（さらに合衆国）の季節である。

春

To the Editor :

Philip Shabecoff's April 21 news article on the environment and pesticides nearly a quarter-century after the publication of Rachel Carson's warnings in "The Silent Spring" should have been on page 1.

Anyone who thinks that a "silent spring" is not at hand has simply not been listening to the quiet at daybreak. When we moved to this rural area 18 years ago, the bird song in April was such an exultant chorus that it awoke the entire household. Today, one can listen and listen at dawn and hear only a chirp or a trill here and there. Too little attention is being paid to this ominous development, which is getting progressively worse.

What are we doing to the worlds we live in when we bend our god-given intellectual energy toward ever-more efficient means of destroying our planet and ourselves? What will life be like for future generations without the songs of birds to cheer the heart and brighten hope in springtime?

Do we want a world for our children and grandchildren in which no birds sing?

Jane M. Weinman
Bedford, N. Y.,
April 29, 1986

投書は To the Editor で始めるというのは、生徒にとっては初めて耳にすることであろう。そういう慣習を知らない段階では、上の文章が記事に関する投書であるという状況が意外と飲み込みにくい。

8行目、listen ... and hear が can に結び付くが、極端にいえば、can は hear にだけ結びついている、といってよい。そうすると、here and there は「四方八方至る所で」とはならないようだということに気づく。

11行目 bend=「曲げる」から、この文章のような抽象的な目的語の場合でも文意が取れるかどうか。

god-given などという言葉は、信仰の厚い人からしか出てこないのか、ほとんど教会に行くこともないような人でも使うものなのか？

この学年の生徒は、生物の授業で「沈黙の春」を既に読んでいたので、この英文により親近感を持つことができたようである。またこの学年の生徒には、入学直後に *The Golden Treasury* から T. Nush の次の歌を紹介していた。

Spring

Spring, the sweet Spring, is the year's pleasant king;
Then blooms each thing, then maids dance in a ring,
Cold doth not sting, the pretty birds do sing,
Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

The palm and may make country houses gay,
Lamb frisk and play, the shepherds pipe all day,
And we hear aye birds tune this merry lay,
Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

The fields breathe sweet, the daisies kiss our feet,
Young lovers meet, old wives a-sunning sit,
In every street these tunes our ears do greet,
Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

Spring! the sweet Spring!

この詩を取り上げたあと生徒達が、この詩の中の鳥の鳴き声の部分を口ずさんで楽しんでいるのを、何度も耳にした。この鳴き声の素朴さが好ましかったのに違いない。そんな経験のあとこの投書に出会うと、Nushの歌の中の、素朴で、暖やかな鳥の鳴き声のする世界の貴重さが改めて感じられる。

春

Mama, I'll Call You in a Few Days

I didn't see you for two weeks. I forget what you look like, she said breathlessly after fumbling to pick up the phone.

I'll send you a picture, Mama.

Are you coming this weekend? They're serving coffee and cake Sunday afternoon.

I don't like the home's cake. I'll bring you some from the bakery.

(), you're coming.

I'll tell you later in the week. I don't know yet. So what's new there?

The same. I'm doing my therapy. Sometimes the therapist helps; sometimes not. I suffer and struggle. What can I tell you? Maybe if I keep going, I can lift my arm a little better and not have the walker all the time. Maybe I can get out of here.

Maybe. But do the therapy anyway. (), you'll get worse.

You wouldn't believe what goes on here. This morning, some of those who are out of their minds were screaming in the cafeteria. They didn't like this; they didn't like that. Throwing their food. You wouldn't believe it.

I believe it, Mama.

And tomorrow they're having a fashion show. You wouldn't believe it. Some of them, some of them who wear diapers, they're planning to be in it. And you'll see some of the best dressed ones will be on Medicaid. I'll call you tomorrow and tell you all about it. You wouldn't believe it.

Everything here is fine. Judy is going up to see her mother this weekend. The kids are all doing fine. No news. Maybe one of the girls can get out to see you in a few weeks. I've got to go now, Mama. O.K.? I'll call you in a few days.

So, Cookie called me yesterday. She's sick, too. Doesn't know what to do. To move to Cincinnati to her daughter's, or stay here.

Is Cookie really sick?

She's in a bad way. But she's only 75. And she doesn't know whether to keep her money or put it in her daughter's name. What can I tell you?

I know, it's hard, Mama. I've really got to rush off now. I'll call you in a few days. O.K.?

So, will I see you on Sunday?

Yes, I'll be there.

注) diaper: おむつ Medicaid = Medical aid: 低所得者医療補助

これは、定期考査で「実力テスト的」問題という形で使った。その設問は、次の三問である。

- 1) ()に次の語句から適切なものを選びなさい。重複して選ばないこと。

As soon as So However Otherwise

- 2) 下線の They、they はそれぞれ具体的にはどういう人または物か、日本語で説明せよ。

- 3) この文章は、ある年の5月13日のニューヨークタイムズ(週間版)の社説である。この時期に掲載した理由を日本語で説明せよ。

問2) の They を、施設、(施設の)職員、という類いの答えをした者は、この文章の前半の内容を少なくとも大雑把には把握していると見なすことができる。後半についても同様のことが、they は、この施設にいる老人、という類いの答にもいえる。前半は大半の生徒が把握していたが、後半は幾分か分かりにくかったようである。

「母の日」前後には、NY-WR の社説は、必ずといっていいほど、「母」のことを取り上げている。上の文章もそのうちの一つであるが、35期生には、もう一編、ちょうど1992年の "Mothers, Flowers and Death" と題した5月10日付のものも紹介した。「先頃国連ビルの玄関に50万本のカーネーションが飾られた。それは、この一年間に全世界で妊娠・出産などに際して命を奪われた母親の数を表している」という指摘で始まる文章であった。

上の引用の文章に戻ると、in a few days を「そのうち」と訳したいと思うが、「そのうち、来ますから」という約束のたよりなさを見抜いている母と、そう言うしかない娘を通して、合衆国の人間にも同じ悩みがあることが伝わってくる。

夏

夏に関する文章を NYT-WR から取り上げたことは、これまで結果として極めて少ない。我々には夏6、7、8月のうち7、8月は期末考査・休暇で授業がないということが、こういう結果の主な理由だと思うが、一方取り上げたいものが NYT-WR に余り掲載されないのかもしれない。たまに見つけても、教室で使うにはむつかしすぎるという場合もある。

ところで毎年夏になるとこの社説欄に書かれことがある。少年少女の野外キャンプについて、経済的に恵まれない子供のための寄付を募るキャンペーンである。それは単なるお知らせではなく、また要請の言葉だけではなく、初めて読む者には最後の行で、キャンペーンであったのか、と気づくような文章である。この社説欄の少なくとも1/4を使って、例年書かれている。

秋

次は35期生に紹介したものではないが、野球の国、合衆国の秋の催しの代表と思われるワールドシリーズに関して NYT-WR に載った投書である。

Searching for Truth in the Strike Zone

To the Editor:

While I share Stephen Jay Gould's admiration for Babe Pinelli, that paragon of umpires, I do not agree that the pitch Don Larsen threw to Dale Mitchel to end that effect game was "low and outside." I was sitting directly behind the plate at that game, and I guarantee that the pitch was high and outside — definitely high and clearly outside. Yogi Berra had to stand up to make the catch.

The real error was committed by Dale Mitchel himself, who forgot that cardinal rule for all hitters with two strikes on them: "Never trust the umpire!"

Robert Smith

Lenox, Mass.,

Nov. 10, 1984

これは、11月10日付の "The Strike That Was Low and Outside," という文章に対する、「あの試合の、あの一球は捕手が立ち上がって受けるほどのボールだった」、という同じ11月10日のうちに書かれた投書である。

ソースストライクに追い込まれていながら、正確に判定してくれるだろうと審判に期待した打者が間違っている、というのが面白い。間違った判定をするかもしれないのが審判だ、ということであろうか。

それにしても、この試合においてドンラーセンが完全試合を達成したとはいっても、こんなことまでを投書として採用しなくとも、と思う。それがまた、ワールドシリーズが話題になる合衆国のひとつの秋を表わしているのであろう。

上の文章は他の期で使ったものだが、ともかく、スポーツに関する記事・文章を生徒は喜んで読む傾向がある。35期生には、始めに述べた毎日ウィークリーのエッセイの、スポーツを話題にしているものばかりを連続して使ったことがあった。「次はラグビーにしてほしい」などの要望が生徒からでてきたのを憶えている。

冬

I've Got Your Number

Last Sunday night, sometime after 10:30 P.M., I put an end to my seventh straight day of work. I left behind the stress of my office to confront another set of pressures — finding transportation home on the coldest day of the year.

I didn't have the right change for a bus, nor had I any tokens. So when I found both booths at the 66th Street subway station closed, I re-emerged into ground level,

flustered, a shade more than tired and a hair less than frostbitten — and began to search for a yellow cab with light on top.

That's where we met.

Remember me?

I was the fairly well-dressed man on the corner of 66th Street and Broadway, facing uptown. Surely you must; I was the only there. I was waving to you as I'd think a refugee in a war-torn country world wave to his would-be savior.

You slowed, your cab clearly empty, its back seat filled with only warmth. You looked at me — turned your head in my direction. Was that a smile that played on your lips?

Just as people on foot nod their heads in recognition at those they find vaguely familiar, cabbies, too, signal pedestrian acquaintances, particularly those of my stripe.

You accelerated.

Now, you weren't off duty: If perhaps I had been mistaken, my doubts were soon resolved, when, at the next block, you stopped for the fairly well-dressed man at the corner of 67th Street and Broadway.

The white man at the corner of 67th Street and Broadway.

Through the tears that the sub-zero wind brought to and blew from my eyes, I saw two more of your colleagues pass underneath my raised arm.

My raised black arm.

Until we meet again, Mr. T57030T.

Until we meet again.

Rode Imbriano
a resident of Manhattan, is an
associate producer at ABC News.

これは1993年1月に掲載された寄稿で、辞書を引いた上でなおかつ難しい部分がいくつある。例えば：

I re-emerged into ground level, flustered, a shade more than tired and a hair less than frostbitten.

「どうしたものかと思いながら地上に再び出た。疲れ切って、冷えきって。」

Just as people on foot nod their heads in recognition at those they find vaguely familiar, cabbies, too, signal pedestrian acquaintances, particularly those of my stripe.

「歩いている人が、どこか見たことのあるような人に会釣するように、タクシーの運転手も歩いている人に、とりわけ私のような（身なりが悪くないといったような）タイプの者には、台図を送ってくる。」

If perhaps I had been mistaken, my doubts were soon resolved.

「もしかして間違いだったかもしれない、という疑いはすぐに晴れた。」

それでもとにかく読み進み、最後の My raised black arm の部分まできたとき、読む者は息を飲むような衝撃を受ける。単なる、われわれの知っている乗車拒否の話ではなかつたのだ、と。

連続の勤務が続いた疲れを背負い、帰る乗り物を求めてうろうろした挙げ句の乗車拒否。運転手はこちらに気づいていた。そのタクシーは少し先ではちゃんと客を拾った。その後の車にも拒否され、またもう一台にも。この年一番の冷え込みのきつい夜。吹きつける寒風に目から涙がこぼれ、その涙を吹き飛ばしてしまう寒風、そんな風の吹く夜。

これは季節感を伝える文章といったような生易しいものではない。しかし、読む者が受ける衝撃の激しさは、この出来事が冬の夜であったことでより激しくなる。

読む者にニューヨークの一つの冬を強く印象づけるのは間違いない。

35期生はそれまでに、M.L.King牧師について教科書で読み、ワシントン大行進での演説を部分的ではあるが読み、そのテープを聞き、公民権運動についてNHKのスペシャル番組のビデオを見ていた。そのあとで、NYT-WRのこの文章を読んだので、理解するまでのタイミングとしては、申し分なかったと思う。

おわりに

1978年2月26日のNYT-WRはその社説欄で、Hal Borland(1900-1978)という見出しが、この人物の死を悼んでいる。その追悼文の最初と最後は次のとおりである。

For 35 years, Hal Borland was our correspondent in the universe. There were snowflakes on his beat, and spring rain, a wood thrush singing in the dusk, and apple tree in bloom.

As we reread him at his death last week, we understood better than ever why Hal Borland's reporting belonged on the editorial page. Although he never used word, the man colored every fact with hope.

NYT-WRの社説欄の季節を巡る文章の魅力や、季節に関する投書や寄稿への関心は、Hal Borlandに代表される人たちやそういう人たちに敬意を払った人々の気持ちが、その後も受け継がれているからであろう。これからも機会を見つけて教室で使いたいと思う。

また、アジアか南半球の地域における英字紙でも、このような四季を拾えないものかという考えも持ち始めている。



映画を使った英語教材

—AV機器を活用して—

まつ なが じゅん こ
松 永 淳 子

I. なぜ、映画教材を作るのか

「英語」が実際に話されているのを自分の目と耳で確認しながら学べる教材、という点で映画は大変魅力的なものである。前任校の大坂府立長吉高校では、1987年度より映画をもとにした自主教材作りを進め、効果を上げてきた。生徒たちは明るく、人なつっこく、元気もよいのだが、学習に対する動機付けがされておらず、勉強嫌い。特に英語は、新入生の実に9割以上の生徒が苦手意識を持ち、嫌いな教科に挙げていた。生徒に植えつけられた英語の苦手意識を解消して、「英語は面白い」「英語は使えるんだ」と実感できる授業作りが必要であった。そこで、教師側の様々な工夫を前提に、英会話教材と映画の内容把握教材の二本立ての自主教材作りが始まった。（資料1、2参照）

教材作りは試行錯誤の繰り返しで決して楽ではなかったが、生徒たちは、身近な題材を用いた英会話の授業を中心に「聞くこと」「話すこと」、内容把握教材を中心に「聞くこと」「読むこと」「書くこと」に徐々に慣れ親しんでいき、英語を「使う」ことに違和感を感じなくなっていた。卒業前のアンケートでは、入学時とは対照的に、9割以上の生徒が「英語は面白い」「英語が好きだ」と答えており、大きな意識の変化が見られる。靴屋に就職した卒業生のエピソードがある。——外国人の客が店にやって来た。大学卒の店員たちは、お互いに押しつけあって誰も接客に行かない。見かねた彼がその客の所へ行き、“May I help you?”と一言。あとは身振り手振りを交えたコミュニケーションで無事対応し、客も喜んでくれた。その後は外国人の客が来れば、まわりが彼を頼るようになったとか。——教材作りの疲れも吹っ飛んでしまうような話である。

長吉高校での実践から、映画教材の利点は次のように考えられる。

- ①英語を聞くことに慣れていない生徒も自然に受け入れられる。
- ②音声、動き、表情から総合的に状況を判断でき、理解しやすい。
- ③（長吉の生徒たちにとって、わけの分からぬ記号でしかなかった）英語が「生きた言葉」であると実感できる。

以上の経験から、本校中学3年生の1994年度後期選択授業でも映画を使った教材を作成することにした。前任校とは生徒の環境も年齢も異なるため、教材の難易度等、手探りしながらのスタートであったが、2学期計5回の授業で、「となりのトトロ」の英語版“My Neighbor Totoro”を終えた。長吉高校での実践と共にここにまとめてみたい。

英語会話教材一覧表(1987年版)

大阪府立長吉高等学校 英語科											
N O	教 材 名	使 用 年 度	使 用 年 度	使 用 年 度	使 用 年 度	題 材	対 象	学 年	ペー ジ	成 績	任 務
1	Back to the future. フューチャー	1989年(2学年)	3年就職	コース	40ページ	松永・菅・大西	ペーパー	高	40ページ	オリジナル	(rewrite)
2	Back to the future(revised edition)	1990年(1学年)	3年就職	コース	45ページ	吉岡	ペーパー	高	45ページ	オリジナル	(rewrite)
3	Back to the future(third edition) (バック・トゥ・ザ・フューチャー)	1991年(2学年) 1993年(1学年)	3年就職	コース	44ページ	吉岡	ペーパー	高	44ページ	上記改訂版	上記改訂版
4	English Conversation (Vol. 1, 2)	1988年、(通年)	2年 B ① ②	会話	68ページ	菅	ペーパー	高	68ページ	オリジナル	(rewrite)
5	English Conversation (Vol. 1, 2)	1992年(通年)	2年 B ① ②	会話	46ページ	吉岡・(McCrea)	ペーパー	高	46ページ	オリジナル	(rewrite)
6	E. T.	1989年(3学年)	2年 B ②	コース	22ページ	松永	ペーパー	高	22ページ	オリジナル	(rewrite)
7	E. T. (revised edition)	1989年(2学年) (12月)	2年 B ②	コース	19ページ	吉岡	ペーパー	高	19ページ	上記改訂版	上記改訂版
8	E. T. (new version)	1992年(3学年)	2年 B ②	コース	21ページ	松永	ペーパー	高	21ページ	オリジナル	(rewrite)
9	Frigidance (ユダシス)	1989年(1学年)	3年就職	コース	32ページ	菅	ペーパー	高	32ページ	オリジナル	(rewrite)
10	Japanese Old Tales (日本昔話)	1987年(2学年)	2年 B ②	コース	金子	吉岡	ペーパー	高	金子	オリジナル	(rewrite)
11	The Beatles ベートルズ	1987年(1学年)	2年 B ②	コース	小倉	吉岡	ペーパー	高	小倉	オリジナル	(rewrite)
12	Kids' English service (児童の英語)	1991年(1学年)	2年 B ②	コース	44ページ	松永・菅	ペーパー	高	44ページ	オリジナル	(rewrite)
13	Love Adventure to Laputa (天空の城ラピュタ)	1988年(1学年)	2年 B ②	コース	48ページ	松永・菅・大西	ペーパー	高	48ページ	オリジナル	(rewrite)
14	Hagopedia Story ハゴペイ	1990年(1学年)	2年 B ②	コース	20ページ	松永・(A.V.)菅	ペーパー	高	20ページ	オリジナル	(rewrite)
15	Musica in the Valley of the Wind (風の谷のナウシカ)	1989年(1学年) 1990年(2学年)	3年就職	コース	36ページ	吉岡・真田・田中	ペーパー	高	36ページ	オリジナル	(rewrite)
16	Original yogurt, chocolate, & jazz (オリジナルヨーグルト、チョコレート、ジャズ)	1988年(2学年)	2年 B ②	コース	24ページ	松永・大西・美田	ペーパー	高	24ページ	オリジナル	(rewrite)
17	Songs (we are the world, Yesterday, ...)	1990年(3学年)	3年就職	コース	菅・大西	ペーパー	高	菅・大西	オリジナル	ヒアリング・ディクテーション	(ビデオ使用)
18	Songs of Music ミュージック	1991年(3学年)	3年就職	コース	8ページ	吉岡・菅・大西	ペーパー	高	8ページ	オリジナル	(rewrite)
19	The Beatles ベートルズ	1991年(3学年)	1年講義	25ページ	吉岡	ペーパー	高	25ページ	オリジナル	ヒアリング・ディクテーション	(ビデオ使用)
20	The Beatles(revised edition)	1991年(1学年)	3年就職	コース	25ページ	吉岡	ペーパー	高	25ページ	上記改訂版	上記改訂版

資料2

N O	教 材 名	使 用 年	對 象 學 年	課 時 數	作 業 量	任 務	作成 者	作成形態	指 導 使 用	示 教 器 材	ノ ト
21	Inside Story(物語)	1990年(2学年期)	3年就職コース	42ページ	書類	青原	吉・松永・(McCreas)	オリジナル (Rewrite)✓	LL	CC 使用	間上
22	Post Story(ニューヨークの幻)	1991年(2学年期)	2年就職コース	41ページ	書類	吉・松永	吉・松永	オリジナル	LL	CC 使用	
23	Child SCISSORHANDS(シャーブル・シザーズ)	1992年(1学年期)	3年就職コース	36ページ	書類	吉・松永(A.V.)	吉・松永	オリジナル	LL	CC 使用	
24	Charles' Communication(英会話発展)	1992年(通常)	3年就職コース	28ページ	書類	吉・松永(Well)	吉・松永	オリジナル (修正稿)✓	LL	Communicationの発展 oral communication	
25	HOME ALONE(アローン)	1992年(2学年期)	3年就職コース	29ページ	書類	吉・松永・菅・大西	吉・松永	オリジナル	LL	CC 使用	
26	The LIVING TREE(生きる木)	1992年(2学年期)	1年リーダー	48ページ	書類	福井	福井	オリジナル (Rewrite)✓	リスニングテープ使用		
27	GHOSTBUSTERS(ゴーストバスターズ)	1992年(2学年期)	2年就職コース	47ページ	書類	奥田	奥田	オリジナル	單獨力	壁紙歌謡(合衆國) 壁紙歌謡(日本)	
28	The NeverEnding Story(ストーリー)	1992年(3学年期)	2年就職コース	28ページ	書類	奥田	奥田	オリジナル	單獨力 壁紙歌謡(合衆國) 壁紙歌謡(日本)	壁紙歌謡(合衆國) 壁紙歌謡(日本)	
29	CHARLES CHANG(チャーブリン)	1993年(3学年期)	1年就職コース	28ページ	書類	小林	小林	オリジナル	リスニングテープ使用		

1993年6月1日現在

II. 教材の作成について

・映画のシナリオ化

映画で話されている台詞や映画のストーリーを文字化することが、教材作成には不可欠である。映画の内容については、市販のサイドリーダーを使える場合もあるが、レベルが合わなかったり、扱う映画によってはサイドリーダーがない場合も多い。その場合は生徒の語彙力、文法力に合わせて教師が Rewrite していくことになる。ただ、映画の台詞については、耳で一つ一つ聴いていかなくても、次のようなものが利用できる。

(1)スクリーンプレイ

スクリーンプレイ出版から映画のシナリオ本が多数出ている。台詞だけでなくト書もあり、語句の解説や対訳もついている。また、最近のものはビデオやLDに対応するカウンター番号なども記載されたおり、大変わかりやすく親切な内容になっている。

(2)キャプションシステム

①キャプションシステムとは

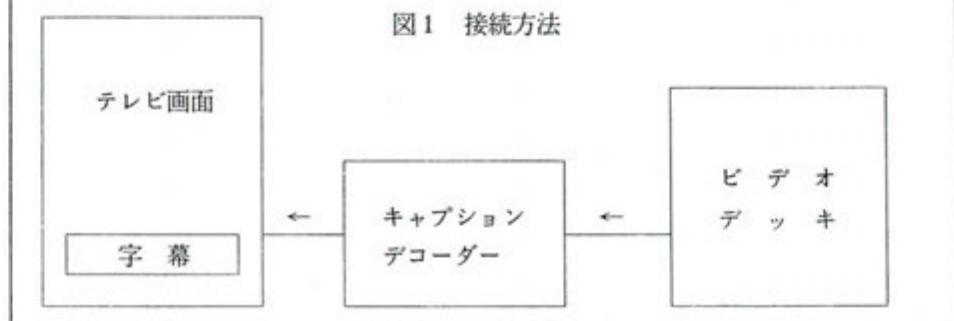
もともとこのシステムはアメリカの聴覚障害者のために開発されたもので、その他にも英語が話せないアメリカへの移住市民の英語教育にも利用されている。英語字幕信号入りビデオテープを、クローズド・キャプション・デコーダーを用いてテレビ画面に写し出すと、画面に英語字幕が表れる。映像と音声から英語を耳で聞き、同時に目でも確認できるシステムである。（写真①②、図1参照）これらはビデオだけでなくLDでも利用できるが、いずれの場合も **CC** あるいは **C** というマークがついたソフトに限られる。

写真①（キャプションなし）

写真②（キャプションあり）



図1 接続方法



②キャプション・デコーダーとは

英語字幕信号入りのソフトから英語字幕を呼び出す機械で、数社から発売されている。値段は機能によって様々だが、2万円代からある。上級機種のデコーダーでは、コンピューター、プリンターと接続することで、キャプションの文字をプリントアウトできるものもある。（これには版権問題がからむので、著作権侵害にならないように配慮する必要がある）

③教材化についての注意点

キャプションの字幕は、限られたスペース内に収められるように作られているため、長い台詞になると実際に話されている言葉の内容を損なわない範囲で省略されることがある。内容把握には特に支障はないが、ディクテーション練習用には、抜けている言葉がないかあらかじめチェックしておく必要がある。

2. ビデオ教材の作成

日々の授業用に、また、復習用に、必要な場面を編集してのビデオ教材も有効である。使いこなすにはかなりの熟練が必要だが、ビデオ編集機があれば30分の1秒の細かさまで合わせて編集することができ、出来上がりも美しい。そこにビデオタイトラーや接続すれば、画面に自由に文字を表すことができる。オリジナルの問題を表示したり、印象づけたい言葉を強調したりと、利用の幅は大きい。（写真③④参照）また、本稿で使用している写真はすべて、ビデオプリンターを使って直接ビデオの画面からプリントアウトしたものである。「となりのトトロ」のワークシート、ビデオ教材にも使用したものであるが、ここまで紹介したこれらの機材は、すべて長吉高校の御厚意で使わせていただいていることを申し添えておきたい。

写真③



写真④



3. ワークシートの作成

前任校、本校での教材作成において、新出単語（難しいと思われる単語）の確認、映画の音声からの聞き取り、まとめた英文のあらすじの読み取り、という点は共通している。聞き取り個所を選ぶ時には、わかりやすい状況設定で、登場人物も多すぎず、発音もクリアであることなどを基準に、特に気をつけている。

「となりのトトロ」の教材化に関しては、英文のストーリー作成に当たり、徳間書店発行の「My Neighbor Totoro」をベースに、一部書き変えて使わせていただいた。

III. 授業の流れ

1. 長吉高校の場合

「1学期に1つの映画」を基準に、ストーリーを細かく分けて順に追っていった。一時間の授業では、〔単語の確認〕→〔テープの聞き取り〕→〔内容の読み取り〕→〔あらすじまとめ〕という流れである。(資料3参照)細かい逐語訳はせず、答えていければ自然に内容把握ができるように問題を工夫している。また、字数制限つきの内容要約は慣れないうちは苦手な生徒もいたが、就職試験に向けて、要点をまとめる練習にも一役買っている。(資料4、5、6参照)

資料3

TEACHING PLAN

1. Date : Wednesday, February 23, third period
2. School : Osaka Prefectural Nagayoshi Senior High School
3. Class : 1-9 class
4. Instructor : Junko MATSUNAGA
5. Materials : "Beauty and the Beast (12)" No.25, No.26
6. Aims : (1)To have students get interested in English by listening to a story in English
(2)To have students understand the outline by listening to and reading the story
(3)To have students summarize the story in Japanese (within 45 letters)
7. Teaching Aids : Tape recorder
8. Teaching Procedure

Time	Contents	Teacher's activities	Students' activities
4	Greetings	Greetings and roll call	Greetings
2	Introduction	Ask some questions about the story of the previous lesson	Recall the story and answer
10	Words & phrases	Give students handouts 'No.25' Pronounce new words and show vocabulary definitions Refer to past tense (hear-heard)	Write down the pronunciation and the definitions
15	Dictation	Give students handouts 'No.26' Read the text twice Use the tape recorder and replay the tape (from the video 'Beauty and the Beast') Collect the handouts and give students their classmates' Show the correct answers (use the tape recorder)	Listen to the teacher and fill in the blanks Listen to the tape and fill in the blanks Check and mark their friends' answers Return the handouts to them
15	Comprehension questions	Walk among the students and check their answers	Answer the questions Summarize the outline in Japanese
2	Conclusion	Collect the handouts Read 1 or 2 summaries Greetings	Greetings

No. 12

E.T. (5)

E.T. comes **Ø** to life. But NASA's scientists don't **Ø**. Elliott and Michael want to let E.T. go home. Their friends **Ø** them. At first they **Ø** NASA's car, and then they change to **Ø**. The boys **Ø** to the forest, but NASA's scientists run **Ø** them.

When the scientists **Ø** powers. The bicycles go up into the air. The boys **Ø** to the forest. They land in the **Ø**. At that time, they **Ø** a spaceship **Ø** lighting brightly.

* * * * *

[At Elliott's house]

Gertie : Are they gone, Manna?

Mary : Who's gone, honey?

Keys : You'll be detained, honestly, eight days to two weeks.

Gertie : The **Ø**.

Mary : What boys?

Gertie : I'm supposed to give you this note when they're gone.

Mary : **Ø** it to me now, Gertie.

[問題 1] 次の問題の答えを、本文から英文で抜き出しなさい。

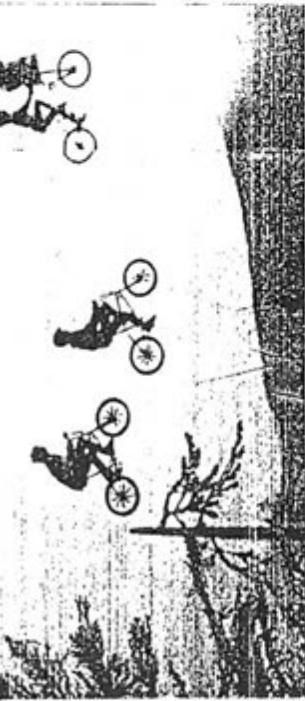
- (1) E.T. はどうなったか。
- (2) エリオットとマイケルは、E.T. をどうしたいのか。
- (3) エリオットたちは、何に乗って逃げたのか。
- (4) NASA の科学者たちは、どうしたか。
- (5) NASA の科学者たちに迷いつかれそうになつた時、E.T. はどうしたのか。
- (6) 燐に書いて、エリオットたちは何を見たのか。

[問題 2] () 内の黒語を並べ替えて、日本語に合う英文を作りなさい。

• エリオットは、E.T. が話すのを聞く。

(talk Elliott E.T. hears)
[]

[問題 3] あらすじをまとめなさい。



Class No. _____ Name _____

英 R SCISSOR HANDS (B)

No. 17

Edward was attracted to Jim. But he couldn't () his feelings. He always () about her.

One day Jim and Jim were in () because they didn't have the house key with them. For Jim, Edward opened the () with his scissorshand. Jim and Jim were () to see that Edward could open the door () a key. They thanked him. Edward became very popular in town. So he got a () 10 be on a T.V. program.

Toean 1 : Have you ever thought of having corrective surgery or prosthetics? I know a doctor that might be able to () you.

Edward : I'd like to meet him.

W.C. : We'll get that name after the (). Thank you very much. That's very nice. ... Anyone else? Yes. Stand right up.

Toean 2 : But if you had regular hands, you'd be like anyone else.

Edward : Yes. I ().

X.C. : I think he'd like that.

Toean 3 : But then () one would think you were special. You wouldn't be on () or anything.

Peg : No matter what, Edward will always be ().

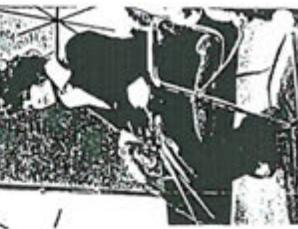
X.C. : More questions? Yes. Stand right up.

Toean 4 : I wonder your work is so (), distinctive and unique. Do you have plans to () your own beauty saloon?

X.C. : Oh, there's an idea. Anyone else?

Toean 5 : Yeah. Do you have a ()?

Toean : Ahh.



資料 5

[問題 1] 開いの答えを本文から英文で抜き出しなさい。

(1) エドワードは、キムへの気持ちを言葉にできなか。

(2) キムとジムは、何を図っていたのか。

(3) エドワードは、どうやって二人を助けてあげたのか。

(4) それを見て、キムとジムはどう思ったのか。

(5) エドワードに、どんなチャンスがやって来たのか。

[問題 2] テープの部分で、女の人们ちがエドワードに質問していることを日本語で簡単に書きなさい。(3つ以上)

44

Class No. Name

第②特集 映画活用術

『ホーム・アローン』を使って

1991年にアメリカ、日本で大ヒットし、早々と続編まで公開されたこの映画の噂は、どこかで耳にした方も多いことだろう。

クリスマス休暇の楽しい家族旅行に行くはずが、今時珍しい大家族のために、どさくさに紛れて忘れられてしまった8歳のケビン。自宅を狙う泥棒二人組に負けじと一人で奮闘し、知恵と行動力で家を守り抜く。観る者は、はらはらしながら頑張れと声援を送り、ラストの家族再会で家族の愛に包まれるケビンの姿にはっと安心する。子どもの視点からのアドベンチャーは高校生の興味を引き、愛と希望の素晴らしいとともに、英語アレルギーの生徒たちにも自然に受け入れられる教材となっている。

授業の流れ

まとまった期間をこの教材に当てることができたため、ストーリー全体を9回に分け、導入・ビデオ視聴時間(計2~3時間)、ワークシートとオーディオテープによる授業(計9時間)、映画を編集し作成したLL用ソフトを用いた復習授業(計2時間)という構成で進めた。変化を持たせる形で、それぞれの形態の授業を交互に入れよう配慮した。

ビデオ視聴(1時間)⇨



ワークシートによる授業(4~5時間)



LLでの復習授業(1時間)⇨



ワークシートについて

ストーリーを、基本単語を用いた120字前後の英文にし、単語レベルの(時には文単位の)空所を10カ所程度作り、聞き取らせる。また、対応する映画の場面から聞き取りやすい対話を選んで5カ所程度の空所を作り、映画の音声のみをおとしたテープを開き取らせる。

聞きながら文字でも確認した英文の内容については、細かい逐語訳はせずに、あらすじに沿った質問に本文

の英語を使って答えさせることにより、ポイントを踏まえた内容把握をさせる。また、50~60字の日本語でまとめさせてことで、自分の言葉としての内容の定着を図る。

聞き取らせる場面の選び方

施設の点で、映像を使っての毎回の授業は難しいため、普段の授業では音声のみを聞かせている。そのため場面選びで配慮している点は、①状況が理解しやすいこと、②なるべく少人数の会話であること(多人数だと混乱がち)、③効果音、雑音が少なく、聞き取りやすいこと——などである。

例えば次の場面では、スーパーマーケットで一人であることを語られまいと「演技」するケビンのとほけた様子がかわいらしい。

CLERK : Are you here all by yourself?

KEVIN : Ma'am, I'm 8 years old. You think I would be here alone? I don't think so.

CLERK : Where's your mom?

KEVIN : Mom is in the car.

CLERK : Where's your father?

KEVIN : He's at work.

CLERK : What about your brothers and sisters?

KEVIN : I'm an only child.

CLERK : Where do you live?

KEVIN : I can't tell you that.

(松永淳子 大阪府立長吉高校)



FOXビデオ【ホーム・アローン】3800円

2. 附属天王寺中学の場合

今年度、中学3年(46期生)選択科目「映画で英語を学ぶ」コースは25名(女19、男6)の生徒が選択している。その選択理由の主なものを次に挙げてみる。(原文のまま)

- ・まず英語がとっても好きで、映画もめっちゃ好きなんで、この講座は2つかねそなえているから。
- ・映画音楽を聴けそうだと思ったから。
- ・美女と野獣のをやって面白かったから。映画が好きだから。
- ・リスニングの力がつきそう。むこうもんの映画を勉強できるから。
- ・英語が好きだし、映画も好きだからです。
- ・私は英語のリスニングが苦手です。だから、映画を見ながらその力がついたらいいなあ、と思ったからです。
- ・映画が好きだから。
- ・映画を見るのがすごく好きで(特に洋画)、いつか苦手な英語でも理解できるようになりたかったし、とても楽しそうだったから。
- ・少数精鋭で質のある授業がうけると思ったから。

まとめてみると、	・英語が好きだから	6名
	・英語と映画が好きだから	5名
	・映画が好きだから	6名
	・映画音楽(英語の歌)が好きだから	3名
	・その他	5名

となる。

選択決定前のオリエンテーションでディズニー「美女と野獣」(前任校で1993年度3学期教材化)のテーマ曲、“Beauty and the Beast”的リスニングを取り入れたことも多少は影響しているが、「英語」と「映画」という要素で選択している生徒が多いと言える。

授業で取り上げる映画は、2学期は宮崎駿作品の「となりのトトロ」英語版に決めた。原作の日本語版も大変ほのぼのとした心暖まる作品だが、英語吹き替え版も原作の良さを全く失っておらず、登場人物の声のイメージもそのままで、さらに良いことに、話される英語がクリアで聞き取りやすい。そして何よりも「トトロが英語になってるなんて!」という意外性。夏に輸入LD専門店でこのソフトを見つけたときには、迷わずすぐに飛びついで買ってしまった。このソフトに関しては、英語版ビデオにはキャプション信号は入っておらず、LDにのみ、キャプション信号が入っている。

①授業の流れ

ストーリーを4回に分け、順に読み進めていく。初回はテーマ曲のリスニングと登場人物の紹介を含む。ストーリーの流れは、英文と、日本語字幕なしの映像で追っていく。第5回目は、主要な場面の聞き取りチェック(復習)(資料10参照)の後、映画全体を通して鑑賞した。(1回の授業は100分)

1回の授業では、〔単語の確認〕→〔ビデオによる聞き取り〕→〔英文の読み取り〕→〔内容要約〕という流れが主だが、時にはまとまった量の日本語を英語にすることも試みてみた(主人公さつきの、お母さんへの手紙等)。長吉高校での教材は、ある程度形が決まっていたが、こちらは始まったばかりで、まだ最適な形式を検討している段階である。3学期の教材、さらにその後と、改善して見つけていきたい。(資料7、8、9、10参照)

(Key Words)

the haunted house

acres

creature

(Words)

1. oversleep

2. completely

3. burn

4. wrap

5. dirt

6. scatter

7. bury

8. appear

9. mysterious

10. underneath

11. peer

12. passageway

13. grab

14. tunnel

15. pour

16. racoon

17. droopy

18. tickle

19. yawn

20. rust of wind

21. roar



Satsuki: Daddy! daddy, wake up! It's morning!

Father: Ohhh.

Wei: Daddy! @ _____. It's Wei!

Satsuki: Good morning.

Father: I must have overslept.

Satsuki: We get our @ _____.
Satsuki: I made lunch for everybody.

Father: I'm sorry. I completely forgot.

Satsuki: @ _____.
Wei: Hey, it's burning.

Satsuki: Just a minute! OH! This one's for you.

Wei: That one's mine.

Father: Wei, stop that. @ _____.
Satsuki: Go ahead. @ _____.
Wei: @ be scattered

Satsuki: Sure, I will. TOMORROW.

Satsuki: See you later, Daddy. @ _____.
Father: Already? Wait a minute.

Wei: @ _____. You're home so late?

Satsuki: I was playing with Michiko. @ _____. ?

Father: It's funny. I haven't even eaten my lunch.

I think Wei's out back.

Father and Satsuki: Wei! Wei! Wei? Wei?

Satsuki: Daddy, @ _____. I think I know
where Wei went.

My Neighbor TOTORO No. 15

Class No. Name

1 Operator:Hello, operator.

Satsuki:I'd like to make a call, please.

It's very important. It's number at station

2. Yes. Thank you very much.

Old woman:Your friend is very . What lovely hair.

[Ring]

Satsuki:Hello. Yes. Can you to the main

lecture room of the anthropology school? To professor

Kusakabe. Please hurry. Yes, yes, .

It was from the hospital. Daddy. I'm so worried.

Father:Whoa. Whoa. Slow down. From the hospital?

3

Nanny:What I heard was that your mother

a small cold, eh? She'll be home next weekend, I believe.

Satsuki:That's , just a few days to see what's wrong

with her. It's just a cold. What are we and Mei going

to do if Nanny dies?

Nanny:Uh, uh.

Satsuki: going to do, Nanny?

Nanny:There, there. Don't worry. Your mother's not going to

die. Hush. She'd two such beautiful

children. She loves you too much .

Don't cry. Nanny will stay with you until your father comes

home.

資料 8

3
Kanta : Satsuki, wait! ① _____
Satsuki: Kanta!
Kanta : We haven't ② _____ . How about you?
Satsuki: Nothing.
Kanta : Hey, my dad's got everyone in the village searching for her, so you go home. And ③ _____ to Shichikokuyama. OK?
Satsuki: But I'm afraid ④ _____ hospital, she'll completely lose her...
Kanta : Wait a second, ⑤ _____ some sandals by the lake ⑥ _____ .

4
Satsuki: What? Totoro! Totoro, ⑦ _____
I looked and looked, but ⑧ _____
Oh, please, ⑨ _____ She's probably along somewhere ⑩ _____ . Oh, Totoro, I'm scared.



My Neighbor TOTORO No. 16 Class No. Name _____

Chapter 4 Wei Gets Lost

(1) One bright summer day, Wei and Satsuki decided to help Nanny in her garden. They were very excited because they had heard their mother was better and would be allowed to come home for a few days. The girls picked fresh corn, cucumbers, and tomatoes for her to eat.

(2) Nanny was happy too. "We'll have to feed her a lot, girls, so she'll get better. Nanny's vegetables get plenty of sunshine, they will be very good for her." "I'm going to give her this corn that I picked all by myself!" Wei exclaimed.

(3) Just then, Kanta ran up to them with a telegram from the hospital. Satsuki exclaimed, "Something happened to Mom. I'd better call Dad at the university." Satsuki and Kanta ran off so she could use the phone at his house. Wei took her ear of corn and tried to follow.

(4) When Satsuki told her father about the telegram, he calmly replied, "OK. I'll call the hospital right away. In the meantime, you stay put and I'll call you back as soon as I know how she's doing." Satsuki worried about her mother as she waited anxiously for her father's call.

* * *

* * *

* * *

* * *

* * *

(5) The sun had already begun to set when Nanny and Satsuki discovered Wei was missing. "We had a fight earlier. She might have gone to Mom's hospital. I'm going to look for her!" "Wei, Wei!" Satsuki yelled for her sister as she ran down the road to the hospital. Nanny was worried, too. She yelled to her grandson, "Kanta, tell everyone that Wei is missing!"

The

villagers

helped

them

look

for

her.

(6) Satsuki went to ask Totoro, "Totoro, please help me look for Wei!" Totoro picked up Satsuki with his big hand and roared. Something in the distance came running toward them. It was the Catbus! Satsuki got in and the Catbus sprinted quickly over the rice fields and woods. And he stopped right in front of Wei.

(7) The Catbus took them to the Shichikokuyama hospital. They stopped in a tree in front of the hospital and watched for a while through the window as their mother and father talked. "Mom looks good," Satsuki said with relief. "Yeah, she's laughing with daddy," Wei said happily. The Catbus stayed gently through the air. And he took the girls back home.

（要約してみよ♪）Let's summarize!

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

(6)

(7)

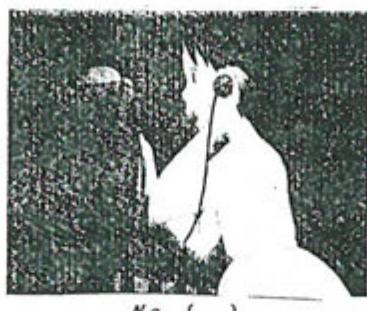


資料10

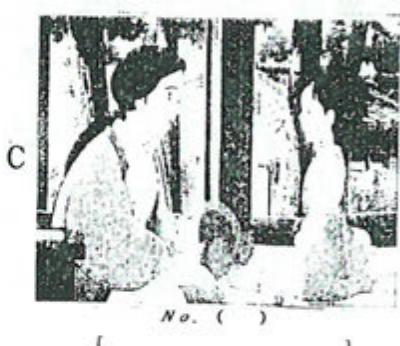
テープを聞いて、話されている場面を下の絵の中から選び、番号を()内に書き入れなさい。また、そこで話されている表現を一つ〔 〕内に書き入れなさい。



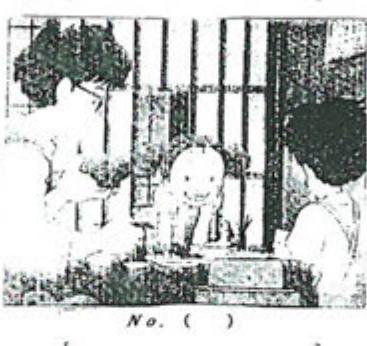
A



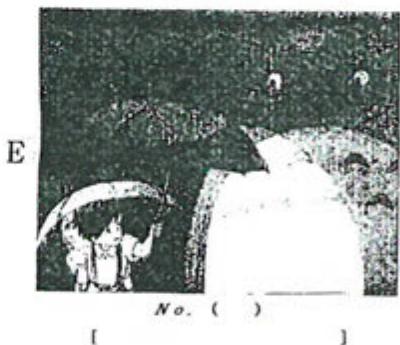
B



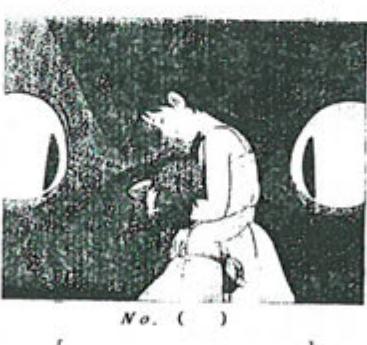
C



D



E



F



G



H

N a m e o n C l a s s

②生徒の反応

2学期最後の選択授業で、受講した生徒にアンケートをとった。（答えは原文通り）

(問1) この講座をとって良かった点は何ですか。

- ・「トロ」がみれたこと。聞き取りが楽しいこと。
- ・今はよくわからないけど、きっとリスニングの力はついてるんじゃないかなぁと思います。
- ・聞き取りがしやすくなった。
- ・英単語を覚えることができた。
- ・知らない単語とか知ることができたし、普段だったら、こんなしゃべってる時のスピードの早いの聞き取りとかできないし、あんまり分からなかったけど、分かったのはうれしかったし、すごく楽しいです。
- ・“聞き取り”の力が前より少しだけついたような気がする。それに楽しんでできる。
- ・たぶん、ヒアリングの力が、すごいついたと思う。前後の文から、穴の所を考えたりしたから、文法の力もついたと思います。
- ・聞き取る力がついたかなぁ……と思う。読み取る力も。
- ・映画が見れてうれしい。
- ・リスニングの力がついたと思う。和訳、英訳も少し慣れた。
- ・要約ができるようになった。

まとめると、・リスニングの力がついた 16名

・単語が増えた 4名

・英語に慣れた 4名

・映画を見られた 1名

となる。

これらは生徒たちの「感想、印象」であるため、客観性に欠けるが、少なくとも彼らが「その気」になっていることは事実である。また、今後の授業についての要望も聞いてみた。

(問2) この講座についての要望はありませんか。

- ・もっといろんな映画を見たい。
- ・もっと単語を知りたい。
- ・日本語を英語にする作業を少なくしてほしい。
- ・English→Japaneseばかりなので、もっと、Japanese→Englishの課題もしてほしい。

まとめると、・このままでいい 7名

・いろんな映画を見たい 4名

・違ったこともしてほしい 4名

・英訳をへらしてほしい 3名

・和訳をへらしてほしい 2名

・宿題をへらしてほしい 2名

・英訳をふやしてほしい 1名

・ゆっくりしてほしい 1名

・単語をもっと知りたい 1名

今後も、少しずつ変化をつけながら、いろんなことを試していこうと思う。

IV. おわりに

長吉高校での実践は自分なりにまとめや反省もあるが、本校での私の取り組みは、まだほんの第一歩を踏み出したところである。時間をかけながら自分の方向を捜していくかねばならないと考えている。なお、「となりのトトロ」の教材化にあたってのビデオ編集やキャラクション使用、また本稿の資料となる写真の打ち出し（ビデオプリンター）などに、映像を用いた斬新な教材を作り続けておられる長吉高等学校英語科の菅正隆先生の多大な御協力を頂いた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

参考文献

- 〔1〕「My Neighbor Totoro」（徳間書店）
- 〔2〕「screenplay E.T.」（スクリーンプレイ出版）

参考ビデオ

- 〔1〕MCMビデオ「E.T.」
- 〔2〕FOXビデオ「edward SCISSORHANDS」
- 〔3〕FOXビデオ「HOME ALONE」
- 〔4〕FOXビデオ「My Neighbor Totoro」

平成6年度 教科・個人研究テーマ一覧

国語科	単元学習への取り組み	中田勝夫 廣瀬明浩 森中敏行	地層に関する実験的学習 STSモジュールの作成 水に関する教材化(生物分野)
金藤行雄 小山秀樹 琢磨昌一 中西一彦 平田達彦 樹井英人 松山典子	適切な言葉を見つける 主題単元学習の試み 古典教材の編成一大鏡を軸として— 単元学習の摸索と実践 主題単元学習の試み 一古典(古文) から現代(現代文)を通してー 表現のための道すじ 単元学習に学ぶ	保健体育科 浦久保寿彦 鎌田剛史 角保宏 武井浩平 田中謙	生涯スポーツの確立をめざして 球技指導について バスケットボールの授業について バレーボールにおけるメンタル・ トレーニングの必要性について バスケットボールの授業における チーフディフェンス、チームオフェンスの工夫 学習内容の段階化について —中高6ヶ年を見通して—
社会科	中・高社会科の再検討	楠本久美子 瀬崎浩美	小・中・高12年間の健康、体力 から観た疲労について
生川年雄 甲山和美 高木正喬 田原悠紀男 出原真哉 吉水裕也	資料の活用 新課程公民科教材の精選と再編成 老農 中村直三の教材化 新教育課程の中・高教科書の比較 自己展開学習をすすめるために ディベートを用いた地理的事象の シミュレーション	音楽科 諸石孝文	合唱と創作の指導 創作領域でのコンピュータの活用
数学科	教材の精選	美術科 宇田秀士	教科構造の生成と学習内容の構想 “複合的領域”題材の開発と指導
乾東雄 岩瀬謙一 大石明徳 瀬尾祐貴 藤田幸久 松本明美 柳本哲 吉村昇	空間図形の把握とその指導 数学的モデリングと応用について 空間図形の把握とその指導 空間図形の把握とその指導 数学的モデリングと応用について 空間図形の把握とその指導 数学的モデリングと応用について 数学的モデリングと応用について	技術家庭科 上田学 良千恵子	新領域の指導とその評価 技術教育における環境問題の指導 法とその評価 家庭生活と他領域との関連性と指 導方法について
理科	水を題材とした授業研究	英語科 伊藤洋一 井畠公男 金井友厚 高橋一幸 富田大介 東元邦夫 松永淳子	オーラルコミュニケーションの指導 自己表現力の育成 英語鑑賞能力の育成 意欲的に個性・創造性を發揮させ る指導 コミュニケーションに対する積極的態 度と能力の育成、およびその評価 教科書題材の深化、発展 (内地留学中) リスク能力向上の具体的な方法 コミュニケーションを取り入れた学ぶ 意欲をひき出す授業(中学1年生)
井上広文 井野口弘治 大仲政憲 岡博昭 柴山元彦	生徒の授業記録ノートの分析 力学学習の視点の整理について 附属天王寺方式化学のカリキュラム 水に関する教材化(生物分野) 附属天王寺方式化学のカリキュラム 川の教材化 化石の教材化		

研究集録 第37集

平成7年 3月15日印刷
平成7年 3月16日発行

大阪市天王寺区南河堀町4-88
編集発行者 大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校
大阪教育大学教育学部附属高等学校天王寺校舎

代表者 早川勝廣

印刷所 イマノ印刷工芸社